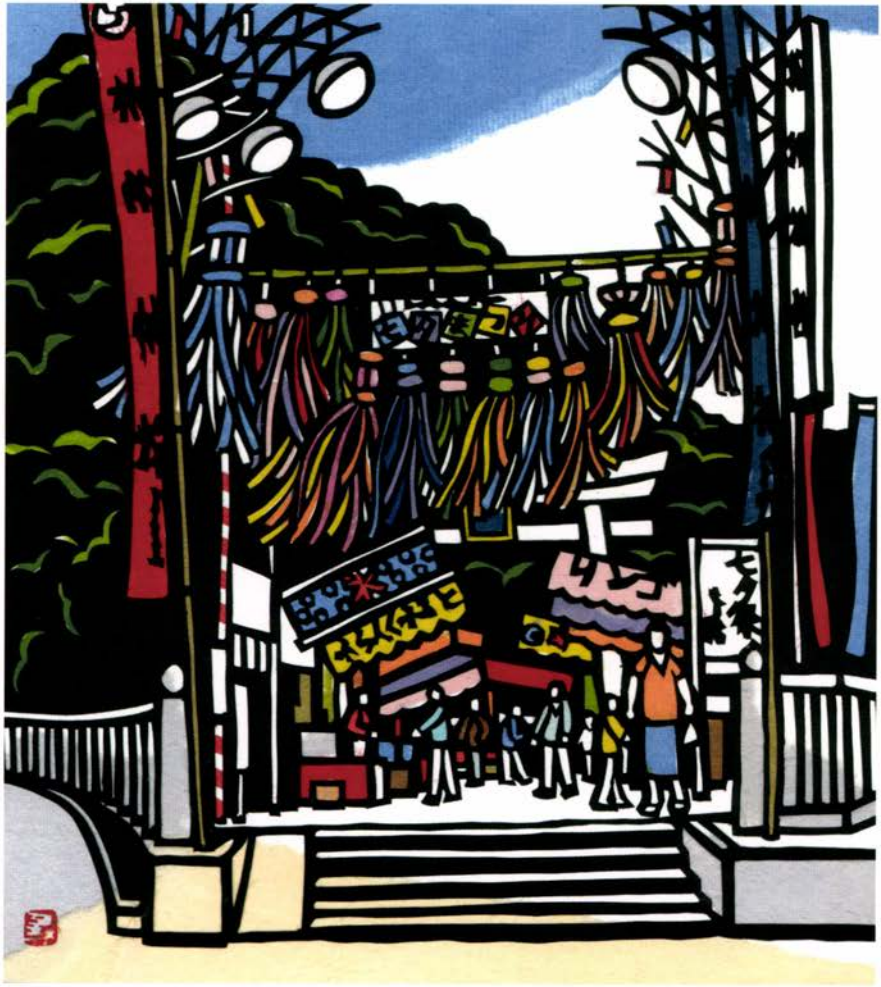
川柳塔

創刊大正十三年　通巻一〇九四号



日川協加盟

No.1094

七月号

―路郎賞・川柳塔賞の応募は八月号の刷り込み用紙で―

① 川柳塔欄・水煙抄欄に6か月以上、出句した人に応募資格を認める。

② 平成29年9月号から平成30年8月号までの入選句（自分の句を出句する）

③ 8月号刷り込み用紙に5句を楷書で書き8月10日必着のこと。

昨年九月から今年八月の間に誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を選択して応募して下さい。

ただし「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳塔賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、間違いのないようにお願いします。

6月18日午前7時58分、大阪北部を震源とする震度6弱の地震が発生しました。被害に遭われました皆様へお見舞いを申し上げますと共に、一日も早い復興を心よりお祈り致します。

川柳塔社

選者交代のお知らせ

九月号（七月投句締め切り分）から来年八月号までの選者を次の通り交代します。

水煙抄　西出楓楽

檸檬抄　川端一歩　山岡冨美子　共選

川柳塔社

「檸檬抄」課題

共選

発表	月	課題	締め切り日
30年	9月	頭	7月15日
	10月	返す	8月15日
	11月	アンテナ	9月15日
	12月	ジレンマ	10月15日
31年	1月	鮮やか	11月15日
	2月	振る	12月15日
	3月	あれこれ	1月15日
	4月	ぴかぴか	2月15日
	5月	草	3月15日
	6月	柱	4月15日
	7月	添える	5月15日
	8月	普通	6月15日

第42回　全日本川柳２０１８年　熊本大会

小島蘭幸

熊本地震から二年、大きなクレーン越しに見る再建途上の熊本城は痛々しかったです。「熊本城が見たくまもと四〇〇年」と題して記念講演をされた、吉丸良治熊本県文化協会名誉会長は、石垣など総てを再建するには、二十年はかかるでしょうと言われました。熊本城の勇姿、この眼で確かめたいものです。

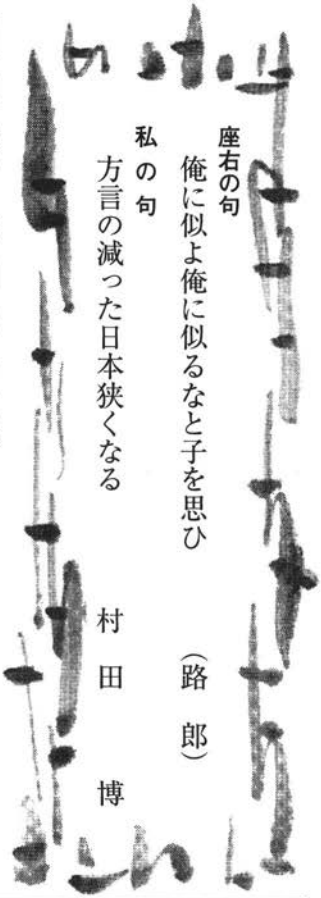
第42回全日本川柳熊本大会、前夜祭は、ＮＨＫ熊本児童合唱団の美しい歌声から始まりました。透き通る歌声、私は熊本が大好きになりました。表彰式の最後は、第11回川柳文学賞です、受賞者の皆様おめでとうございます、そして有難うございました。竹本瓢太郎全日本川柳協会副理事長の乾杯の音頭で、懇親、交流会は始まりました。美味しい料理とお酒に、出席者三百名以上の皆様の笑顔が弾けます。アトラクションは、「肥後ちょんかけごま」。私は小学生の頃、近所に「ちょんかけごま」の名人がいたのを思い出していました。

あたたかく和やかな前夜祭でした。

宿泊先のホテルのロビーで、次回開催地の浜松市の皆様と歓談する事が出来ました。出席者は、八〇〇名を予定して準備にあたりますとの事でした。楽しみです。

平田朝子全日本川柳熊本大会実行委員長の力強い開会の言葉から大会は始まりました。お祝辞をいただいた熊本県副知事、熊本市長は、川柳句集『熊本地震の記憶』の中の作品を引用されて、川柳人の逞しさに感心しておられました。

ジュニア、一般部門の選者十名、見事な披講と選評でした。生の披講を直に聞く、もう最高です。川柳塔社から新家完司理事長が第二次選者を務められました。文部科学大臣賞は、山梨の小林信二郎氏、同人では平井美智子氏が大会賞を受賞されました。ジュニアでは、佐賀の真島芽さんが全日本川柳協会賞を受賞されました。大会終了後、完司、美智子、和女、文切、蘭幸の五名は、居酒屋でカンパイ!!祝杯を上げました。



座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ　（路郎）

私の句

方言の減った日本狭くなる　村田博

川柳塔　七月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「七夕祭・交野機物神社」

■巻頭言　第42回　全日本川柳２０１８年熊本大会……小島蘭幸…（1）
石曽根民郎さんのこと……清博美…（2）
川柳塔（同人吟）……小島蘭幸選…（5）
川柳塔の川柳讃歌 ⑯③……木津川計…（45）
自選集……（46）
句集の森……（49）
温故知新……（49）
水煙抄……川上大輪選…（50）
橘高薫風句抄……（68）
追悼　上垣キミヨさんを悼む……堀正和…（69）
誹風柳多留一二篇研究 61……（70）
■エッセイ（貧乏神さま）……出久根達郎…（72）
愛染帖……新家完司選…（74）

石曽根民郎さんのこと

清博美

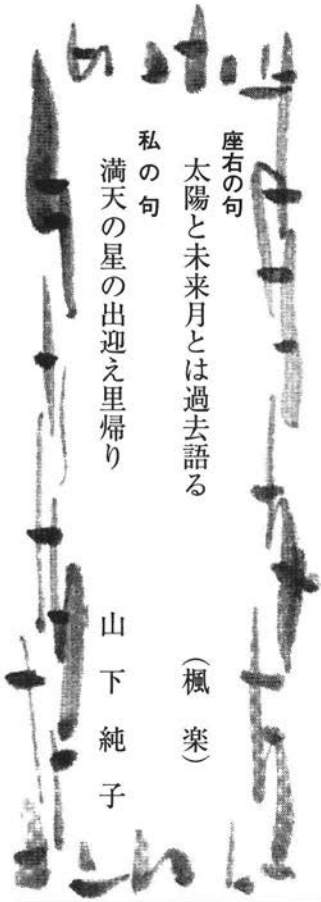
平成四年に『雑俳川柳研究文献目録』を編纂刊行したことがある。

その時、現代川柳誌にも掲載されているであろう、古川柳に関する文献を求めて、北は盛岡から南は広島まで車を走らせた。しかしそれでも満足出来ず。松本の石曽根さんをお訪ねすることにした。

石曽根さんは、私が岡田甫先生の門を叩いたとき、一番最初に紹介された御仁だった。

さて、訪問した目的を話し、集めておられる雑誌を拝借したいと申し出たところ、既に「松本図書館に寄贈してしまった」とのこと。その足で図書館を訪問、閲覧を申し出たが、それは地下室に埃まみれで放置されていた。この状態は、寄贈者に対して失礼だろうと思ったが口には出さず、この整理を提唱した。図書館も渡りに船だったのだろう。石曽根さんと相談の上、持ち出しを許可してくれた。

檸檬抄「退　屈」……山口光久・斉尾くにこ共選……(78)
英語 de Senryu ⑲……吉村侑久代……(81)
一路集（「ちぐはぐ」……山口高明選……(82)
「通　知」……中村　恵選……(83)
初歩教室「　蟻　」……居谷真理子……(84)
川柳塔鑑賞……福士慕情……(86)
水煙抄鑑賞……栃尾奏子……(88)
せんりゅう飛行船 ㉑……新家完司……(89)
インスピレーション・ナビ　印象吟……大西泰世……(90)
六月本社句会……(92)
句会燦燦……弘津秋の子……(96)
各地柳壇（佳句地十選／村上玄也・桝本宏子）……(97)
七月各地句会案内……(110)
柳界展望……(112)
川柳塔WEB句会「落ち着く」……青砥たかこ・石橋芳山共選……(114)
■編集後記（ひとこと／黒田茂代）……朱夏・憲彦……(146)



座右の句

太陽と未来月とは過去語る　（楓　楽）

私の句

満天の星の出迎え里帰り　山下純子

何しろ一万数千冊の雑誌である。一度に持ち出すのは不可能。そこで、自動車に積めるだけ積んで持ち帰り、自宅で分類整理、古川柳に関する文献を採取した。埃まみれのダンボール箱だから、車は汚れるし、自宅では廊下を使用して作業をしたが、ここも埃だらけ、これには往生した。これを繰り返すこと三年。その後も、石曽根さんがお亡くなりになるまで、この作業は続いた。

松本図書館は、現代川柳誌の宝庫となっている。これを利用しない手はない。川柳愛好家は大いに利用すべきであろう。少々遠隔の地にあるのが難点ではあるが。

石曽根さんにお逢いしたはじめのころ、これはうろ覚えの記憶で申し訳ないのだが、「川柳雑誌」を手元に置いて、「僕はここからスタートした」とおっしゃられたように記憶している。私もまた古川柳に関係し始めた頃から、「川柳雑誌」・「川柳塔」には長い間お世話になって来た。人と人の繋がりの不思議を感ぜずにはいられないのである。

創立95周年記念事業基金のお願い

大正13年に麻生路郎が創刊した『川柳雑誌』を源とする『川柳塔』は、明年にて創立95周年を迎えることになります。これを記念いたしまして【川柳塔誌電子化事業】を立ち上げました。事業の柱とするものは『川柳雑誌』創刊号から近年の『川柳塔』誌にいたるすべての冊子を電子化し、ホームページ上に公開するという文芸史上まれに見る壮大な試みです。

この電子化事業により天災等による消失の心配はなくなり半永久的に保存できます。また、どなたも家庭に居ながら自由に閲覧が可能になります。

すでに『川柳雑誌創刊号』と『川柳塔』誌の数冊は公開していますが、千冊を超す電子化にはかなりの経費が予想されます。つきましては、本事業を推進するための基金を同人並びに誌友諸兄にお願いする次第です。

本事業の趣旨と意義をご理解くださいまして、ご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

基金は１口1,000円として何口でも結構です。同封の【創立95周年記念事業基金】と記した振込用紙にてお願い申し上げます。なお、基金受付は今年の10月末日までと致します。

川 柳 塔 社

バックナンバーをご寄贈ください

上記電子化事業推進のため下記の冊子を求めています。お手元にお持ちの方はご寄贈くださいますよう、お願い申し上げます。

なお、寄贈いただきました冊子は自動スキャナー機にかけますので返却できません。ウエブサイトにお名前だけ記録させていただきます。

【川柳雑誌】 創刊号（大正13年）から 107号（昭和６年）
109号（昭和７年）から 151号（昭和11年）
153号（昭和11年）から 304号（昭和27年）
306号 及び 307号（昭和27年）

【川 柳 塔】 461号（昭和40年）から 799号（平成５年12月号）
831号（平成８年８月号）
835号（平成８年12月号）

問い合わせ先：〒689-2303 鳥取県東伯郡琴浦町徳万５９７
新家完司（事業統括） 電話 080-1910-2787

川柳塔

小島蘭幸選

鳥取県　斉尾　くにこ

ハッピーをはさんだサンドイッチです
ペアの指輪がいつか浮輪になっている
冷蔵庫磨き居場所をなくす味噌
お箸いりますか私はいりますか
慎ましくガッツポーズしてつづく
人に傷つき人に癒され人のなか

箕面市　中山　春代

豆を煮るとろ火のような恋もよし
薪でたく風呂がごちそう登山宿
引き返す勇気があれば大丈夫
大盛りにする兄ちゃんの豆ごはん
イヤイヤ期夫が首を横にふる
ほろほろと欠片になっていく記憶

大阪市　平井　美智子

馬車はもうカボチャスープになりました
傾いた母に傾きながら添う
助っ人はアンパンマンの抱き枕
「ありがとう」「ごめん」を貯金して家族
そのままで良いと笑ってくれた風
大声を出そう大好きだと言おう

橿原市　居谷　真理子

古い服捨てる五月の晴れた日に
渡れない川をはさんで見つめあう
生きるってピーヒャラドンドンワッショイショイ
バーガーは卒業二人で飲むワイン
眠るとき象は鎖をつけられる
竜は天に犬は地べたで吠えている

大阪市　髙杉　力

作風が変わるか動脈癌手術
迷うから聞かぬセカンドオピニオン
いざ手術美味しいビール飲むために
病床の窓から球児たちを見る
手術成功いいねの声に包まれる
看護師さんに冗談言えるようになり

篠山市　酒井真由

友が逝くふるさと便はもう来ない
ふる里を想う駅舎の灯がともる
誇り高き男が愛す野のすみれ
豊饒の地へ一粒の麦を蒔く
まずは一献起死回生の策を練る
平凡な日々です心地よいめざめ

貝塚市　石田ひろ子

いつまでも昭和引き摺る衣更え
鬱の日はオアシスになる古本屋
ばあちゃんは諺で説く人の道
飲んだ事忘れ薬を確かめる
時々は自分を褒めて花を買う
バーゲンでピンクの春を買いました

大阪市　田中ゆみ子

しんどいと思う白バラの気品
赤い薔薇一輪が良し誕生日
反省をしたのに同じ轍を踏む
ライバルに感謝追い越してみせる
はじめから子には期待をしていない
葱坊主曲がったことは大嫌い

八王子市　川名洋子

やわらかい思い出拾うちひろの絵
早朝の散歩で今日をオンにする
破ってばかりです妻との約束
優しかった人を思い出して春
モノクロの心にポンと芝桜
背を丸め歩いてないか確かめる

松山市　栗田忠士

生き恥の一つや二つ冬薔薇
伸び縮み自由自在のしたたかさ
捨てられぬ父の匂いのソフト帽
IT化まだ黒板は生きている
洞と瘤それでも凛と立つ巨木
絶滅危惧種になりそうもない油虫

松江市　松本文子

ノート開く人間陶冶に程遠く
耐え忍ぶなんて似合わぬ性らしい
散った花何か言いたそうだった
ゆっくりとコーヒー電話が鳴っている
桜花も最後の列車見送った
待つ事が仕事今日もお留守番

羽曳野市　藤原大子

雑学で拾う楽しく生きる道
ゆったりを目指し只今修業中
新緑に会う約束をしたくなる
もらい泣きできる涙がまだあった
切り札をまだ持っているらし強気
気の弱い犬だ終ってから吠える

河内長野市　山岡冨美子

和菓子屋の跡地に建ったケアハウス
古書店の店主はなぜか鼻眼鏡
贅沢なひととき春信と遊ぶ
おばさま族集えばそこは亜熱帯
転び癖つけてしまった前のめり
次頁へ傘のしずくは消えぬまま

倉吉市　牧野芳光

地を這って探す四ツ葉のクローバー
菜の花の向こうに団塊の子供
温かい方言寒い鼻濁音
格言のひとつひとつが気に触る
肩書きを守ることには飽きてきた
分別をつけずどこでも顔を出す

三田市　久保田千代

梅一輪づつのリズムで春が来る
少しづつ喋りたくなる春の庭
コロコロと上手に下りる老いの坂
連なって下りれば坂も恐くない
輪になって飲むと仲間の音がする
この世から消えて行き先ある私

寝屋川市　森茜

振り向かずあなたが発った白い朝
バラードが流れる学生街の駅
おだやかに法話 青葉する寂庵
衣更えせねば 梅酒は琥珀色
あん蜜に昨日のいたみ溶けそうな
あの人もおとしを召した知らぬ振り

大阪市　岩﨑玲子

何見ても胸キュンになる古稀の春
ライバルをサプリメントにして元気
ほろ酔いの時のわたしが本物だ
挑戦は動けるうちに旅に出る
臓器カード財布の中で皺くちゃに
いい嫁をもらってくれた息子に感謝

唐津市　山口高明

臨界の事故改善は人柱
赦される嘘と許せぬ嘘がある
我ながら辛抱したと翡翠婚
まだ生きて居たかと親友のご挨拶
筆順が違う十歳五十歳
パトカーに乗って迷子の姑帰宅

岸和田市　宮野みつ江

絵手紙に藤の花描く誕生日
幸せだった青が好きだった頃
来春も咲かせる姑の黄水仙
折折に色を注ぎ足し生きてきた
私にマゼンタ足してくれたひと
夫逝き青い鳥までいなくなり

米子市　吉田陽子

あんぱんのトップスリーは変わらない
捨てたのか無くしたのかが分からない
しんなりと乳房も鬱に耐えている
ペン持てば定まる今日のスケジュール
ドライブスルー若葉風など下さいな
うっかりと長寿祈願をしてしまう

札幌市　三浦強一

領土侵入許そうお隣の桜
ヒト科みな詫びねばならぬ温暖化
新聞の性善説を拾い読み
ちらちらと互いにどなただったかな
つい点を打ちたくなるの涙の字
老い二人励まし合って家事雑事

笠岡市　藤井智史

独りでは何もできない桃太郎
良縁に巡り会えない桃太郎
鬼ごろし呑んで陽気な桃太郎
御朱印を集めるフリの婚活だ
シルエットナイトが君のこと守る
かわいい子沢山居そう神社寺

尼崎市　山田耕治

猫が来てもう寝なさいと言うていく
台風は来たが銀杏まだ青い
無精髭これもわたしの顔である
三度読んで見落としていた句を見つけ
柔らかくなった賞味期限切れた
父独りわりときれいに暮らしてる

塩竈市　木田比呂朗

テレビ見て様子伺うクールビズ
夏休み追加予算の悲鳴聞く
晩酌も夏バージョンの冷や奴
頑張っているが体重減らぬ妻
道の駅安近短があふれてた
図書館で喜怒哀楽を補充する

和泉市　横山捷也

八十の自分の顔を見る鏡
じいさんと呼ばれましたが僕ですか
カラフルな薬何だか効きそうだ
まだ使ったことないマイナンバー
免許証返すと野菜作れない
減塩で寿命が延びる気になった

豊中市　松尾美智代

石と石の間から芽を出す紅葉
生きる力輝いている五枚の葉
心地よい目覚めひとりで飲むコーヒー
やわらかい初夏の日ざしの中歩く
亡母だろうやさしい風が吹いている
タイムマシン逢いたい人がひとりいる

乗って来たタクシー待たせレジ袋
開発を許してくれぬ土石流
素面では言えず酔ってはなお言えず
欲しいだけ与えていると癖になる
用も無いのに長生きをしてしまう

愛知県　早川　遡行

春風が羽目外そうとささやいた
少子化を嘆く公園草が伸び
笑点の時間電話がこぬように
妄想の中で言いたい事を言う
わがままになりそうこんなにも自由

犬山市　金子　美千代

楽しげな会話花壇のボランティア
コーラスの中で独唱してる人
日本が案山子のようになる気配
忘れないようにと一度目を閉じる
生きて来た証なんです顔の染み

犬山市　関本　かつ子

指先の爪まで笑う彼のギャグ
心の枠はずして風を入れている
監視カメラがマークする嫌な町
山笑うぼくも笑って共存する
月の夜どの屋根みてもほがらかだ

鈴鹿市　小河　柳女

平成を一足飛びにさせた趣味
何故そんな生年月日隠すのか
誕生日在って此の世の人になり
どうしたの急に優しくなる八十路
七十代最後の年を慈しむ

富山市　島　ひかる

連休も平日もなくこなす家事
傘持てと気象予報士母のよう
ツーカーの仲にも少し隠し事
百均にベンツを止めてお買物
そのうちに出来なくなるさ草テニス

可児市　板山　まみ子

昭和でもランプ暮しを見た過疎地
眺望に先祖が惚れた古城山
童心に還り思わず岡山弁
先祖らの想像絶すゴルフ場
過疎だった古里人気スポットに

奈良県　安福　和夫

知らぬ土地スマホひとつにガイドされ
安全な場所で批判の上手い人
老犬がゆっくりリードする散歩
天命があると思って老いの坂
相談ごと三人寄ればやがて酒

奈良県　谷川　憲

奈良県　中原比呂志

連休も鳩首会議の永田町
力学が政治の方へすべり出す
蝕んでいるとも知らず食べ放題
高官は嘘うそウソの防波堤
都市砂漠本当の砂漠になりそうな

奈良県　長谷川崇明

連休も二人暮らしに変わりなし
百薬の長の効き目は問わず飲み
しめ鯖がそろそろ旨い酒二合
心技体共に歳です下り坂
今のままずっと戦後を続けたい

奈良県　渡辺富子

飛んで飛んで地球脱出するつばめ
身の内の愁い呑み込む昼の月
価値観が同じであくび移し合う
波風へ身を庇うもの見当たらず
誤字脱字いっぱいあってわたしです

奈良市　阿部紀子

アマリリスボランティア宅咲き誇り
ばあちゃんに一鉢貰い良く育て
二十年過ぎ満開のアマリリス
娘が自宅近所も分けてアマリリス
娘の町はアマリリス通り言われてる

奈良市　宇賀史郎

人形展みんな笑いに溶けてゆく
これからは言葉少なく礼深く
フルムーン終えて見納め二人旅
朝五錠昼はサプリに夜二合
余情消すもう一杯のハイボール

奈良市　大久保眞澄

藁一本にすがるとこまでいってない
大阪のがさつなとこがちょっと好き
握りこぶしは我慢するためにある
国会中継ペンチ握っている閻魔
憎めないちょっと私に似た土偶

奈良市　髙橋敬子

赤ちゃんをあやして癒やし貰ってる
スマホのアプリ無料確かめ使ってる
子の言葉拾えば親が見えてくる
プライドがあって引き際見つからず
行くととろ花々花と出来過ぎだ

奈良市　辻内げんえい

メシ風呂ネル言えず一人でやっている
頑なに生きたあげくの好々爺
命拾いそんなラッキー後で知る
「頑固ジジイ」言った言葉を返される
隔世遺伝の頑固な孫にエールする

奈良市　米田恭昌

何もかも許して海が凪いでいる
隔世遺伝僕のコピーのような孫
関白がぺこぺこしてる裏の顔
ガスを止めさてそれからの長電話
子の出世祝って集う血の絆（子供の日に）

生駒市　飛永ふりこ

登り坂息継ぎできず汗どどど
聴きながすことで花弁の広がりが
真っ二つこだわり捨てて愉しまん
芍薬に武原はんの幻が
漕ぎ着けたジューンブライドおめでとう

香芝市　大内朝子

思い出が笑う新緑の彼方
丸かじり出来ぬリンゴをすりおろす
こぼれぬよう熱い涙は天を向く
負けん気も病に勝てぬ事悟る
里の味スーパーで買う初鰹

香芝市　山下純子

初恋の余熱が残るクラス会
孫のこと伝えたいけど母は亡き
ゲーム手にお邪魔しますと孫の友
低い鼻立体マスクでカバーする
数独で頭脳鍛える母卒寿

桜井市　安土理恵

幼な子をなだめるように夫の背
独房にカーテンさえもないトイレ
心病む前に退院祈ります
理由ありで棲む田舎道身に応え
留守の間に芽出し育っている野菜

和歌山市　磯部義雄

はしゃぐ妻バーゲンセールから帰還
欲が出た頃は物事腹八分
身贔屓をして疎まれて四面楚歌
核実験する度地球涙ぐむ
南北が魔術を使い手を結ぶ

和歌山市　上田紀子

焦点がずれる二人が描くドラマ
喜怒哀楽詰めて膨らむワンハート
元気だけ取り柄休まず突き進む
読み違い聴きまちがいで今日も暮れ
本当に安全ですか我が日本

和歌山市　坂部紀久子

もったいないが染みついている昭和初期
老いる程人の話を聞き入れず
結論は又の折にと言うテレビ
娘が帰りテレビの音も空しくて
雰囲気も味に溶けますコーヒーへ

和歌山市　武本　碧

一献が名刺がわりの左党
カーリングお八つタイムのユーモラス
九官鳥夫婦げんかは聞かぬ振り
ロボットが涙を流す日も近い
ストレスを乱切りにして今日終わる

和歌山市　土屋　起世子

同級生訃報に闇夜まだ続く
耳遠くなって腹立つことが減り
ド忘れも愛嬌にする年の功
母の日に送迎つきの夕ごはん
もう一度自分に賭けてみる余生

和歌山市　福井　菜摘

行間に夢が溢れる子の便り
いい友でいたい心の車間距離
負けて勝つ知恵を磨いてやり遂げる
いい話風が笑顔を連れてくる
温かい手に触れ明日の森が見え

和歌山市　古久保　和子

身を守る術を知ってるバラの花
気の利いたジョークも出ない走り梅雨
取り立てて連休騒ぐこともなし
結論は急かさぬように落とし蓋
ブランコの着地点には水たまり

和歌山市　堀　冨美子

何事もセルフ呆けてはいられない
今日ひと日沈黙と言う苦痛知る
おまけだと思う傘寿がいとおしい
歳月の早さ幸せ走らせる
スケジュールひとりぼっちにさせぬ老い

和歌山市　松原　寿子

踏み切った決意へ受ける石つぶて
トンネルの向こうに賭ける夢を追う
持ち寄ってつまめば心通じ合う
追えばなお斜めに風が抜けていく
振り向けば視界をふさぐ闇になる

岩出市　藤原　ほのか

旗を振り自分の場所を確かめる
旗の波浮き立つ心戒める
この先は何があっても悔やまない
踏台になっても気持ち揺るぎ無い
母として踏台になる覚悟です

海南市　小谷　小雪

新緑を映すせせらぎケセラセラ
菓子皿も空っぽになる日の長さ
チョコ効果のポリフェノールにある苦さ
コンビニの椅子はおおむね一人掛け
黒を着て心の疲れ包み込む

海南市　堂上泰女

フルスイングしたけど負けはマケである
ゴールデンウィーク狙う雨の邪魔
横文字は既に孫らに負けている
里に住み山の緑に噎せている
五月来てシンドロームに迷い込む

紀の川市　宇野幹子

六Bに女の命燃やし切る
余花の雨母ゆっくりと抱き起す
不器用な暮らしをしかと子に見せる
半分のカボチャを買って主婦の昼
疑問符がふくらんでゆくランドセル

紀の川市　北山絹子

外出を控えた父の花粉症
ペン胼胝が父の苦労を物語る
出る幕がなくて節穴覗いてる
言い訳はやめて心が痛むから
ちぎり絵へ和紙が奏でる初夏の彩

紀の川市　楠原富香

柩の中に信じ通した顔がある
喜怒哀楽力を込めて米を研ぐ
そっとしておいてやりたいまだ蕾
喪が明けて独り芝居の幕が開く
青春の思い出たどるボタン穴

紀の川市　山東日出男

母ちゃんに続けとカモのお引っ越し
過去のことアンモナイトに聞いてみる
休むのも仕事のうちの一つだよ
巣をかける蜘蛛に一分の無駄がない
引き算を理解しているホトトギス

田辺市　岡本昇

寝たきりの母の手握るのが日課
新緑が迎えてくれるUターン
エプロンが真っ白今日は何かある
人それぞれ丸い地球で闘ぎ合う
ありがとうさせていただくボランティア

橋本市　石田隆彦

童謡がリズムに乗せる交差点
今の僕にできることかな募金箱
励ましはスローカーブで投げてやる
言葉ではお世辞 仕事では忖度
本能をむき出し猫のラブコール

京都市　清水英旺

あと一年つつがなくあれ両陛下
両陛下退屈な日々待っている
まだ位置についてないのに鳴る号砲
症状が悪化しそうな待ち時間
あれもこれも来年のためよと妻はいう

京都市　桝本宏子

再婚らしなるほど元気喜寿の春
乱暴な字けんか続いているらしい
表具屋がやめなはれ言う師の色紙
世辞クレーム聞き流してる舌と耳
母の日の蘭が花芽を抱いている

京都市　三宅満子

気がつけば今日は朝からしゃべってない
声変りオレオレ詐欺に間違われ
親の背を見てたかうまく手抜きする
京都人は熱烈歓迎してません
喜寿もそこ忍耐努力もうやめる

長岡京市　山田葉子

同じように食べても太らないなんて
次世代に残す家族の先細り
夫婦での墓参うらやましい後期
甘いマスク優しい人と思い込む
バイキング眺めただけで満腹に

八幡市　今井万紗子

透明になり時々悪さしたくなる
どっしりとしたお尻だねいい嫁だ
指切りげんまんママの約束忘れない
よろしくとそっと差し出す手が温い
ママの似顔鼻が低いと叱られた

大阪府　米澤俶子

力いっぱい生きた誇りの影もまた
横文字の花が溢れている花屋
もの忘れ風は知らんぷりで通る
欲ばらず等身大の幸で良い
ジャスミンが枯れた堪忍なとホロリ

大阪市　内田志津子

栄枯盛衰今日に油断してはならぬ
いい春と出会いたいです白のまま
罪深い人ほど吠える今日この世
屋台骨支えた自負で生きている
反抗期母は無言で導いた

大阪市　宇都満知子

指きりを久しく忘れてる小指
ただただ誉める八歳の五七五
ケータイが主役寂しい家電話
食べ物の好みおんなじ人と居る
老い二人いつの間にやら仲直り

大阪市　江島谷勝弘

ゆらゆらとどこへ行ったか花筏
目に余る狸同士の庇いあい
膝の水抜いている妻可哀相
卯の花もたまに食べたら美味である
真っ当に生きてますから損ばかり

大阪市　榎本日の出

チャンス来たのに腰痛が邪魔をする
少子化で小学校が消えそうだ
年金の格差気にせずネギ刻む
七粒のくすりに命預ける身
健康が食べ放題を許さない

大阪市　榎本舞夢

子供の日孫から食事おごられる
サプライズあっという間の五連休
藤菖蒲万葉歌人偲んでる
連休明け気持切り替え五七五
全没でも顔を合わせて楽しい日

大阪市　大川桃花

含み笑い微妙に肩が揺れている
土産の希望聞かれて無事な顔と母
右から読む看板がありノスタルジー
究極の分業らしい蟻社会
常連になって便利に使われる

大阪市　大治重信

淋しさと気楽さ足してひとり寝る
菜の花の苦味を添えて夜の酒
蟻急ぐうれしき約のある如く
絵筆とり目を細めてる夏帽子
まっさらの緑の上を初つばめ

大阪市　奥村五月

渋滞も母が喜ぶ里帰り
記憶力無いと言いつつまだ議員
花粉症終り恐れる熱中症
川よりも広い大空好きな鯉
銭湯に浮ぶ菖蒲に子等はしゃぐ

大阪市　笠嶋恵美

東郷青児展と食事幸せ花ふぶき
エレベーターガールの声にやさしく包まれる
うふふふなにわ柳壇久し振り
部屋飾る友の絵手紙笑ってる
婦人部のつくしのうまし食事会

大阪市　川端一歩

10代が日本を沸かす頼もしさ
基地沖縄でも観光で生きている
悪役を買うたらうしろ誰もいず
満員車男の鬼門かも知れず
シナリオのない一日の万歩計

大阪市　能代菜月

鍋ですと孫が迎えに来てくれる
忘れたと言わず笑顔で答えとく
塔誌読む時間だんだん遅くなり
私にも眠れぬ夜が出来ました
秋彼岸無縁墓にも手を合せ

大阪市　古今堂　蕉子

思い出は頭と胸の図書館に
幸せ行きの電車は自前でどうぞ
このままで良いわけがない体脂肪
何並んではりますのと聞いてみた
ハイテクの尻尾ぐらいは掴んでる

大阪市　近藤　正

川柳はカメラで撮れないものも詠む
南北が絆深めるのは道理
アベ外交北からさえもあなどられ
地球軸気分斜めな訳わかる
安倍特区己の不徳墓穴掘る

大阪市　坂　裕之

我慢せず言いたいことは言っていく
守りから攻めに転じて切り抜けた
ねだってた孫がお土産買う歳に
美味しいねみんな揃って食べるって
負けるのに喧嘩しかける事はない

大阪市　田浦　實

高齢は資格でないと覚えたり
コンビニが頼りになった老夫婦
大助花子教えてくれる喧嘩術
散歩コース鎮守の森で深呼吸
御神籤の大大吉は心配だ

大阪市　高杉　千歩

リハビリに明け暮れホーム飯茶碗
ええ加減にと思いながら粥口へ
九十二に見えへん有難うとは言えず
四人部屋死刑囚ではありません
情報をスマホに頼り今日も生き

大阪市　谷口　義

あれ以来音沙汰なしの昼の月
今日の烏賊は男前やと皮を剥く
プライドも延びて睡眠導入剤
ユーモアがなければならぬヤジ一つ
ええやんかええやんかとこんにゃくゼリー

大阪市　津村　志華子

健康の幸せ確と踏む大地
切り株の私語を聴いてる森の風
友達の情けが届くくぎ煮炊き
すみませんと改札通る無料パス
まだ生きる意欲卒寿のど真ン中

大阪市　津守　なぎさ

前向きに生きる指針を問うナース
ぜんざいスープ病院食もおつなもの
点滴にあずける命きざみ食
おねだりができる身内のエトセトラ
イヤホンで水戸黄門にしびれます

点滴のぽたり命と対峙する
五体満足それだけでいい手を合わす
老いてなおふたりの鈴はひびき合う
病む友と歩幅合わせる試歩の杖
毒舌を吐きそれからの長い闇

大阪市　寺井弘子

思い出を置き去りにして友は逝く
欲しい物まったくないが金は貯め
住所録年賀のたびに薄くなり
折りたたみ出さずに入る彼のカサ
この諭吉消してみせます得意です

大阪市　寺本実

翡翠にも似て美しき胡瓜揉み
プチトマトころころ初恋を笑う
もしかして君はあの日の金魚かい
遠花火来世は恋人になろう
約束を抱いてこの世を泳ぎきる

大阪市　栃尾奏子

煩悩を少々もって古稀の坂
惰性かなまだ目覚ましに起こされる
足腰を鍛えるノルマ一万歩
五月かな緑を愛でてゴーヤ植え
近隣に友人欲しい日本国

大阪市　平賀国和

カッカッとヒール現役の音して
仏飯を供えつ遠い子を思う
普段玉子焼孫来てハムエッグ
ぐうたらと本気ぐうたらも手強い
観光客大阪城を変えてゆく

大阪市　原田すみ子

零時まで残塁の山悔いている
賑わいの面影残る無人駅
返信の文に二つの句読点
時の無い世界へ行こう手を繋ぎ
クーラーを効かせたまには鍋と燗

大阪市　藤田武人

外出れば甘いお菓子にときめいて
一議案九人寄れば定まらぬ
性格の違った友と二十年
八十路の女凛と優しく美しい
十五分昼寝をすれば空晴れる

大阪市　藤原千恵子

昭和一桁この人も持つ同じ影
男気が情の厚さを倍にする
履物の向きにも家の顔がある
やがて無へいい生き様を積み上げる
老斑の手が危う気なキーボード

大阪市　升成好

大阪市　山本加お里

泣きません今夜も星を見ています
着メロが読経の中で鳴りだした
つばめ来る気持にゆとりある暮らし
喜寿なりに心引き締め生きている
断捨離で新しいもの欲しくない

大阪市　吉内タカ子

世界の目きずなが光る北の国
境界の互い踏み合うあの笑顔
あの笑顔とけぬ平和を願います
あの笑顔はやく解決まつ拉致を
タンポポの綿毛仲良く風を待つ

大阪市　若本安代

来客の予定に合わす掃除デー
見上げれば命が光る樟若葉
病歴を三時のお茶に盛ってくる
老いてなお好奇心だけ満ちている
プライドを捨てたらきっと老い進む

堺市　奥時雄

大阪をライバル視しない東京
タイガースだけは拮抗できている
帝はんお貸ししているという京都
京都から本社移したりしない
大阪と一緒にするなよと神戸

堺市　柿花和夫

引越して荷物一年前のまま
回転寿司過保護の子供増えてきた
握りつぶす力自慢が国仕切る
妻の留守孫のポテチで飲んでます
見慣れると入れ墨選手気にならぬ

堺市　加島由一

ベランダに亡妻の残したゼラニュウム
長生きはするもんだなあかき氷
欠点に目をつむってて仲が良い
女子会がおっさん会になるビール
戸に鍵はかけずふる里母ひとり

堺市　源田八千代

つやつやと柿の若葉と赤芽垣
男性も母体より生まれ出た筈
しっかりと朝食摂って子は丈夫
ほぐされて亡母を想うマッサージ
帽子靴までトータルファッション決めている

堺市　齋藤さくら

揉めるだけ揉めて国民不在なり
わたくしの自慢は友に恵まれた
ぱっと見は大人しそうに見えている
食べている時が幸せなんだろう
腹立ちも三日過ぎたら忘れてる

塔誌音訳のCD届く嬉しい日
音訳のCDからボランティア氏の温い声
耳で読む川柳新しい感じ
涙腺がどんどん緩む八十路坂
女房に内緒でそっと拭く涙

堺市　坂上淳司

分かっていても敵をなかなか愛せない
指を折るゼニ勘定じゃありません
女子会のメインディッシュは夫の愚痴
邯鄲の夢を見てきた喜寿卒寿
庭通るとなりの猫は忍び足

堺市　澤井敏治

初夏を着る父の御下がり縞木綿
酔うほどに小皿叩いていた昭和
国会に反面教師たんと居る
鈍行に変えて楽しむ旅ふたり
褒められてだんだん妻に染められる

堺市　内藤憲彦

もうしばらく妻の掌おどりたい
最後まで心のスタミナをたもつ
生きている今の平和にありがとう
減りつづけていく年金にすがる老い
いさぎよく残るさくらも後を追う

堺市　遠山唯教

思いもかけぬお誘い貰う老いて尚
長旅の友にメールでおつき合い
一ページ二ページすぐに来る眠気
もぎたてと二日続けて豌豆貰う
おばちゃん会介護情報交換会

堺市　矢倉五月

平成の限りある日をいとおしむ
高齢を意識に留めてする動き
せっかちも寿命の程は別らしい
こだわりがわたしをわたしらしくする
明日もまた私らしく生きるはず

池田市　栗田久子

新緑の風に菖蒲が笑い出す
転んだらしまい足元踏みしめる
南北が煽て合ってる下心
頂上の風の強さは人知らず
言い勝ったお茶が苦くて胃につかえ

茨木市　島田誠一

つまらない見栄でダイヤをキャッシュ買い
その才覚勿体無いよ特殊詐欺
仲直りきっかけ孫がさあ来るぞ
逆立ちをしても三猿にはなれぬ
追い払ったカラスにつきまとわれている

河内長野市　大島ともこ

河内長野市　梶原弘光

文春を摘まむリハビリ待ち時間
女子会の名簿年齢欄はパス
唄いたいだけど世話役だけ辞退
ささやかでチョー有難い日日の風呂
待ち合わせ計ったように来る御仁

河内長野市　木見谷孝代

故郷へ待つ人のない春の冷え
ひとりごと言いつつ父母の墓そうじ
古家のメンテナンスはきりがない
筆と墨忘れぬように持ち歩く
夏野菜しっかり植えてやる気わく

河内長野市　黒岩靖博

医療費にため息ばかり出る老後
久し振りサーロインだと力づけ
カード持つと我慢できない落とし穴
パラリンピックバランス取って競い合う
お隣りの雨戸の音で目が覚める

河内長野市　辻村ヒロ

あれやこれやっと味わう母の歳
近頃はときどき記憶滑ってる
趣味あって余生と言わず老い磨く
待ち合わせ覚えているかデイの友
ナツメロで青春の輪が背を伸ばす

河内長野市　藤塚克三

年金は妻銀行で管理され
妻からの家長禅譲待ちわびる
フルコースナイフフォークですぐ猫背
回診の名医の言葉薬です
朝昼晩薬選びに手間かかる

河内長野市　村上直樹

若返りしても隠せぬ背の丸さ
美人薄命あいにく妻はチョー元気
百歳時代どんな楽しみ増えるやら
官僚は仮面の下にまた仮面
入選へ阿るものか俺はオレ

河内長野市　森田旅人

流れゆく時間の惜しい半夏生
多面体うそもまことも持つ魅力
待つほどに怒りにかわる片想い
言葉には力のあるをつい忘れ
百円未満やっとこだわらなくなった

河内長野市　山室光弘

二刀流輸出をしても出ぬ文句
自治会の青年団と初老者
油まみれ真面目に生きた勲章だ
お喋りも心遣いも垢抜ける
人前で唄うな音痴と妻は言う

岸和田市　岩佐ダン吉

行きつ戻りつやがては人になるだろう
賑やかな男時どき空を見る
今ひとり道らしいもの見えてくる
辛いけど私に距離を置いて見る
歯車のひとつで終えていいやろか

岸和田市　雪本珠子

天道虫花のベッドで昼寝する
ポジティブに生きろと月に諭される
ひと駅を歩いて帰り酔い醒ます
メールより声聞きたくて電話する
夫婦でもこころの奥は覗けない

四條畷市　吉岡修

声がわりやがてへんりん見せてくる
そろそろだと誰もが僕をそう見てる
まちがいはセレブとコンビ組んだこと
守ったら護ってくれるはず憲法
魔女ひとりハートに長く長く住む

吹田市　木下敏子

好きな事して春の日を送りゆく
寝たきりにならない様に万歩計
新緑を友と楽しむ朝の顔
仏壇へ春が来たよと桜餅
葉ざくらの下で体操する笑顔

吹田市　須磨活恵

藤の花揺れて五月の甘い風
ちさい義理済ませて額の汗拭う
決心がついてくっきり紅を引く
貧しさに馴れてやりくり上手なり
思い出を繰ればくるほど美しい

吹田市　野下之男

神様がご機嫌ななめこの天気
警官の不行き届きは何でしょう
西郷どんの写真ほんとに見てみたい
巨神戦なんでそんなに力出る
監督の表情見えんサングラス

高槻市　指宿千枝子

お早うの朝日が背をしゃんと押す
あきらめるのはまだまだと旅リュック
五月晴れ伊豆下田へと靴をはく
三保の松天女の涙しずくする
お土産に小石を拾う三保の浜

高槻市　片山かずお

根回しをしたのに揉める会議室
場の空気読まぬ意見を聞かされる
生き様を背で語っているオトコ
夢ひとつ咲かせないままた夢を
前祝いだけで終って予備校へ

高槻市　島田千鶴子

充電中本当は少しずる休み
幸せな朝のふあふあ玉子焼
雑念を削ぎ落としたか鎌の月
摘みたての新茶が届く青葉風
晴天に生きる意味など考えぬ

高槻市　初代正彦

母さんの微熱ちっとも知らなんだ
臆せずに軽い会釈で輪に入る
夕立雲これ幸いと縄のれん
百歳の笑顔に逢えた奥座敷
ルンルンが軽い約束してしもた

高槻市　杉本義昭

極楽に太いパイプを引いている
ひたむきな汗が望みを捨ててない
相談が金のことなら留守にする
お父ちゃん出世しないがあったかい
熱く熱く語る若さが頼もしい

高槻市　富田美義

眉唾が金婚迄も良く持った
宮仕え身に付きました我慢癖
我慢やで自分で撒いた種やろ
忍耐と努力ニートの辞書にゃ無い
人の老いアポも取らずにやってくる

高槻市　富田保子

メールより遅いハガキに愛がある
切干のほのかな甘み姉の味
携帯をスマホに替えて手が動く
プライドを着れば気持も派手になる
苦心した言い訳だれも聞いてない

高槻市　原洋志

ひょっとして絆を拾う交差点
ウーロン茶飲んで左党の群れにいる
ぜいたくな食品ロスの平和呆け
無呼吸のギネス記録を持っている
今日の色すっきり消してまた明日

高槻市　松岡篤

新人のレジもどかしさ新鮮さ
危ないと何もしなけりゃ呆けてくる
プレミアムフライデーってあったなあ
タンス預金増えないけれどリスク無い
遺産など無いから家族仲が良い

高槻市　安田忠子

旅帰り熱い日本茶飲む至福
帰宅してマスク外せばほっとする
いらない物いっぱいあって捨てられぬ
晴れた日に布団を干して大掃除
鏡に映る姿も母に似て来たなー

豊中市　上出　修

お説教左右の耳に抜けて行く
ウェブから知りたくもない病知る
診察日二時間待てど呼ばれない
おお恐い無言の行の妻の乱
賞与なしあんまりやでと妻怒る

豊中市　江見見清

永平寺の鐘撞き孫の手も借りて
バーゲンに疑いの眼も熱い眼も
揉めないでおこうマスクは外せない
もの忘れします免罪符のつもり
自問自答息を大きく吐きながら

豊中市　藤井則彦

生き様は後ろ姿にふと滲む
水を掻くアヒルは今日も澄まし顔
ストレスは元気印の裏返し
うたた寝が増えてこせこせしなくなり
割り算に手間暇かかる歳となり

豊中市　水野黒兎

アメリカにさくら満開ショウタイム
戦いはいつも地球の人同士
雨だれをドレミファと聞き風邪治る
山彦と校歌を歌う廃校舎
老いてなお隣の芝生青く見え

富田林市　片岡智恵子

しっかりと切手貼り足すお礼状
失言は心の内にある本音
頑な亡父だった今も大好き
花束が届く狼狽える私
米寿生きあれは幻夢なのか

富田林市　関よしみ

ゆっくりと新茶の香り開く朝
逆もどり出来ぬ芽の輪をくぐる今日
海月見てふわふわ揺らぐ足の先
淋しくてひらひら金魚多く飼う
鬼灯が真っ赤に熟れて恙無い

富田林市　中井アキ

花苗を植えてくれたは若い友
老い先の事は一旦忘れよう
約束の切符は今も信じてる
同年の友とは話題限りなく
心より体が先にゆくらしい

富田林市　中村　惠

本当の自分を探す一人旅
ごめんねとたった一言軽すぎる
悪戯の落とし所を探してる
乱調を正す一打の大太鼓
花という名前で愛された記憶

富田林市　山野寿之

手の平のスマホ私を弄ぶ
外国語氾濫春の奈良京都
雨の日の花見駅裏屋台酒
あいさつが行き交う朝のランドセル
心ない一語に深い深い疵

寝屋川市　籠島恵子

わたくしの弱み握った人が逝く
あの時を忘れてくれぬ欠け茶碗
我が家のピカソ私はいつも二頭身
地団駄を踏みあっているのも家族
命日を忘れがちです　妹よ

寝屋川市　伊達郁夫

自分への弔辞を書いた白いバラ
バイブルに挟んで置いてある媚薬
道端の花に会釈をして散歩
一歩引く位置で結び目緩くする
想い出を解凍してる春朧

寝屋川市　冨山ルイ子

国民年金あまりに少しおどろいた
国民年金暮らしていける筈がない
籤に当たればあしながおばあさんに
籤に当たれば山中教授にドーゾ
内緒事すべて話して親友となる

寝屋川市　平松かすみ

ふるさとのみかんで癒す雨上がり
五線譜とにらみっこして二十四時
おまわりさん変りないかと年一度
添加物いやで手作りしています
雑魚鰹いつも私の台所

羽曳野市　安芸田泰子

出会いより別ればかりが多くなる
近道を通れば恐い犬が居る
チューリップ並んで咲いて幼稚園
病んでから素直な親になりました
雑草にもある陽の恵み地の恵み

羽曳野市　宇都宮ちづる

柏餅四つ入り食べる老い二人
鶯が仲間入りする読経の輪
駅前の本屋とやおや居酒屋に
八〇分待ちの通天閣は負けてない
連休に大きなコタツ片付ける

羽曳野市　徳山みつこ

母へ元気を向日葵が届いた日（長男）
カフェオーレしばし詩人に雨の午後
白黄桃赤笑みが溢れる小さき庭
二度の嘘まではしぶしぶ聞きました
被爆ニッポン何とか知恵を絞らねば

羽曳野市　中川　ひろ介

万緑が押し寄せ孫と田植えする
野良合間汗引く風と缶ビール
汗を拭く今朝はダウンを着てたのに
蓮華植え田んぼの土も角がとれ
思い出が更地となった震災後

羽曳野市　仲谷　真

七夕に平和を願い短冊に
朝顔の種まき咲くを待っている
子供達とラジオ体操参加する
コンチキチン祇園ばやしが京に鳴る
大阪の天神祭に行きますよ

羽曳野市　三好　専平

知らないと素直に言える人が好き
大胆に一捨九入して生きる
しっかりと心の窓を開けておく
ライバルという語を知らぬ一人っ子
労働者団結しないことに慣れ

羽曳野市　吉村　久仁雄

飲んで笑ってきらきら老いの道を行く
寂しがり屋であちこち握手して回る
新元号に備えみそ汁温める
遅刻した罰に町会長にされ
人肌燗が大好き銘柄はこだわらぬ

東大阪市　佐々木　満作

グローバルに悲鳴を上げている地球
妻旅行レシピ頼りの割烹着
負の遺産孫の世代に伸し掛かる
男ならやった悪事は責を取れ
定年後意気に燃えてる趣味の道

東大阪市　北村　賢子

ごみ出しと出掛ける時は違う顔
元気で趣味にうつつぬかしている感謝
見上げれば青空がある落ち込まぬ
真実をねじ曲げ大物を庇う
この場所で残る命をかがやかす

枚方市　海老池　洋

バラはバラ私は野辺に咲くスミレ
ストレスが音になってる台所
幸せの演技も時にして夫婦
老いぼれて鏡見るのも嫌になる
人生百年年金不安増すばかり

枚方市　小林　わこ

今も一輌昔のままに乗る電車
本気度の伝わる熱くなるまぶた
今は元気食べるし句会にも行ける
話してもすぐに忘れる聞きたがる
こんなに嬉しい今日は二度とない

枚方市　丹後屋　肇

同窓会花も嵐も踏み越えて
特攻で散った同期をふと想う
昭和一桁涙に噎ぶやんちゃくれ
糟糠の妻はおそらく死語になる
二刀流蜂の巣つつく大リーグ

枚方市　寺川弘一

何時何処で来るのわたしのエンディング
思い出の中にもあるの好き嫌い
老いましたリンゴの丸かじりが出来ぬ
野球は嫌い大谷翔平だけが好き
鉛筆を削るナイフがあったのね

枚方市　二宮山久

木の芽和え春の香りや食進む
葉桜に元気をもらう老夫婦
朝食が今日もうまいぞ元気者
ボランティアできる幸せかみしめる
我が郷は夕日がきれい無人駅

枚方市　二宮紫鳳

木洩れ日をぬって連休リフレッシュ
深呼吸ハードル一つ上げて飛ぶ
たっぷりと流した汗は裏切らぬ
旅仕度薬アレコレたんと持ち
ほどほどに手抜き上手に老いていく

枚方市　藤村亜成

もう拝む気はせぬ月のあばた面
包丁の腕をよろこばせている釣果
家族ゆえ甘やかすことのできぬエゴ
昨日の悪夢を獏よ食べてくれ
半分は気儘半分だけ誓う

枚方市　山口弘委智

例外を課外で学ぶランドセル
愛すべき言葉とび交う孫台風
米寿の夢みどりの風が応援歌
一言が老いを乗り越え弾ませる
陽の匂い集め膨らむ五七五

藤井寺市　太田扶美代

素通りするもう兄ちゃんの居ない街
コンビニに夢が溢れてます様に
レクイエムお花畑で眠りたや
食器にはちょっとうるさい和食党
わたくしの陣地を飾る芝桜

藤井寺市　鴨谷瑠美子

雨の紫陽花あなたへ誤解したまんま
見詰めると仏のような沙羅の花
古い事覚えています庭の石
えんどう豆のみどりほのかに夕餉どき
胡蝶蘭いただきました立派です

藤井寺市　鈴木いさお

カラフルに人生生きて今無色
言い過ぎた悔い言い足りなかった悔い
仮の世と言うがこんなに素晴しい
壊れゆく夢のかけらにしがみつく
近道を選んだことを悔いている

藤井寺市　髙田美代子

罪作るつもりかカジノ人滅ぶ
使い馴れたことばに毒は無いけれど
今更に何も無いけどマイナンバー
三日程食べる気で炊く関東煮
おきばりやす見れば行司の足袋跳

藤井寺市　吉田喜代子

ゴールデン不用整理に明け暮れる
銀行員相続話に力入れ
銀行員家の査定をして帰る
友情は三十余年逢わずとも
愛媛からミカンと共に子が帰る

藤井寺市　若松雅枝

じっくりと名句が出そう仕舞い風呂
春になっても行きたい旅も行けぬまま
ばあちゃんを連れて行くよと孫五歳
嫁姑ギャップはあれど皆正論
めまいして気弱になった独りの夜

松原市　森松まつお

休刊日スマホの娘には興味なし
スマホほど必死にやってない仕事
薬待つあいだ公園散歩する
一時間が限度読書もパソコンも
出不精のワタシに雨も味方する

箕面市　大浦初音

人生はいつも選択せまられる
人生に主役は三度やってくる
下り坂しっかり大地踏みしめる
親友の言葉直球ど真中
年かさね変化おそれずこわがらず

箕面市　酒井紀華

一汁一菜代代続く日本食
雨の連休静けさ不気味両隣
肉ジャガが二日つづいて本物だ
一戸建て重荷になって老いがくる
売れぬ家朽ちてく屋根に虫の声

箕面市　出口セツ子

待ち合いが老いのサロンになっている
昔なら飛び越えらえれた水溜まり
連休も炊事に家事は休み無し
日帰りの旅渋滞の中に居る
日々遊ぶのにも疲れて老いを知る

薫風に乗って子達が帰省する
爺婆にハイタッチしてUターン
めまぐるし世界情勢見極める
自治会議マイクを使う高齢化
連休が終りママ友にぎやかに

箕面市　広島巴子

鮮やかな花のお礼は水でよし
百歳の瞳に八十は若手なり
水無しで生きられぬのに雨はイヤ
前生の仕草が悪いと言われても
補聴器の電池切れした日の静寂

八尾市　内海幸生

働ける幸せ満ちる蟻の列
通勤ラッシュ久し飛び込む旅の朝
同窓会溌剌してるのが恩師
半信半疑どこ吹く風の二刀流
通り抜け笑い転げて散る桜

八尾市　寺川はじむ

新生児よろしくと泣く大声で
町散歩お犬さまにもニューリュック
とぼけ上手な友から千円戻らない
喝采を浴びたは一瞬だけのこと
ライバルがいるので私若返る

八尾市　宮崎シマ子

カードで財布ふくらませ金溜まらない
シェルターによもぎだんごも入れておく
スキップが出来なくっても生きられる
あなどるなかれ造花の生命力
渋滞のニュースのんびり見る茶の間

八尾市　村上ミツ子

曲言も聞き流そうか花吹雪
桜守りまた来る春に癒やしの手
嵐電は窓が絵になるように往く
蛍雪の言葉も遠く鯉泳ぐ
独り立ち見送る家族小さくなり

八尾市　山根妙子

円卓で話せば意見合ってくる
ツバメさん日本の虫は美味いでしょ
律義だね去年と同じ軒に来る
鶯がバックコーラス燕飛ぶ
寒い雨明日は真夏という予報

神戸市　上田和宏

不便さもウォーキングの取得あり
あるものとしていなかった友の悲報
つきの無い者に貢がすカジノ法
不愛想に切った電話をまた悔み
ちぐはぐな夫婦付いたり離れたり

神戸市　奥澤洋次郎

神戸市　冨永恭子

お互いに居場所を確保して我が家
熱い手が介護向きだと指名され
筍がつづく手を替え品を替え
水かきが続く水面下の攻防
会いたくて五月の第二日曜日

神戸市　能勢利子

医者の前では痛みなくなるおばあちゃん
母の財布は上肉買えと太っ腹
長生きの老母もう我慢などしない
アクシデント無ければ〇とする介護
介護とは想定外のことばかり

神戸市　細川花門

新緑に萌える高野の供養塔
また逢おう高野の塔が合言葉
会場を笑いの渦にした一句
ランドセルきらきら一年生走る
膝に乗る猫に弱音をぶちまける

神戸市　山口光久

癌という病魔に少し腰くだけ
わたくしを試しています難手術
十時間手術見守る家族愛
難題をクリアしていく青い空
ナース嬢の笑みに元気が湧いてくる

神戸市　山口美穂

木洩れ日のベンチでしばし夢を見る
一つずつ未来を消してゆく傘寿
鏡の中のわたしが亡母に見えてくる
あの夢この夢朧朧となってゆく
終活が出来ないんです逝けません

芦屋市　黒田能子

買いすぎて後悔してる紙袋
ナイーブな人で涙をすぐ流す
親子だから図図しさもいいのです
この辺でほっと一息ティータイム
魔法の杖を自由自在に使いたい

明石市　糀谷和郎

琴線に触れるソフトな国訛り
誓紙でも紙魚には心地良い棲家
知らないと良かったことがたんとある
吹き溜まりですが仲間といる安堵
約束をしたかのように燕来る

尼崎市　市坪武臣

貧しくも豊かであった少年期
不満なら爆発させず深呼吸
あの日から時計を五分進めてる
古書の街を覗いて通る癖がある
ラブラブの君に逢えるかクラス会

尼崎市　加川靖鬼

屋根裏の秘密基地から降りてくる
恋心うまく包んだオムライス
ポトリと椿終活の潔さ
ハーネスを外すとボクの犬になる
ロボットに惜敗という負けは無い

尼崎市　永田紀恵

賭博ダメカジノOKこの矛盾
選手より号泣してる応援団
休刊日休肝日なりふて寝する
ニセモノが多いほど価値出る絵画
失恋が笑い話になる齢

尼崎市　藤井宏造

プリンにうどん何でも回す回る鮨
柩にも松竹梅がございます
指名手配一人のこらず濃いい顔
情けない下手な鉄砲さえ撃てぬ
本音にはやはり本音で勝負する

尼崎市　藤田雪菜

楽しいこと考え乍ら寝て了い
新しい家電が使いこなせない
立話桜ひらひら丸い背へ
喋り過ぎ貧しき心ふと気付く
手作りのおはぎ包んで墓参り

加西市　金川宣子

忘却は何にもまさる宝なり
連休が死ぬまで続く年金者
末っ子の甘えのままで世を渡り
山椒の香り引き立つ友の味
十年の実りに感謝趣味の道

川西市　大坪一徳

百までも生きてどうなるこんな世で
定年で初めて入る社長室
定年がゴールのように友が逝く
転勤の度にのどかになる任地
悔しさは発酵させてバネにした

川西市　岡一心

好調な出足に甘いツケで負け
つい弱気曲がりも甘い隠し球
不器用を真心でカバー一筋に
大当り君と結んだ赤い糸
招かれてバラ真っ盛り五月晴れ

川西市　山口不動

手術後の友の絵葉書鯉のぼり
にんまりと孫の作句に朱を入れる
追いこされ追いこされても六千歩
老ケヤキ若葉を纏い偉丈夫に
リフォームは余命考え止めました

篠山市　酒井健二

七十年経って学徒が作る会
自由でしょ酒呑まないも自由でしょ
千鳥足言うな楽しく一歩二歩
まだ金が残っているから旅の酒
割り勘で不足並べて欲深い

篠山市　北澤稠民

ひもじさを知らぬ世代の長い脚
生かされる天命今日を濃く生き
生きるため大きな傘をさしている
老けてゆく顔に鏡は容赦なし
忘却という人生にある余白

三田市　足立つな子

胸躍る弾むこころに乗ってみる
せせらぎの流れに心清められ
勝ってこそドラマは続く勝負事
旅立ちの思いめぐらす入社式
ひとすじにただ粛粛と生きること

三田市　上田ひとみ

とりあえずなんてやっぱり若さだな
十年後おそろしい歳迎えそう
こだわりはないが頑固だと言われる
嫌だなあ長所探して見ませんか
まだひとつ残っています大仕事

三田市　尾﨑一子

友の野菜庭の千草添えてある
子供の日タケノコ御膳祭り寿司
ネクタイを解いてやれやれ妻の酌
山菜の灰汁ほどよく抜いて姑の味
恙無く明日の夢をみる至福

三田市　北野哲男

薪能シテの仮面が命もつ
せせらぎに石の対話が洩れている
コマーシャル一二三九段はご活躍
会者定離だから飲む会大切に
ハグと言う挨拶爺は苦手です

三田市　多田雅尚

平成の内にやりたい一仕事
親子ほど違う南北手を繋ぐ
人間も羊も同じクールビズ
小渕流次の元号誰が読む
慢性病ゴルフの時は痛まない

三田市　谷口修平

単純に戻してほしい電気器具
爪先でステップを踏む酔っ払い
七転び八起き可愛げ無い奴だ
微笑みを忘れていたら四面楚歌
年齢の改ざんをする厚化粧

三田市　野口　真桜子

無秩序な静けさの中花が散る
皿割って収める胸の火哀しや
越えられぬ壁と手折れぬ花がある
生き様を語り出しそな深い皺
嵐山肩すり抜ける中国語

三田市　福田　好文

激安ツアー昔の上司乗っている
レシートで夫の行動全部知る
おしどりが踏んだ薄氷数知れず
僕だけの秘めた記念日二つ三つ
前向きの人は下見て歩かない

三田市　堀　正和

花だよりうずうずしてる種袋
さまざまな別れ見送り無人駅
スマホから顔を上げれば降りる駅
幸せだこんなにうまい朝の水
それぞれのリズムで暮らす三世代

三田市　村田　博

妻不在家事を一から自習する
マスクさえ取れば笑顔の好好爺
輪を外れポツリと独り手酌酒
ふとページ止まった先にあるドラマ
レンタサイクル借りて句会に滑り込む

高砂市　松尾　柳右子

素直さが取り得ハイハイ逆らわぬ
迷惑はかけぬ元気なお題目
週三日送迎されるデイルンルン
刻み食頂くありがたい入れ歯
独り居も楽しい日々の作句中

宝塚市　田中　章子

ドック入り病気探しに参ります
健康なからだ育てる割烹着
明日からと言わず今日から一万歩
がんばろう孫の晴れ着を見るまでは
みそ汁は薄目たまごは週三個

宝塚市　丸山　孔一

ドローンのカメラ鳥の眼手に入れた
家売って故郷が段々遠くなる
愛犬を急かせ踏み切り渡り切る
盲目の愛犬帰り道を知る
わざとらし風雨の中のレポーター

西宮市　秋元　てる

熨斗袋ほどほどのほどが難しい
口止めすきっと伝わる事だろう
願い事は整理してよと神が頼む
呆けた振りは難儀だなーと呆けている
自分だけが持ちたいものに「核」もある

西宮市　緒方美津子

望月に礼白寿の母と露天風呂
無言劇癒してくれる熱いお茶
先鋒の意志は大将までひびく
コンサート右脳ほこほこ帰り道
脱走劇に空家問題浮き上がり

西宮市　亀岡哲子

天国へ行く花びらの切符買う
使ってこその便利グッズが増えていく
申し訳ないがとうとう除草剤
小ぶりにはなったがたんと咲く牡丹
仏壇で桃もほど良く熟れている

西宮市　福島弘子

月並みな祖母の言葉が温かい
大人だなぁ心遣いの息子の言葉
孫と摘むスナップエンドウ自家の産
傘寿には破れジーンズわからない
特売日またタクシーで帰る老母

西脇市　七反田順子

孫が来て笑いの種を播いて去ぬ
姉見舞う目と目で交わす姉妹愛
初夏の風本音を聞いてくださいな
物干しにヨイショで登る日本晴
美しい国カジノ反対手を上げる

南あわじ市　萩原狸月

健康がお誘い受けて友と旅
旅費よりも衣裳気になる豪華船
渋滞の一因自覚せずぼやき
貧乏自慢でも大学に行ってはる
原点に戻れば見えた解くヒント

広島市　岸本清

廃線が決まり賑わう三江線
両の手で喉を潤す石清水
寝ころんで句づくりすると寝てしまう
働き方改革は先ず永田町
記憶なし嘯く安倍の親衛隊

竹原市　石原淑子

孫の吹くトロンボーンが夏空に
一度だけ君とセレブな船の旅
断り下手と踏んで難題持ち込まれ
雨雨雨本屋へ通う日が増える
岩合展土産の猫の愛らしさ

竹原市　岩本笑子

走ってる夢をナーバスに思う
一歩前へ薬は忘れぬよう生きる
一年が速い決算の準備
にわか雨ここらで一休みするか
鼓笛隊子供の鼻がピクリピクリ

三原市　鴨田昭紀

アナログを置き去る常識の変化
心意気だけは昔のまま騒ぐ
善人を募るとできる長い列
人の手を素直に借りる老いの坂
ちっぽけな愛を虫メガネで探す

岩国市　上村夢香

時刻表眺めて今日もひとり旅
年上の短いことば胸に染む
朝一番嬉しい便りブログから
今朝もまた仏間の母と対話する
落選のハガキ何度も読み返す

宇部市　平田実男

賞味期限あればと思う永田町
蛇の目傘和服を私服らしくする
遠距離の娘を近くするメール
遺産などなくて兄弟睦まじい
お袋の味に計量器はいらぬ

下松市　有海静枝

ひとりひとりひとり雨音に鎮む
除湿器が欲しい職場の人模様
嘘ついて皮膚湿疹が熱を持つ
毒入りのジョークで薄めている照れ
虚しさを埋める多弁が止まらない

防府市　坂本加代

同期会同じ歳だと思えない
半分は流しておこう酒の席
落ち込んでそういうこともあるこの世
生き方は幾千万と思うなり
言い訳を呟きながらまた家出

鳥取県　石谷美恵子

荒れ果てた豪邸の庭目に痛い
友へ言う畠へ無理をしなさんな
妄想のお花畑で蝶になる
畠は止めた家族みんなに止められた
ボッボッとくる幸せが間に合わぬ

鳥取県　竹信照彦

少しずつ消える昔を潰けた脳
今日と明日の間に眠る闇がある
過去に無い物を求めて今日と明日
断捨離だ過去放り込む段ボール
生きて亡父迎える業も吾が務め

鳥取県　西谷悦子

この幸せ逃げないように胸仕舞う
鯉のぼりこの頃稀に見るだけに
連休の行楽は農忙しい
野菜苗植えて雨降りありがたい
ラジオからいろんな知識拾ってる

鳥取県　細田裕花

アスパラのビタミンがとんがっている
それなりの花を咲かせた子どもたち
幸せにピントを合わすハイチーズ
メイクアップみんな平均的美人
泥んこが自慢球児の帰り道

鳥取県　松川行男

許します笹巻一つくれたから
予約して何だか不安増して来た
当日は柳の下の猫で待つ
算数と川柳どっちむつかしい
孫の子が宗一郎と言うんです

鳥取県　山下節子

大体の事は笑って片付ける
久しぶり気分ふわふわ花の下
死語にしたい拉致戦争やテロ虐待
庭の隅虫や金魚の墓がある
獅子の歯によく似た歯です丈夫です

鳥取市　池澤大鯰

年経ると爪と鼻毛が伸びすぎる
邪魔になるまで伸ばしてる爪の列
桜貝のような爪には美肌あう
ネイルアート生の勢いごまかして
老妻は紅よりマニキュア重宝す

鳥取市　奥田由美

嫁にいく娘の部屋守るぬいぐるみ
不機嫌なナースが配る温いお茶
社長より人徳をもつ金庫番
ヘソクリの置き場所毎夜変えて寝る
十年もバイエルを弾く隣家の子

鳥取市　加藤茶人

まあ飲めや蟹に竹輪にほら刺身
天命よ開けると怖い玉手箱
優しさが取り得　口下手　人見知り
白浜のパンダが妬いている上野
切実な問題遺産少しある

鳥取市　岸本宏章

鯉のぼり見るとバンザイしたくなる
ボディーブローみたいに効いた寒暖差
老いふたり孫の進路に口出さぬ
うっとりと見たい花火がすぐ消える
年号をどう書く次の年賀状

鳥取市　岸本孝子

連休をうきうきと待つおばあさん
蕗わらび食べて体を春にする
竹の子ご飯さんしょを添えてまず仏
割烹着私をシェフにしてくれる
こだわらず終活できる歳になり

鳥取市　倉益一瑤

ずぶ濡れのわたし拾ったのはあなた
経験に裏打ちをした師のことば
灯台が消えたよ母が壊れたよ
いい味が出てきた鶴と亀の貌
足跡を残す力がまだ足りぬ

鳥取市　田中天翔

憧れるシャイで無口なおばあさん
しかしです譲れないのも二つ三つ
うるさいと言われない内散る桜
ねばならぬこうあるべきはもう止めた
気に入った成り行きまかせこれでいい

鳥取市　棚田大

少子化を嘆くばかりで策出せぬ
百円が小銭にされて怒ってる
池の鯉　鯉幟り見て跳ね上がる
少子化の実態嘆き桜散る
人権を無視する言葉死語にせよ

鳥取市　谷口回春子

吾子よりもスマホ大好きヤングママ
口喧嘩無言の行で耐える夫
肩もみにちょっとドキドキ妻の肌
シャッター通り栄枯盛衰物語る
都合の良い時だけ記憶蘇る

鳥取市　永原昌鼓

賢いねその気にさせる褒め上手
側近は誰もいません婆ひとり
側近が偉いと殿も偉く見え
猿でさえマナー守って丸く住み
携帯がないから詐欺にだまされぬ

鳥取市　中村金祥

下積みへ僕の勲章胸の中
酒　女　金　権力も魔物だな
校長の式辞皆様覚えてる
世界一周しようと小銭貯めている
厳父にも魔法がかかる孫の笑み

鳥取市　夏目一粋

鉛筆の芯が嵐へ立ち向かう
煩悩が一隅さえも照らさない
親友は阿吽の呼吸知っている
一生に一度あいたい神さまに
どんな人でもいいところ持っている

鳥取市　平尾菜美

ひっそりと座る昼餉の膳一人
生き甲斐という姑菜園とよく笑う
気がかりな老後わずかの経唱え
趣味一途情熱だけは譲れない
一夜にて母の笑顔が甦る

鳥取市　福西茶子

頼りたい夫が私に凭り掛る
嫌いとも好きとも思う人の癖
風除けと弾除けライバルの背中
税金をブンブン遣う永田町
裸馬にも二人乗りバイクにも乗った

鳥取市　前田楓花

「い」抜き言葉の嫌いな人についてゆく
イチローの美学に胸が熱くなる
手術室夫なかなか出てこない
頼られた私もやがて頼る人
エレベーター無言で酸欠が続く

鳥取市　山下凱柳

免許返上迷うな後期高齢者
僕牛丼妻はランチのフルコース
横顔の素適な妻を惚れ直す
妻の味飼い馴らされて半世紀
今年また幸せ運ぶツバメ来る

鳥取市　吉田孔美子

免許とは何と自由で窮屈で
野良猫に庇いは無用春陽伸ぶ
ときめきは無いがおかずはカラフルだ
アメリカの銃規制なんだか稚拙
老春と呼んでも余りありそうな

鳥取市　吉田弘子

一周忌身代りの様ひ孫誕生
過去形の夫婦ゲンカも美化されて
花のない部屋は私に似合わない
まあいいか齢に甘える自分流
右足を庇えば左不足言う

倉吉市　猪川由美子

ご皇族新体制へ揃い踏み
時を経て他人の気持ちが理解出来
延命治療親の意向を聞いておく
世のテンポ急速過ぎて大変だ
頑張るイチロー皆んなのスター励みです

倉吉市　山中康子

堂どうと戦中戦後かたります
食べて寝て読む書く笑う泣くもよし
もう駄目と腹くくったが朝が来た
すらすらと歩けりゃ旅行のぞみます
老衰という最期での晴れ言葉

米子市　後藤宏之

生きのこり私がうつってる写真
ときめきは値段つくまで古道具
ひょっこりと出て来た古い通信簿
わき道に入ってみようおたのしみ
奥さんは総理主人は万年野党

米子市　後藤　美恵子

ライバルは我が心に棲んでいた
年を経てクラシックめく愛車駆る
嫁ぎ来て我がもの顔に根を張らす
手慣れたペンメール打つより良く動く
ＡＩの手を読む棋士がきっと出る

米子市　竹村　紀の治

生きている限りは酒と僕の恋
はらわたを夜毎洗浄しています
海鳴りが帰って来いと吠えている
昨日より寒いと膝の温度計
点線で書いてあります余命表

米子市　中原　章子

おしゃれより足が喜ぶ靴を履く
切ないがありがたく世話受けている
目と耳の大事さ過保護して守る
おしゃべりと笑いでわたし長生きだ
ご機嫌の空気を吸った子が帰阪

米子市　成田　雨奇

ハグもせずロビーでやあと言う娘
酔っているからこそ出来るストレッチ
咲き終る牡丹の鉢の重いこと
雨が降る屋根職人に感謝する
妻の留守妻の育てるキウイ剪る

島根県　伊藤　寿美

海猫の旅の話を聞く岬
つつじ満開施設暮らしが暮れ泥む
本音を書くと字余りになる下句
かくれんぼ亡夫が探しに来てくれぬ
生き過ぎたとも思う米寿の祝い膳

松江市　石橋　芳山

絡み合う言葉がほどけないでいる
渡れずに餓鬼海峡の交差点
十字路の向こうタクラマカン砂漠
這い上がる裏声じわじわと微熱
残酷なグリム童話を食べなさい

松江市　藤井　寿代

笑顔撒くなんて淋しい一日（ひとひ）かな
五ツ星夫が作るオムライス
鍵が無いケータイが無い猫またぐ
ハイハイとうなずく夫婦なれません
バンザイをしたくなる聖五月晴れ

松江市　松本　知恵子

娘の活けたカーネーションが香り立つ
ホトトギス鳴いてる初夏の森が好き
ときめきに似て新緑のまぶしさよ
背伸びしてたまにはいいな疲労感
そして二年浦島太郎になりそうな

出雲市　伊藤玲峰

綻びを見せ合いランチあのねのね
脱がされたマネキン「無理」と嗤ったよ
品揃いの百均の店遊ばせる
笹浮かべ山の気もらう湯舟かな
思い出はワイングラスを傾けて

出雲市　岸桂子

どんよりと病原菌の中にいる
哀しみの鱗をはがすオルゴール
コンパクト開くと私だけの刻
眉を引く時間本気になる時間
ライバルに健康だけは負けている

出雲市　小白金房子

ハンカチに秘密を畳む発車ベル
一瞬に散った桜の正義感
言い張って心哀しい裏をよむ
百均を巡り二人の春を買う
晩婚の誓いを結ぶみこの鈴

出雲市　多久和敬子

子や孫に誘われ老いもリフレッシュ
普段着の集い絆が燃えて来る
生年月日書きたくないとペンが言う
ストレスも愚痴も飲み込む母の虹
足して二で割れぬ二人の旅続く

雲南市　菅田かつ子

サンキューと言えばにっこり振り向かれ
お日さまへ今日も元気なスニーカー
脇役を今も続けて居る誇り
わくわくの気持どこかへ置き忘れ
楽しみが一つあったら生きられる

雲南市　松本昌

生きてやるまだ生きている八十路です
麻酔から覚めて自分を見失う
退院へうれしい孫が来てくれる
もういいか父より長生きしてる年
週刊誌買うに勇気のいる田舎

雲南市　松本はるみ

斐伊川の風に雑念すくわれる
真ん中に川があったという事実
今の世に平和の涙忘れかけ
舗装路が切れて山百合ゆらり佇つ
青空へ昭和ひと桁背をのばす

岡山県　髙岡茂子

根くらべ庭の草にはいつも負け
母の日だ子から電話で缶ビール
父の履く運動靴は児のお古
嫁して半世紀しっかりと根をおろしてる
電話ならすぐそばにいるロスの兄

岡山県　田中　恵

思考力ゼロでも花は美しい
生かされて照る日曇る日飯を炊く
おばさんの同情癖がなおらない
開け放し小鳥の歌を聞いている
振り出しのわたしを探す一人旅

岡山県　山縣　のぶ子

ステップバイステップ我が道を行く
俺の飯まだかと猫が纏い付く
ひつっこく誘われるのも花の内
半世紀でんと構えた桐箪笥
欲得は言うまい明日があればいい

岡山県　池田　たか子

うつむいて咲くカタクリの生きる知恵
ロボットに癒しの笑顔ゆずれない
在りし日の母を重ねてボランティア
花束になれない野花性に合う
アナログの前頭葉がカビ臭い

岡山市　工藤　千代子

枇杷の種ちょっとわがまま過ぎないか
深緑を縫うようにして来た手紙
古稀ですの欲がだんだん減ってくる
いっせいに芽吹く次男も三男も
残念です縁切れたと笑う医者

岡山市　丹下　凱夫

葉桜になって静かなウォーキング
初恋の町にチャペルの鐘を聞く
有り余る時間で川柳ができぬ
牡丹の散りざまに見る教えかな
卵掛けごはんかのりたまふりかけか

岡山市　永見　心咲

台本は使い古したものばかり
保護色をまとう私というカタチ
シャガールと密な話をしてしまう
風薫るマーブルチョコを召し上がれ
くちづけの準備体操終えました

岡山市　前田　恵美子

転んでも希望を持つと力出る
赤ちゃんは希望をかたく握ってる
何にでも興味を持って手一杯
おばちゃんはゆるいズボンでバイキング
おいしいと孫に乗せられ台所

東かがわ市　川﨑　ひかり

病む身とはかくも孤独になるものか
独り居の心だんだん多面体
諦めの心に宿る妥協ぐせ
削られてソーラーパネル並ぶ山
心機一転エールをくれる郷の山

春はいい僕に充電してくれる
頑張れば風も背中を押してくれ
成長をしたなと思う孫の文字
免許更新も一度しよか止めとこか
ロボットでいけそう国会答弁

松山市　古手川　光

杉花粉床暖房がカットする
古時計歴史を刻むまだ刻む
おでこのかたち利口そうにも見えますね
アゲハチョウ天舞うかたち軽くなる
恰好つけ真正面に座らない

松山市　近藤　修二

人間の尊厳崩す兄の萎え
休診の医師も病気という噂
あの人は今へ捜してほしくない
訳有ってうすむらさきの花が好き
むらさきの花に一日見守られ

松山市　宮尾　みのり

肩書きを何も書かないから重い
几帳面すこし楕円になってきた
肩の荷を下ろすと消えていたファイト
図星だなまっ赤になったカメレオン
迷いなく5年に決めたパスポート

松山市　柳田　かおる

すぐ転ぶムードに弱い三毛である
車座のクラスメートは皆老いた
座りだこそんな女はもう居ない
五合飯食った二十歳のころ粗食
鼻ピアス男の見栄は知れたもの

大洲市　中居　善信

それぞれの個性大事に咲き誇る
登山ガイド草花の名も仕込んどく
神のお遊びなさる真っ白な雲海
すがすがしい目覚め今日一日は晴れ
頸骨を痛めて狂い出した葦

西予市　黒田　茂代

薄味のようなお方でホッとする
仲間っていいな鳥さえ群れて飛ぶ
とりあえず風が味方になってくれ
子を案じ案じて五年目の夏よ
返事の無いまま春は終ってゆくのです

西予市　西田　美恵子

応募券こつこつ溜めて自嘲する
同行二人土佐路は花の雨の中
幸せを使いはたしてならぬ今日
チューハイのこの幸せが合っている
しみじみとチンパンジーの手と同じ

土佐清水市　辻内　次根

沖縄県　森山文切

咳に塗れた剣花坊の天皇旗
ゆでたまご浮気がばれたのは一度
出血をするほど爪が恥じている
胸を張れまた地下茎に叱られた
大皿は出し入れされぬ食器棚

北九州市　小松紀子

年かさねヤル気スイッチたがゆるむ
週三回ボランティア行けば立ちなおる
亡母の年こえるも母は越えられぬ
まわるすしお一人さまで今日も行く
赤ちゃん大好きほんわか気がなごむ

唐津市　坂本蜂朗

母介護済んで病の七回忌
今更と思えど焦るロスタイム
青春の日記が埋まる郷の浜
外つ国の娘の着信に四股を踏む
カラオケを身振り手振りでカバーする

熊本県　岩切康子

本日からおやつを止めて水を呑む
目的の買物だけとはいかぬ籠
カーテンを開けずに寝かす思いやり
次つぎと思いが走り多忙です
三島めぐり橋でつながれバスの旅

熊本市　杉野羅天

声高に叫んでいます平和論
大異変花散って会う銀世界
美田美畑いつのまに荒れますか
貨物列車十七輌にある願い
一点物求め婦人の目が光る

札幌市　小沢淳

セクハラに古い男のうらみ節
自作主演将軍様の意のままに
飛び跳ねてこの世の先を覗きたい
音の波明治が生きる時計台
トンネルをやっとこ抜けて視野無限

男鹿市　伊藤のぶよし

芯なら硬め見た目なら柔らかく
葉桜も根っこあっての幹と枝
まだまだ人間看板下ろさない
使うのは今さ奥の手錆びて来た
時々はドローンになり明日を見る

青森県　松山芳生

断捨離の途中泣いたり笑ったり
愛憎の縺れしみじみ枯すすき
待ちわびた津軽へ花びらのシャワー
もやもやを吐き出す一服のタバコ
幸せの会話が出来る人と居る

弘前市　稲見則彦

バスで来たそう言ったのにお茶が出る
函館は連絡船の似合う街
熱帯夜眠れぬままに聴くショパン
深緑の桜の幹の逞しさ
返済を待ってはくれぬ妻といる

弘前市　髙橋洋子

追伸にしっかり太い釘を打つ
終活はあなたの森出てから女は蝶になる
あなたの森へ還るため
運命線もうあるがまま逆らわず
カーネーション母は心に生き続く

弘前市　須郷井蛙

10分の散歩へ10分支度する
朝からの晴れにも見てるだけの歳
財力はあるが体力ない旅行
病気後の薬ガッポリ宙に浮き
三食のタイムどうでもいい夫婦

弘前市　今愁女

北からの眉唾で聴く全非核
信じてよいかと北の全非核
穏やかな筈の余生を刺激する
尾籠もなんのテレビで便秘学んでる
さくらからりんごの花に津軽里

東京都　川本真理子

子や孫へ形見に春を置いていく
アロマテラピー遠い日のあの草いきれ
のんびりと地球の最期感じてる
読みかけの本置いてゆく君の部屋
歳をとるのも悪くないなと思える日

東京都　まえでとよこ

音もなく時きざみをりさくらの木
おばあさんの歯にやさしいねかしわもち
事情さまざま少子化の世に捨て子あり
五階から投げおとされた児は二歳
ふしあわせなこどもの記事を読みかえす

横浜市　菊地政勝

胃袋の言訳を聞く内視鏡
老眼に処分が進む文庫本
指切りを忘れぬ友といる疲れ
碁敵に打ちのめされて仲がいい
頭数不足した時だけ誘う

さいたま市　星野育子

バラ園と女の園のトゲ注意
誕生日途中下車して旅つづく
記憶も記録も無くて迷路のまま
委ねたいそんな新党待っている
半開きのカーテン満月を見る

香香が子供の内に会えるのか
季節外れの花の句の謎知りたくて
雨の日も変えられません通院日
母の日の珈琲あなたにも淹れる
カジノまた悲惨な家族作らぬか

上尾市　中村伸子

星の夫いまだ出張かと思う
倦怠期も今はなつかし逝った人
しゃしゃり出ぬ気持を持って子の元へ
私より痩せてる人になぜかホッ
一目惚れオモチャの青い鳥を買う

朝霞市　前田洋子

番傘川柳本社　8月句会

（54回水府忌）

日　時　8月6日(月) 受付17時30分
場　所　大阪リバーサイドホテル
JR環状線「桜ノ宮駅」
西口下車
TEL 06－6928－3251
お　話　「生きること・死ぬこと」
葛野　勝規　氏
宿　題　席題　当日発表
「曜　日」　大西　將文　選
「　残　」(字結び可)
菱木　誠　選
「炎　天」　油谷　克己　選
「さ　て」　木本　朱夏　選
「あっさり」　森中惠美子　選
各題2句　**出句締切　18時30分**

（つづき）

恩のある人への節目忘れない
家族愛と思い余分な事をする
背を押され趣味の会へと出たものの
欲もなく得も求めず一日よ

（前月分）鳥取県　橋谷静江

そこそこの酒とつまみの誕生日
テレビからあれせこれせと誘われる
はつらつと命を繋ぐ散歩道
頑張れの母の言葉にふるいたつ

（前月分）倉吉市　田中紀美恵

新入生カバンと一緒に歩いてる
竹の子もやっと頭をもち上げり
農作業日増し忙しくなってきた
春一番遅れてきてもものすごさ

（前月分）山鹿市　中山好打

プライドを捨てると背筋が伸びる
乱気流夫婦喧嘩を見てきたな
腑に落ちぬ雲は頂上に居座る
天国から来る僕への見積書

（前月分）弘前市　髙森一呑

川柳塔の川柳讃歌 ⑯③

上方芸能評論家　木津川　計

猫の字のけものへんの背丸く書き

川　本　真理子

猫の手も借りたい、猫なで声、猫の額のような、猫に小判、猫舌……、こうした猫ことばが日本語を豊かにしてくれたこと以前も書きましたが、犬ことばは少いのです。猫は平安時代から家の中で飼い始めました。ですからよく観察したのです。犬は当時放し飼いでしたからその生態を殆ど知らないのです。なんでもよく観察するほどに対象は正確に捉えられます。真理子さんは猫のけものへんにびっくり。だからその背を丸くして愛らしく。

もうすんだことだし桜も散ったし

谷　口　　義

義さんはなんでもないことを詠んで人間を捉える才の持ち主です。前号の「おばあさんの隣におばあさんが坐る」もそうで、おばあさんの実態を捉えました。今号の句もなんでもない詠みで、しかし、コトの終りを告げる「桜も散ったし」憎いのです。女子高生の短歌に「言いにくいことを言いにくそうに言うあなたらしさのそれがやさしさ」に似て、義さんはなんでもない詠みで言い尽くす義さんらしさのそれが川柳、というものでしょう。

日曜を待ち遠しいと思わない

古久保　和　子

「毎日が日曜日」という手垢にまみれたことばを別の角度から和子さんは捉えたのです。唾棄すべき言い回しに「継続は力なり」があります。継続が悪徳だったり、腐敗であるここ只今の政権も教えているのではありませんか。状況を捉える鮮度が落ちると、常套の捉え方に埋没してしまいます。発見する人がいなくなると世界の進歩は止まるのです。文筆に携わる人は表現の狩人でなければならず、世の中を認識する一番乗りであってほしいのです。

物忘れ瞬間芸が冴えてくる

山　岡　冨美子

僕が好んで見るテレビ番組は三つあります。ボクシングと高校野球で二つですが、両者共に本気で対戦するから見るに値するのです。大相撲とプロ野球を見ない訳は八百長と手を抜くいんちきがはびこるからです。もう一つがマジックです。いんちきの極みですが磨きをかけたごまかしの瞬間芸が驚嘆させてくれます。檻の中の美女が瞬時に消えるように冨美子さんの物忘れも一瞬の冴えです。それを瞬間芸と捉えたら物忘れも楽しからずやです。

弁当を出され一日縛られる

伊　達　郁　夫

ありますあります。弁当を出されたばかりに昼からの余興大会を見なければならない羽目に陥るようなときが。そうなったら辛抱との闘いです。行きがかりで縛られるのも弁当ひとつへの義理故です。情けない義理立てです。そもそも「縛られる」催しに参加したのが間違いでした。いや、その参加もぎりから、となると人間はなんと窮屈な網の目にとらわれていることでしょう。郁夫さん、僕と二人で縛られない自立した道を行くとしましょう。

少しずつ捨てる淋しくないように

平　井　美智子

関西常磐津界の重鎮になられた私の師匠は女性でしたが、物を捨てるのが嫌で、一切を取り込むのです。一人住まいの6畳4.5畳リビングのマンションはどこも満杯で足の踏み場もなかったのです。銭湯へ行かれるのが不思議で、聞くと風呂場も倉庫にしているのです。呆れました。急逝されましたが身内による片付けは大変でした。美智子さんのように「少しずつ捨てる」術を心得ねばなりません。

自選集

結婚記念日忘れてましたねえふたり
あの時の父あの時の拳骨よ
二歳のつぶやきトランプのつぶやき
しばらくは無になる理髪店の椅子
百年は遠い百歳は近い

小島蘭幸

ストイックなどと僕には縁遠い
姑息だと思う居留守で殺す息
好漢になれず好好爺も無理か
日銭には埃が溜まる暇がない
ホッとする待合室の知らぬ顔

森山盛桜

半々に
明けがたになると昔が逢いにくる
夢うつつ半分死んでいる私
書いている時間は生きている時間
食べている時間も生きている私
半々に橋を往ったり来たりする

八木千代

不定愁訴　五月の気温定まらず
起承転結　結のあたりの我が余生
やがてを思う片方だけのイヤリング
モラル喪失若いスマホが席を占め
創作へ芯まで熱い鉛筆よ

山本希久子

歎異抄読んで長生き出来ますか
土砂降りになっても慌てないメダカ
爪楊枝になるよな電柱みつからぬ
抱かれて骨の匂いのする深夜
電柱が腹をかかえてゆれている

板尾岳人

断捨離の先ず手始めはあんたから
みんな良い人嘘ばかりついている
自然から見れば人間だって邪魔
開封をするとしぶきが飛んでくる
瘡蓋を捲ると見える青い空

川上大輪

夕焼けを探しに行くと決めてから
冷蔵庫は満杯詩人にはなれぬ
雨靴が無いので雨を視ています
雨の日の金魚逆立ちして遊ぶ
液状化はじまる雨季の左脳から

木本朱夏

父の死へ数珠のつめたき今更に
左遷地の空気がうまいので耐える
虹が立つ受験勉強大丈夫
英会話できるわが子を見なおした
造花見て隣のおばさん驚いた

小西雄々

スパゲッティくるくる明日を模索する
鶯の声に誘われ峠茶屋
ひたすらに蜜を求めて群れる蜂
水芭蕉の白ふるさとが生んだ色
タンポポを一輪飾り誕生日

斉藤劦

あっけらかん天下無敵の鯉のぼり
挫折したトランペットが黴だらけ
ゴキブリと私の立場ほぼ互角
不届きな根の一本が酒浸り
二日酔い己を恨み虫の息

新家完司

躓いた小石あまりに多過ぎる
鳩尾の底にまだある正義感
ネクタイを外すと首が太くなる
善人になれない壁が高すぎる
老い二人 二人でひとりだと思う

高瀬霜石

今日は今日 明日は明日の僕で居る
立ち止まることなく今日の日を終える
AIに教えその後は教えられ
自由だけ取得で忙しい余生
子にはまだうるさい母を守り抜く

竹治ちかし

歓声にノルマ果たした鯉のぼり
連休は痛し痒しのトロ握り
6月の旅うず潮が呼んでいる
補聴器を頼り百歳夢でない
骨粗鬆青葉若葉に湧く闘志

津守柳伸

身についたもったいないで来た卒寿
広い世間も狭い世間も住むこころ
欠席にしよう小雨でも雨は雨
ゴミ出しも一回置きで済むひとり
雪溶けの水が国境まで流れ

都倉求芽

梅干しがふたつ出てくるにぎり飯
君に逢うために明日がやってくる
もうすこし進むと虹の外に出る
社会福祉の役員はボランティア
新しい花芽をつけた長寿梅

土橋螢

西出楓楽

それなりのリズムで暮れる昨日今日
日本は豊か九条ある限り
たそがれて同じ所でけつまずく
犬好きと猫好き話噛み合わぬ
これからの旅はもっぱら鈍行で

仁部四郎

フェイクでもあっさり笑えるニュースなら
フェイクとはあれも和製の英語かな
ＣＭとフェイクニュースの紙一重
利己主義がフェイクニュースを太らせる
方舟にフェイクニュースが穴をあけ

前たもつ

口喧嘩も脳の刺戟と老い二人
桜前線役目を終えてほっとする
憲法記念日九条書き写す
情熱を捧げるものがあるのです
二度目の出会い神はやさしく傍にいる

政岡日枝子

用心の防犯ベルがこわれてる
漫画描く人にそれからを聞く
新しい風に圧力やや弱く
一羽ずつ倖せ配る千羽鶴
梨を喰う独りの夜に音させて

三宅保州

告白をされて肩の荷重くなる
三人組と三羽烏は似て非なり
ひと電車早く行くのも熱意です
何もできないが歓迎ならできる
無理したら死ぬと言われてから元気

宮西弥生

花として散らぬ王者である月の花
年金に馴れて今日も医者通い
傷口を塞いでからの力溜
梅雨寒の一日平仮名の便り
このレール戻ればふるさとに戻る

福士慕情

日本一桜吹雪が堀へ舞う
花吹雪一気に堀を埋め尽くす
一片の重い重ねる花筏
花筏盛り上げ鯉が息をつく
花吹雪あびて冥途の一里塚

村上玄也

指先が覚束なくて直ぐこぼす
耳遠くなって世間に疎くなる
眼も老化あやしくなってきた視界
インフラも我が身も老化して脆い
腰痛い膝が痛いと老い同士

句集の森

同人句集『川柳塔』

尼　緑之助

帰省の子飲んで飲ませて寝正月
人間の支えたルール古しという
笑ったが因縁ごとに気が疲れ
どしゃ降りをおどかすように気象台
ミレーの祈り干拓地が暮れる
月明り故郷はいくらでも話す
箒の目砂のいのちを呼びもどし
旅鞄駅まで歩く老夫婦
スコッチが走り原稿紙が埋まる
大砂丘ビールの泡を吹いて呑む
風紋の神秘砂丘をそと歩む
ひとりの寝酒しじまは限りなき

日御碕にて

灯台の夕陽神話を抱きよせる
感激の句碑は神話をたどりつつ
緑之助ここに移って聴く松籟

（昭和49年7月7日発行）

温故知新

『高杉鬼遊川柳句集』から

地震にも困りサリンにも困る
かぶと虫ずいぶん出世したもんだ
薬局はどこにあります旅の宿
クーラーも夫も機嫌わるい夏
粋筋もかわる宗右衛門町の雨
とび抜けて出すぎた杭は叩かれず
ハンガーにいつまで掛けてある父よ
一冊の辞典ひねもす豊かなり
晩酌をそろそろ燗にする秋だ
ふるさとの井戸で先祖にお会いする
詩の本を貸した彼女も嫁きました
仏さま今日はおでんをたきました
日本語のわからぬ鯛に祝われる
いやな顔したことがない地蔵さん
あれも毒これも毒だと生きづらし
将来を孫にかけてる虹ひとつ
カタカタと奥さんを呼ぶ鍋の蓋
ぐうたらな鬼　極楽へ迷いこみ

丸漫抄

川上大輪選

山口市　中前幸子

日傘くるくる毒舌をはね返す
満月に集まる信楽の狸
耳栓をしても聞こえる風の私語
今日の秘密はコーヒーの香に沈め
青葉ゆらゆら言葉探しをしています
久し振りに鳴らないラッパ吹いてみる

千葉県　廣瀬良磨

振り出しに何度も初期化する心
プライドもたまには風呂につかりたい
生意気な背中最近丸くなる
体形の移り変わりを知る鏡
成長の途中で値札付けられる
終了の鐘は自分で鳴らせない

豊橋市　藤田千休

良妻の殻ぬぎすてて勝負服
整形の鼻にバランス崩れだす
改竄がすらすら書ける文科省
善意傘雨の夜道へ消えたまま
CGの写真が好きな赤い糸
標準語と思いこんでた国訛

佐賀県　真島久美子

彷徨った時間がシミになっている
一つしかないので捨てることにする
褒められてばかりの花は散りやすい
空っぽが好きです着飾っています
指先が依存しているユーチューブ
どんな過去だろうか刺青が綺麗

愛媛県　井関はるえ

目刺しさえあればこと足るコップ酒
反対はひとり上げた手うろたえる
裏切りの手とは知らずに握手する
手鏡で確認女戦場へ
傷心をつくろう糸が見当らず
洗濯機の中で軍手が吐く本音

人肌に触れて枯れ木も目を覚ます
髭を剃り少し自分を好きにする
似てる人居るのか会釈されている
補助線を明日の暦にそっと引く
身を削る思いを重ねても太る
空にVきりりと描き渡る鳥

那覇市　前川　真

頭脳は一流　人格は三流
損得は二の次決断に至る
立ち止まる大人　走り出す子供
喪が明けて殻を破ってゆくオンナ
ダイエット体形隠すAライン
ときめきに年齢制限ありません

横浜市　川島良子

カーテンへ新たな春の音を聴く
春の日の記憶躑躅のまっ盛り
還暦の祝いか癌が温和しい
大丈夫問題ないと言い聞かす
真っ正直に生きてきました皺と染み
紫陽花の心変わりを許そうか

門真市　坂本星雨

カーテンのレースは初夏の風が好き
私を消毒してる樟若葉
約束が今年は早いクレマチス

貝塚市　吉道あかね

共白髪ふたりの歴史だと思う
老人の入口きつく螺子を巻く
風も凪ぎ今ゆったりと現在地

大阪市　小野雅美

お互いに嫌いと悟る初対面
たかが恋されど恋さと嘯く夜
輝けと毎夜鏡を叱咤する
三日月にぶらりと揺れる片想い
太陽と月との距離がもどかしい
友の子に育ちの良さを見てしまう

和歌山市　北原昭枝

退屈な日が続いてる雨の音
引き出しを覗けばあの日セピア色
行間の謎をゆっくり解いている
いい針に出会い袋の底を縫う
平常心守ってつつがないふたり
ちちははの声をきいてるお仏壇

米子市　池田美穂

鯉のぼり都会に泳ぐ空がない
お土産に付けてあげたい庭の草
新しい私を生んでくれる朝
補聴器が仲間に入れてくれる会
難儀して産んだ句なのに羽ばたかぬ
川柳の種いくら播いても芽が出ない

名古屋市　山本　三樹夫

相続で薄い情けに涙する
参道で遅れる足を友が待つ
道程は寄り道ばかり喜寿迎え
硬くなる頭をほぐす旅に出る
混雑と孫の重さに肩が泣く

江南市　脇田　雅美

幸不幸あみだくじ引くようなもの
悩んでも化かされている方が楽
西日より朝日を好む花の位置
終活に自己の生き様見え隠れ
エステ気分障子紙貼る妻の顔

和歌山県　森下　よりこ

一人ぐらし自己責任のくらしです
いざとなったら開き直って八十歳
それなりの味で即席おみそ汁
いい具合一週ごとに雨の音
庭の花よく見えるよう窓磨く

和歌山市　倉橋　悦子

この笑顔いいね遺影に使えそう
平成の時代に乗れぬ相撲界
季節まで何思ってか前倒し
力まずに暮らしましょうとかすみ草
変えられぬ親の機嫌と空模様

和歌山市　定松　宏枝

まだ先の予定書き込むカレンダー
友の顔丸と四角と三角と
お早うさん今朝も元気なお隣さん
勉強に終りはないと今気付く
虎の柄着ると応援熱くなる

和歌山市　鍋嶋　澄子

ゴミネット透かしてカラス嗤ってる
春霞あの白い花化身かな
君子蘭赤じゃないけどひかってる
スニーカーどこか行こうと呼ぶこえが
かなわんな今年の初夏は暑すぎる

和歌山市　西川　千鶴

モザイクをかけておきたい過去がある
ライバルは鏡に映るこの私
雨が好き先祖は蛙かも知れぬ
アルコール注ぎ動かす錆びた脳
引き際を知らぬピエロの赤い服

和歌山市　福島　一雄

夏蒲団出しては仕舞う日が続く
坪庭に餌を蒔いても雀来ず
父の日に照れつつ着ます派手なシャツ
孫の靴減り方までが私に似る
目はかすみ耳も遠いが舌達者

三食に野菜大事と付き纏う
疑問符がまだまだあって八十路坂
終活は何時も頭に先送り
先祖には叱られそうな今の贅
難題にぶつかりながら泳ぎ切る

和歌山市　福呂秀子

問われても速答出来ぬ老いの脳
齢ですね医者の口調に腹が立つ
我が仕事健康管理のみにあり
好物は食べたらあかん養生中
世話忘れ花の咲くのを待っている

大阪府　小栢こずえ

雨宿りする軒下にあるロマン
徘徊も趣味のひとつに加わりし
おおあくび心の憂さも吐き出して
一言を添えて花束彩を増す
情報の海に沈んでいる本音

大阪府　神野千恵子

相槌を打った話が止まらない
退屈を紛らす良薬無駄話
句を友に一人居の窓日なたぼこ
手をつなぎ互いの杖となる老友
朝掘りの筍夕餉の顔となり

大阪府　畑中節子

河内生れ河内の酒が肌に合う
後期高齢女系家族でみな元気
割勘に時間がかかるおばちゃんら
うっかりばかりしていますのでよく肥える
ドッコイショ言ってやらねば立てぬ腰

大阪市　柴本ばっは

地位も名もないが師である父である
軽重を推し量ってる初対面
うけたくて面白噺ちょっと盛る
のほほんと暮らしたツケが今来てる
肩の荷を降し嬉しく寂しくも

大阪市　長髙俊雄

国会の中継とても歯痒くて
核捨てろ言って自分は持ったまま
よい季節来たが関節痛いまま
ＯＢ会会費を払うだけになり
時間あるけど寄り道しなくなる

大阪市　樋口眞

心ぶよぶよ打たれ強くは無い私
気立てが良くてかわいい子犬雑種です
期待していた春の幻想遠ざかる
母に怒鳴られ父は慰め役でした
白黒で割り切れなくて皆好き

大阪市　森廣子

辞書の中ミートゥー叫ぶ女偏
莫高窟ラインで届く友の旅
蔦切って気付く障子の綿埃
好奇心干して叩いて再稼働
三次会隣の猫と目が合うて

大阪市　横山里子

まあだまだ気力はあるが体力が
何かある握手しながら目はそっぽ
どうせならやっぱりいいね大ジョッキ
まだ若い堪忍袋すぐ切れる
つくり笑い心のうちがありありと

堺市　羽田野洋介

輝いて熟女が跳ねる句会場
詐欺の罪もっと厳しくなぜしない
酔うほどにグラスに浮かぶ恋数多
淡い恋むくむく湧いてくる元気
身体中の傷を舐めなめ生きている

池田市　上山堅坊

お揃いの水着買ったと娘泣く
地肌です日傘をしても小麦色
十分に理解し合った離婚劇
ゆるキャラは雌雄不明の哺乳類
乱雑な過去と向き合うお引越し

池田市　太田省三

心地いいウソ真実が遠ざかる
フェイントをかけて本気度確かめる
わがままな女演じるピンヒール
謝るのは今本降りになる前に
うつらないように涙へ近寄らず

河内長野市　原熊知津子

陰徳をちょっと積みます許します
赤ちゃんににぎにぎされて降りるバス
外国人あふれ私も旅気分
思い立ちスキップしたがまだできた
へこんだ日幸せ数えまたあした

河内長野市　穂口正子

厚化粧至らぬところ隠してる
初めての機器に出くわし齢を知る
人生のクライマックスいつだった
反抗期孫はまともに育ってる
満点でなくていいのよ老夫婦

高槻市　三谷白黒

水族館主婦の目線は鯛や海老
老朽化悲鳴あげてる水回り
口開き更に品格落とす人
リモコンで主人動かす日も近い
職探し狭まる道の高齢化

豊中市　荒木郁子

今も好きでも許す気はないからね
かくせない恋心揺れ染める爪
ほめ言葉力を入れて二度も言う
羽根のある我が相方は今日も留守
永く生き取れないままの角がある

豊中市　貝塚正子

親も見ず花が咲いたら散らす風
春が来た私の靴は未だ眠る
キャッシュレスそれでも元が要る話
登りつめ驕りと油断招く椅子
川柳で世の中まるく見る癖も

豊中市　源田啓生

バーゲンが我慢のサイフこじ開ける
売ろうかと思う子牛がそでを舐め
ハイポーズそれでいいねと言う鏡
リメイクし古いケンカも売る女房
シャワー全開悔しい過去を流し切る

寝屋川市　岡本勲

五十年互いに包み包まれて
パソコンとどっぷり遊ぶ老いの楽
会いたい人彼もそうなら嬉しいな
シャッター街セール幟もうな垂れて
本当かな歳取るにつれ欲が減る

枚方市　佐藤武紀

探し物ぼやきながらの小半日
おごりならお供しますと梯子酒
母の日は亡母を偲んで母の味
ほろ酔えば下手な歌でも二三曲
薫風に歩け歩けと万歩計

神戸市　玄番美恵子

AIに奪われている人の味
人生の迂回路ナビに聞いてみる
いつからか段の高さを気にしてる
バラの花トゲを隠して咲き誇る
ゴールデンウィーク今日は何曜日

神戸市　敏森廣光

素面では告白できぬ裏事情
酔いがさめ妻の目線が気にかかり
米寿でもまだまだ咲かす好奇心
うす味に塩ひと振りの親心
老いの手をスルリと抜けた青い鳥

神戸市　山根弘華

クラス会元取的のちゃんこ屋で
三立てを食おうがトラキチはめげぬ
手絞りをぱりぱりにする大西日
心太心配事も押し流す
終活へ一直線のレール敷く

尼崎市　清水久美子

年齢はいつも少なめ妻の嘘
今度こそほめとこう髪染めた妻
来世には少しは呑める嫁がいい
土が友鍬は私の命綱
ふるさとは今も単線無人駅

篠山市　久保木　剛

国の借金孫の世代に先送り
妻とのご縁夫は運のいい男
農家に嫁ぐ扱い慣れたトラクター
無事卒業孫真ん中に撮る写真
大家族いつも母親仕舞い風呂

篠山市　長澤喜弘

ストローで捨てたい愚痴を吹き飛ばす
丁寧語舌がもつれる浪花っ子
出戻りも人生通過途中駅
痛む足勝手な時は速度ます
父ちゃんと百までつかる菖蒲風呂

三田市　幸田厚子

古希の坂平凡でよい元気なら
年毎に過ごすダラダラなぜか増え
孫帰る障子の穴がまたひとつ
体調の都合で味に不都合が
テレビからサプリ宣伝悩ませる

三田市　辻　開子

素晴らしい日本に不足政治力
同総会次はあの世でやりましょう
忘れ去る神さまからの贈り物
義理人情これが私の守り神
ありがとう妻がいっつも僕の側

宝塚市　太田としお

逢いたくてスマホ身近に引き寄せる
限りある愛をやさしく膨らます
さりげない言葉で愛の一行詩
つぐないの愛の十字架なら背負う
つじつまを合わせて愛のいろは坂

尾道市　日谷　寛

スマホから届いた鐘はきっと愛
勝負の朝一直線に引く眉毛
ごめんねと書いて余白の黙示録
ご近所さん三日も会わぬ雨続く
メンテナンス家か私か思案する

竹原市　若年幸子

尖ってみても真ん丸老いである
体操の一拍ずれは気にしない
強かなシナリオがある北のドン
転んだら寝たきりですと威される
表札を覚えていたか燕来る

府中市　岸田　武

三原市　笹重耕三

好きですと愛を認めた句読点
余裕などない年金の背比べ
昨日も今日も落葉を掃いている懺悔
隠蔽という傲慢な高鼾
何もかも忘れて春の日向ぼこ

三次市　伊藤寿子

伸びきったゴムとも知らず無理のつけ
血圧計寝ていなさいと指示を出す
忘れてた歳を体に笑われる
医者は笑みお疲れですとしか言わぬ
母の日へ何も要らぬと言っておく

鳥取県　門村幸子

風が味方愉快愉快と鯉のぼり
見っつけた「体が元手」いい言葉
免疫力笑い袋で押し上げる
捨てるには惜しい切抜きまた溜める
歳月が歴史の闇をあぶりだす

鳥取県　下田茂登子

抱くことも抱かれることもない夫婦
眠るがごとく静かに逝った亡夫恋し
独りとは眠ることさえ難しい
デイに行く老人ばかり村は空
困ったとも言えず一人で泣くばかり

鳥取県　橋本整

聞くだけでいいから聞けと老いの愚痴
退屈の愚痴がジョッキの泡とばす
好奇心めらめら燃して生きている
生涯を頑固に生きて卒寿過ぎ
過疎の地が免許返上に異議申す

鳥取市　大前安子

おかしいなお世辞に弱くなってきた
任せるも任せられるもパワーいる
妥協癖いつか私が消えている
にらめっこしていいですか仁王様
思うことあって早起きなんのその

鳥取市　副井裕

故郷出てそしてドラマが始まった
黄砂浴び採れた野菜は中華味
サウナ風呂過去のモヤモヤ汗に出す
ぶり大根互いに美味さ高め合う
麻婆豆腐ピリリで脳が蘇る

鳥取市　山野すみれ

重箱の隅で固まる黒砂糖
その時が来るのを待って味をみる
帰る家あるか都会の人の群れ
心地良いぐったり程のおもてなし
たっぷりの白のページを埋めて今

倉吉市　大羽雄大

茶碗と箸あれば歌っていた昭和
わくわくのページを捲る手の焦り
明るさに七癖全部隠してる
夜通しのコンビニいざの拠り所
朝夕の仕事になった蒔いた種

倉吉市　岡﨑美知江

淋しさを少し重ねた笑い皺
もらい風呂心をつなぐ過疎の村
大声で三度笑えば楽になる
百の顔写しただろう窓ガラス
人間がこわくて鍵をしめている

倉吉市　田中けいこ

扇風機とストーブ肩を並べている
紙ふうせん部屋で遊ぶに都合よい
スイセンとニラ間違って食べてはならぬ
燃えるゴミにホチキスの針一本を
片づかぬやらねばならぬ事ばかり

倉吉市　若松由紀子

一流より遊び心のある二流
逆らって持論通してあと孤独
強烈な香水乗せてバスの旅
朝が来た昨日の若さ戻らない
自転車のカゴでケータイ鳴っている

米子市　伊塚美枝子

スローモーションこける瞬間考えた
雨降ればはりきって鳴く田のカエル
動かずに何でも揃う狭い部屋
嫌いですはっきり言える人が好き
風待ちのお昼寝タイム鯉のぼり

米子市　田村周子

パラリンピックすごい元気をもらったよ
暇つぶし本を読んでは脳刺激
ワン公も留守番ばかりすねている
世界情勢平和な兆し見えかくれ
桜咲き施設の庭も春が来た

米子市　戸田真理子

待ち望んだ春も花粉でうとましい
フカフカの土で根っこが伸びをする
豊作のキャベツを虫にお裾分け
どっこいしょ始動の言葉増えて行き
躓いた石に謙虚さ教えられ

米子市　野川宣子

腹八分食べる止めるがせめぎ合う
連休は出歩かないと決めている
記念日も変らぬ時間流れてる
無理難題飲んで来ました四十年
怖いもの無しの私が腰痛に

M寸を引っ張り着てる肥満体
母の日記感謝の気持積んである
夫の介護感謝の言葉苦も消える
目がさめると財布眼鏡を捜してる
検診日ランチ楽しむ老い二人

米子市　見山温子

割り勘が得にならなくなってきた
百歳の義母に歳など聞くなかれ
ホームでも愛だ恋だのいいじゃない
何歳になってもできる成らぬ恋
どうしても偶数月に法螺を吹く

松江市　中筋弘充

収穫の一足先に猿が食べ
田仕事をせかしてるよに蛙なき
先延ばししないで今日は会いに行く
足音に今日の家族を知る私
口ずさむ昔の歌が懐かしく

雲南市　永見安子

立ちしょんをして叱られぬ村に居る
七十路はまんだ下座の村談議
子も孫も継がない土を掘っている
越せなんだ峠に御座す石地蔵
出稼ぎで育てた子等の標準語

岡山県　大杉敏夫

カーテンが揺れる訃報が届いた日
式終えてそれから本当の涙
時どきはスローカーブで話する
まあいいかと思ってしまう五月晴れ
五時限目シャキッとさせる春キャベツ

松山市　郷田みや

下積みを忘れて蝶は飛んでいる
カビ生えた思い出話クラス会
オパールの指輪で女目をつむる
スランプの時期をのんびり途中下車
忍耐の過去繰り返す母と住む

大洲市　花岡順子

百年のさくら桜に酔い痴れる
夜桜にみとれて妻を見失う
うっすらと喜寿むかう妻薄化粧
走馬灯うっすら見える亡母の笑み
朧月津軽の里は春霞

弘前市　髙森一呑

さすが能吏上手い言い訳考える
高いのね転んで鼻を怪我してる
何の日だっけ交番国旗揚げてるわ
依存症かもすぐ数独をしたくなる
乗らぬけど免許更新した卒寿

横浜市　長島亜希子

普通の事幸せを知るこの年で
体調のすぐれぬ友の多き春
風邪気味がぬけてくれないやはり歳
ぼけないで生きている幸かみしめて

静岡市　渡辺芳子

心配の度合いが見える義理の仲
焼き魚のにおいがついたパンが焼け
振るシッポ疲れてちょっとひと休み
ちょっとした笑顔添えたらくる平和

豊橋市　小松くみ子

助けても助けられてる孫の笑み
父母の婚礼写真位牌前
記念樹が所狭しと増える庭
土壇場で一蹴してる運の良さ

豊橋市　西郷紀美代

桜には咲かせる美学散る美学
それなりの庭の花にも自己主張
秘密だと言って笑っている本音
プライドがあって竹光見せられぬ

豊橋市　高柳閑雲

僕を見る無縁仏の笑い顔
逸る心冷やしてからのことにする
大脳が欠伸するやら眠るやら
五線紙をはみ出してると怒る妻

奈良県　中堀優

小気味良くパラパラ散るは花水木
真っさらな朝が来たので忘れます
崖の下黄のたんぽぽがこちら向き
椿の実植えて七年花五ツ

奈良市　尾畑なを江

流鏑馬神事スマホ放列チャンス待つ
東大寺に響くテノール荘厳に
友がみな先に逝ったと母嘆き
親友とて百八つまで付き合えぬ

和歌山市　佐藤まき

百米近くて遠い核家族
息子の嫁も我が子と思う時がある
足腰にあせるな無理と諭される
元の位置にもどってさがす忘れもの

岩出市　村中悦男

子らの恩部下たちの恩気付かない
人生レース試技なしで棄権あり
空しさの極み桜下の宴なり
盃にひとひら浮かべ春暮れる

大阪府　中内孚彦

子等の幸イコール母の幸となる
しおれた花我が身映して胸痛む
髪うすなった耳遠なった老いのぐち
ダイエットサラダだけでは動けない

大阪市　磯島福貴子

まだですか　いつも言われて耳にたこ
若き日の熱き思いに胸おどる
やがて来る別れ思うと胸つまる
幼児に見つめられると眩しいな

大阪市　田中廣子

雨の底冷え寂しい心倍にする
連休も天気予報とカレンダー
風呂トイレちょっと浮かんだ句で長く
川柳で心通える友が出来

大阪市　中島栄子

セクハラで女性の力見せどころ
貧しくもこの親あってこの子あり
人殺す世界が願う銃規制
庭に咲くつつじ笑顔で日本晴れ

大阪市　前川善之

フラダンス歳を重ねたお嬢さん
連休に仕事するのもいいもんだ
南北のすき間にはいるトランプ氏
半年がもうともまだかとも思う

大阪市　松田聰

カレンダーの丸に従い医者に行く
ナイスショット一寸お世辞を言ってみる
ぶ厚いね財布の中味カードだけ
ゴルフの朝妻に気兼ねの一人飯

堺市　古川光雄

医療費が長生きするな耳もとで
大臣はシッポを切って胸を張る
川柳が生きる力をプレゼント
この国で何を信じて生きていく

堺市　大和峯二

週刊誌読んで楽しい記事はなし
靴下を脱いで男は息を吐き
脂っ気ゆび先だけは抜けました
あの調子かわるのかしら北のアナ

泉大津市　磯野不二夫

十指みな名前があってよく動く
エプロンが似合う亭主に惚れ直す
スマホあり長蛇の列も苦にならず
信じてないくせに運勢見て動く

泉大津市　助川和美

どか雪に耐えた庭木の傷の跡
一家四人暮らしたころの釘の跡
母が言う話の矛盾聞き流す
歳忘れても生年月日言える母

河内長野市　中島一彌

老人会連休終えて旅仕度
そこそこに期待持たせる美容外科
金婚後照れず家内とハグをする
ちぐはぐでも笑い合ってる老人会

河内長野市　渡邊修

板門店どこの店やと受験生
休み明け心も財布も五月病
母の日が華やか過ぎて父すねる
この日だけ高過ぎるから別の花

吹田市　岩口　のぞみ

世界一シンプルである日章旗
うんこドリル解いて楽しいケアハウス
鼻の毛穴にとっても似てる白いちご
ヨーグルト菌は元気で腸にいる

豊中市　木藤　こみつ

竹の子を湯がく匂いの両隣
母からの乱れた文字で米届く
母の鼻歌知らぬまに口ずさむ
柚子の酢を舌で量ってちらし寿司

寝屋川市　川本　信子

浅春やものの形も新しく
梅雨前に咲くあじさいの青さかな
無人駅ポストに通う人多し
急ぐとも所作は穏やか新茶立て

羽曳野市　磯本　洋一

ふりかけの黒ごま蟻に見えてくる
ひたすらな蟻の生き方見習おう
七変化今日一日は主婦をする
あの時の出逢いが今や老夫婦

枚方市　坂本　ミヨノ

救援の押さえが打たれ火に油
勝つ度にハグも上手に美しい
竹の子が土の下から呼んでいる
高いから今日は割り勘ありがたい

箕面市　寺井　柳童

懐かしの駅弁求めローカルへ
酒二本駅弁ごはんだけ残り
生きてると疑うことが多過ぎる
疑いの目で見て逆に疑われ

八尾市　田邊　浩三

定年後妻が私の三歩前
聞いてない事まで喋る御節介
寝物語する程元気有りません
半世紀同じ顔して恙なし

八尾市　前田　紀雄

薄れゆく父母の姿をさがす盆
才ないが自分の人生は生きてきた
生きてりゃいい良いことあるささあ飯だ
名優逝くドラマの演技そのままに

神戸市　輿水　弘

芍薬の昔語りを聞いている
嘘くらい言える自由があればいい
夜に泣く鳥になったか不眠症
溺れてる心に石は投げられぬ

神戸市　田本　古鈴

神仏最後は金か祈祷料
立飲屋友も減ったし飲む量も
何時までも少しの事を愚痴る妻
目を細め紅葉お手てで爺ビール

伊丹市　平井富夫

親切の中にちらほら善と悪
負けたって記念写真はVサイン
深海のカニの不満は聞こえない
三センチドタバタ騒ぐ街の雪

小野市　田中辰夫

折角の海外雨に負けられん（台湾旅行）
天燈に願う川柳上達を
士杯夜市外国人と自覚する
五個買えば一個おまけとくすぐられ

加西市　山端なつみ

もふもふというには強いが愛猫を抱く
猫くしゃみぼくの花粉症うつったか
聴衆は美人を探す合唱団
オペラ来る文珍も来るどっちにしょ

篠山市　長谷川善輔

恙ない老いに感謝を忘れない
もったいない思い続ける戦中っ子
ナースキャップ終えると今日の顔になる
夏野菜苗菜園が活気づく

篠山市　藤井美智子

こっくりと頷き黄泉へ逝った母
ようやくと逢えたか父と黄泉の国
晩年は子孝行な母でした
中陰が過ぎて淋しさやって来た

三田市　九村義徳

野菜類嫌いでないが後回し
やれやれと発せた時はまだましか
会の世話処理のしかたで角がたつ
大笑いここ何年もやってない

三田市　宗福清司

深酒の甘いエキスは身の破滅
満腹しテレビみながら夢みてる
暗示かけ若さを保つウォーキング
一人旅不安半分老いの道

三田市　馬場貴美江

日常の良さ確かめに旅に出る
あくびして塾に入っていく子供
ワンルーム二人は酸素不足です
ミニローズ薔薇の矜持を持って咲く

三田市　松本ゆかり

舌先を尖らせ嫌な奴を刺す
一隅で同窓会をしてる通夜
諦めの悪い刺身が動いてる
診断が老化とあれば是非もなし

宝塚市　岸田万彩

凍て付いた地球が徐徐に溶けはじめ
青空に思い思いが浮かんでる
青い空世界平和を抱えてる
マスコミの群がる先は暴露記事

西宮市　福田正彦

弱音など吐かず春への畑仕事
喜びの言葉はいらぬ手を握る
ホタル飛ぶ里は市街化川暗渠
身の不覚思わぬ病背負いこみ

姫路市　中野忠

留守番の夫が洗濯目が点に
ロボットとパネルがしきる回る寿司
断捨離の決意はこれで何回目
この話時が来るまで秘めておく

広島市　田桑恵子

はははあーん会話でわかる冷えた仲
始まった奥歯に愚痴で下を向く
もったいない昭和の抽出し捨てがたし
ここにきて資格は後期高齢者

広島市　松尾信彦

春分だ明日から少し昼が増え
本を読む耳学問も忘れずに
水の地球汚さぬように無駄にせず
人も花も色々ありてこそ楽し

尾道市　小畑宣之

数秒が耐えられなくて切れる葦
血の赤さ汚さ今日の腹立ちよ
補聴器で仕切り直しをして見るか
結婚は小吉で良いおみくじも

竹原市　土井輝恵

ひと春にあちこち花を追っかける
涙捨て頑張る友の声強し
太陽のような笑顔に一目惚れ
母さんと心の痛む口喧嘩

山口市　青木隆子

一行を読んで安眠老いを知る
卒寿すぎ浦島太郎の気がわかる
子に見せた背中も今は老介護
立ち話ヒントになった別れ路

宇部市　高山清子

アルバムへ亡父の笑顔が残ってる
懐かしいアルバムを見て時忘れ
自家作の西瓜カラスが先に食べ
おしゃれして旅のプランへ痛む腰

鳥取県　橋谷静江

薬漬け夫婦漫才続きそう
道具より気力が決めたホールイン
負けません半分青い川柳路
光る朝やる気の顔がまる見えだ

鳥取市　上山一平

抱いている夢を叶える一歩から　倉吉市　堀　かずこ
古机落書きのあと懐かしい
口ずさむ歌は私の応援歌
見栄はって選んだ服は似合わない

最北の岬の風は強かった　倉吉市　宮田風露
弔辞読む友の声にも涙落つ
曾孫出来息子も祖父の顔になり
あらら うろうろうろうろして一日

巡査長万引したって漫画だね　境港市　中井虎尾
イケメンの父に似なけりゃ親不孝
若鉄じゃピンク機関車シューポッポ
老いの我ゴロネウィークテレビ番

せめてもの勤めとゴミを捨てに行く　米子市　生田和之
足腰が痛むそだねの応援歌
芹わらび蕗の薹まで貰い物
サプリより効いた引っ張り治療法

のら猫に彼の名つけて呼んでいる　米子市　川本美津子
いちりんの花を残して草毟る
ちまちまと小出しで食べる保存食
ちゃっかりと試食で済ます昼御飯

あと五分忘れ物また思い出す　米子市　黒田紀美江
衛星に全部見られるどうしよう
フワフワのお腹が今日も通せんぼ
騒いで入院　退院はひっそり

家計簿を改竄しても金が無い　島根県　原徳利
プチトマト植えて今日から園芸家
掴んだら離さない明日の尻尾
玉砂利の音爽やかに礼参り

叱られたつくり笑顔で帰宅する　松江市　相見柳歩
カッコよさ阿久悠さんの詞に習う
重圧を力に変えてジャンプする
着信があった光が差してきた

まだまだと弱音吐かない日々楽し　松江市　山根邦代
足腰をさすりながらもサロンの日
いるいらぬ分けられるなら苦労せぬ
花ばなは癒やしの蜜があふれてる

野球漬け飽きもこないでテレビ見る　出雲市　黒目ひでお
古稀の坂病が癒えて軽くなる
「鉄人」の早世悼むこいのぼり
南北が平和を求め握手する

前進のみ角だしてゆく蝸牛
コキコキと首の骨鳴り黄昏れる
霊園の宣伝もしてバス走る
中学で覚えた漢詩口遊む

岡山市　大石洋子

晩学でやっと見えだす生き上手
気にするな明日があるよと陽が沈む
インフルが終れば花粉とんでくる
恵まれた環境にいてでも独り

瀬戸内市　宮宅比佐恵

アルバムを開きスリムな時戻す
いつもとは違う道行く一人旅
夏野菜植えてようやく夏が来る
玉ねぎの側でにんにく太り気味

玉野市　片岡富子

酸欠の街に増殖するスマホ
菩提樹が包む愚かも悲しみも
暦とは歩調が合わぬ我が老躯
ジェラシーの鎖に繋ぐ愛の咎

今治市　渡邊伊津志

読み方は気に入らないがいい名の子
揺り椅子のゆうらりゆらり明日は明日
出不精を言いふらしては気まま旅
このところ修正液がよく売れる

高知市　三谷松太郎

うりずんの体感温度服まかせ
裸芸見たくないけどしかと見る
シャレた服ディスカウントで試着せず
二歳児の指さすあっち散歩連れ

沖縄県　禱モモト

同居した孫のおかげか若返り
指を折る仕草夫の老いを知り
ゲーム機が呑み込むコイン底がない
これはダメあれもダメよの治療食

沖縄県　宮すみれ

ジャスミンの香りひろげてお出むかえ
冷え性の五官の手入れ日向ぼこ
お大事に眼科先生しょぼしょぼ目
世間見た逃げたインコが巣に戻る

福岡県　本田さくら

わが道にいくつの汚点あったやら
春ですねパステルカラー街中に
「みよちゃん」の歌詞の一番わたしかな
十三日金曜でしたドジふんだ

唐津市　岩﨑實

峠越え卒寿になりて振り返る
一括でローン支払いほっとした
そこ迄は出来ぬ器量とわかりおり
数かぞえ手足動かし噛む時も

デイサービス菖蒲を噛んだ今日の幸　山鹿市　前田幸子

お節句にのぼり影なし村侘びし
年ごとに出来ない事の増してくる
カロリーは考えないで食う元気　山鹿市　柳田白沙

今でしょはじめてないの流行だよ
そこに咲く名もない花がビューティフル
雑草もきっと名前があったはず
時間かけ下手は上手に流れゆく　札幌市　斉藤宏子

新築の壁一面にクレヨン画
かろやかに靴もおどって春の風
手と手と手心あわせて作る食
廃校の桜かつての夢を見る　東京都　高岡弥生

子の便りないのは元気思い込む
ようやくの大型連休在宅し
本当に育てたように育った子
働ける幸せ思い行ってきます　（前月分）大阪市　中内孚彦

死んでからまだ愛犬が尻尾振る
手を振って女の子まだ別れない
掌見せて陛下が手を振られ
一遇のチャンス財布が空とはね　（前月分）堺市　梅木澄空

力むほどイメージ通り眉描けず
しぶしぶ散歩犬も主も高齢期
日に二食試してみたら丁度良い
集合写真いやでいつでも逃げまわる　（前月分）堺市　松永庄三

クシャミしてごめんで済ます花粉症
すぐわが家万歩に足りず一回り
お食事は薬飲むため無理に食べ
自販機は散った空き缶知らん振り　（前月分）伊丹市　延寿庵野鶴

ランドセル駆け足で来る児の歓喜
木洩れ日に光が跳ねる午後のお茶
失った時間を悔む待ち惚け
ふわり浮き雲風まかせの旅人　（前月分）加西市　山端なつみ

花言葉知らず贈った薔薇黄色
花祭り甘茶に飽きたお釈迦様
まっ白の髪にシャキンと赤を着る
紙面の名赤の他人と知り安堵　（前月分）三木市　山口久子

青年よ君らの大志どこへ行く
ひ孫9人今が青春花ざかり
夢でいい世界一周してみたい
不意の客あわててかくす箱の中

（橋谷静枝さん、田中紀美恵さん、中山好打さん高森一呑さんは44頁にあります）

橘高薫風句抄

（『橘高薫風川柳句集』平成十三年発刊）

夜の長さ　襖あけると猫がいて
妻に病まれ　壺中をのぞく　日に幾度
病妻は少女のようなくくり髪
袋ごと蜜柑食う子よ　母が病み
手にのせた文鳥の暖　母が病む
恋の景　丸木橋から鉄橋へ
正しき死　その夜荘厳　山焼かれ
横縞の雪となりたり　霊柩車
一隅と云うは安けし猫などいて
噴水と相似の緑　柳なり
雪国の桜でありし桜漬け
チエホフの卵を生みそうな眼鏡
句碑激し　浪ここに果て風ここよりす
竜飛岬　地に這う蟻も疾風の圏

婚を約し　月へ帰れぬかぐや姫
光堂　大阪地獄から来しに
梅雨荒し　許せぬもののある如く
焼ける胃と如何なし難し　想夫恋
ワンマンも胃のたかぶりを持て余す
枕抱いて　胃をかばえるか虫を聞くか
梅雨明けの雷どんと　路郎の忌
路郎の忌　白の鉄線一花でよし
路郎の忌　形見の肉池藍あせず
路郎の忌　立膝癖も師父ゆずり
路郎の忌　句を奉り香華とす
路郎忌に　松の洩れ日のなつかしさ
路郎忌に塔の影なす酒の壜
路郎の忌　天牛に来て落着きぬ
路郎の忌　睡蓮水の旅つづけ
その人を待つ　路郎忌も七回忌

追悼

上垣キヨミさんを悼む

堀　正和

句会スタート間もない頃からのメンバーである「川柳さんだ」のマドンナ上垣キヨミさんが、平成三十年三月二十二日天国へと旅立たれた。

一ヵ月の入院の後、自宅でのケアを希望されての一ヵ月、同居の子や孫に温かく見守られて逝かれました。

川柳塔誌三月号掲載の最後の句に

友の死に揺れるまだまだの自信

とあったのに残念。　（享年　七十九歳）

バブル期に、四倍近くにも人口が急増した三田市において、キヨミさんは生まれも育ちも結婚も家業も地元の「生粋の三田っ子」と言う貴重な存在でした。

温厚で、人懐こく、飾らぬ人柄と面倒見のよい性格で誰からも愛される人でした。句会へも、地元での顔の広さを活用され多くのメンバーを紹介頂きました。

会の運営についても、受付、進行からお茶お菓子の手配まで参加者を和ませる多くの心遣いをいただきました。

活躍の場も、二十二年と二十八年に年間賞を獲得された「川柳さんだ」のみならず、近隣の句会にも積極的に出かけられ、また投句でも全国規模の大会、雑誌、新聞等に参加されました。

告別の会場には、数多くのカップ、楯、表彰状が並べられ、幅広い活躍ぶりを偲ばせてくれました。

遺句十句

散骨は止めてね私泳げない

＊初入選の句

涅槃図の如きばあちゃん昼寝中

不参加の仮病見舞いに来ると言う

＊ユーモアあふれる句

揉み手してお辞儀の癖が直らない

クリームのひと匙終の母が笑む

無理するな転けるな温い子のメール

呆け防止孫のドリルで腕だめし

＊家業は多忙だが、家族は温かい

生きていて良かった人の輪が温い

＊「川柳さんだ」年間賞

昭和史もやがて化石になってゆく

＊兵庫川柳祭特選

泥棒に恥ずかしいから掃除する

＊NHK大会秀句

追悼句

ギブアンドギブあなたはそういう人でした　章子

天国からの投句が欲しいキヨミさん　祐康

ぼろくそに言われながらも愛される　忠

連絡は来ない電話の無言劇　一子

アメ一杯持って後から参ります　博

あの才が灰とは惜しい花柩　修平

貴女ようほっこりと会和ませた　健二

ひとり逝く遺影の笑顔懐かしむ　富夫

あの頃は三田小町と聞いている　花門

あの笑顔くりくりした目もう見れぬ　雅尚

白っぽく桜満開友が逝く　ゆかり

雄太郎と呼んで欲しいなもう一度　雄太郎

句集出す約束おいて元小町　好文

さよならも言わずに逝ったあの笑顔　ひとみ

後を追うようにサクラも早く散り　正和

忌明けしてキヨミあの世で恙なし　哲男

誹風柳多留一二篇研究 61

石川道子・小栗清吾
細井龍夫・伊吹和男
山田昭夫
清博美

515 **長兵衛どん毎夜おせわと早太いひ**

石川 長兵衛は、高倉宮以仁王の近侍兵衛尉長谷部信連。

源三位頼政が後白河法王の第二皇子高倉宮のもとに伺候し、平家を滅ぼし天皇位に就くことを勧め、平家追討を決意されたが、結局失敗に終った。

平家追討の令旨を願う頼政は毎夜宮の元に通い、彼の家来猪早太は高倉宮の家臣長谷部長兵衛信連に、毎夜お世話になります、とあいさつしたことであろう。

源三位まづ長兵衛をすゝめこミ　安元桜4

長兵衛との御人はらいと源三位　天八12 15

伊吹 賛。褫退治以外で早太が登場する珍しい句。

清 賛。

516 **むすめの生酔ふんとし目立也**

石川 若い娘が酔っ払ってしどけない姿でいると、着物の裾からちらちら見え隠れする腰巻き（ふんどし）が男の目を引くのである。

女生酔ふんどしをいつそ出し　安六義5

ふんどしの浅黄ハむすめひきやうなり　四35

山田 賛。緋色の湯文字だったりしたら大ごとだ。

清 賛。

517 **礼者かとのぞけばおぞう一人リ来る**

石川 年礼に来た人だとのぞくと、本人ではなくおぞう（草履取り）だけ。本人はその辺に酔い潰れているのであろう。

上下のせなかをさする礼の供　八27

上下とかいなをしよつて礼のとも　安元仁2

年礼ハどれもきうじを壱人つれ　安四桜1

清 賛。

518 **けふこそは本の紅葉と母へいひ**

石川 母親をだましては出歩いて遊びほうけているドラ息子。今日もまた言っている。今日こそは本当に紅葉狩りですから、クドクド言わず気持ち良く送り出してください。

春は花秋はもみちとうそをつき　安二松2

吉原は紅葉ふミわけ行ク所　明七仁2

おふくろくるみばかして来たともみち　三〇22

清 賛。

519 **もん〳〵のしやうじのまへを娘かけ**

石川 もんもんの障子は、いろいろな絵が描

かれている髪結床の障子である。髪結床というと町内の息子たちのたまり場でもあったようである。そんなところの前を通らざるを得ない娘は駆け抜けるのである。

安むすこ五六人居るかミゆとこ　天八10 5
ゑを書ィたしやうじハむだの会所なり　安六仁4

伊吹　賛。紋々は、紋。絵模様。

山田　賛。「髪結床」との雨譚註。

清　賛。

520　**さんせんハ父植木のハ母がやり**

石川　植木は、茅場町薬師の縁日に出る植木、植木市が有名で、夕薬師といわれて毎月八日・十二日に賑わった。親子連れで出掛け、子供が散銭（賽銭）は父親にもらい、植木代は母が与えたのであろう。

おまへもかわたしも行と夕薬師　明八松2
子供には目の毒となる夕薬師　一四八2

細井　子供が植木を買うとは考えられません。露天に並ぶ玩具とか菓子とか金魚とかがねらいでしょう。

伊吹　賛。子供でも、鬼灯や朝顔など買うと思う。

山田　賽銭と植木で夕薬師とした所が手柄。

清　賛。

521　**大さわぎ鬼ふり袖が二三人**

石川　鬼振袖は、年増芸者の異称とある。芸者をあげての座敷であろうが、年増芸者も数人入っていてドンチャン騒ぎになっているのであろう。

たてこめて鬼ふり袖を後家したて　安四信2
鬼ふり袖をあの子たの此子たの　安六智3

小栗　「鬼振袖」は、川柳での用例も少なく、はっきりしない言葉。わからず。

伊吹　小栗氏の言われるように、『日本国語大辞典』は鬼振袖を主題句から年増芸者としているが、礎稿が引用された例句に年増芸者を当てはめても、意味が通らない。不明句です。

山田　賛。鬼振袖の鬼は接頭語で、振袖には似合わない年齢の踊子ということでしょう。つまり、年増の踊子。

清　山田説か。鬼振袖は衣類の称呼ではなく、振袖＝踊子の接頭語か。さて、鬼に年増の意ありや？

山田（再説）　振袖に不似合。つまり年増です。

522　**かくすのかにくさ道にてふうを切**

石川　手紙を預かったのだが、預けるのならちょっとくらい何を書いたのか教えてくれてもよさそうなものと思うのに、ひた隠しに隠す。それならと途中で封を切ってやった、というのであろう。預けたのは男でも女でも、どちらともとれる。

隠ス程見たいとふみを追ひ廻し　明四春楽三評
女房とふミを隠シつかくされつ　明三智4
女郎のふみを留主居ハあかるく見　宝13信1

小栗　賛。他人の手紙の封を切るとは穏当でないが、そうとしか解せぬ。

清　賛。現代との感覚の違いか。人様の手紙の封を切るとはちょっと信じられない。

523　**ぬけ参リ片道虎のゐせいせ**

石川　江戸から伊勢への抜け参りの往路は安濃津藤堂家の帰国の行列の後ろについて行くと安全であり、何かの拍子に家中と間違えられると便利なこともあろう。

ぬけ参リ片タ道虎のいをかりる　安四天1

清　賛。

エッセー

貧乏神さま

出久根　達郎

麻生路郎といえば古い川柳作家だが、大升の初めごろ、古書店を経営していたらしい。

漱石が亡くなった頃で、たまたま店の奥に猫の写真額を揚げていた。愛猫の写真である。

漱石追悼の贈り物と誤解され、評判を呼んだ、と語っている。

それより少しあとのことと思われるが、大阪は戎橋に見すぼらしい古本屋があった。店の看板に、「小雨は半休、大雨来たる時は休業」と記してあった。本好きはこの店を「貧乏神」と呼んで愛していた。

やる気のない古本屋には、実際に貧乏神の木像が飾ってあったのである。古本の山の上に、神鏡と共に据えてあった。どんな風貌をし、どのような格好（かっこう）の像であったか、この店を訪ねた路郎は記していない。

見ていると、堀江の芸者がやってきて、あんころ餅を像に供え、「うちへきとうくんなはんなや」と唱えながら拝んでいった。お灯明（とうみょう）をあげてくれ、と五銭だか十銭だかを店主に置いていった、とある。

路郎が店主から聞いた話では、木像の材料は、富豪の光村なにがし邸の床柱で、懇意の大工からわけてもらった。デザインを戸張孤雁に頼み、店主が彫ったということだった。

戸張は荻原守衛と親交のあった彫刻家、版画家である。本職を措（お）いて、彫ったという古本屋はただ者と思えないが、路郎の報告では、店主の人となりに触れていない。

しかし、看板のただし書きといい、貧乏神像をまつる酔狂といい、なんとなく輪郭くらいは見える気がする。

貧乏神像は有名になり、お参り客が絶えなかったというが、肝心の古本屋は、いよいよ見すぼらしくなっていった。貧乏神の評判のためには、それで良かったわけである。

そののち、この店がどうなったかは、わからない。しかし貧乏神と古本屋の取り合わせは、なんだか似合いの気がする。一番しっくりする気がする。

私の古本屋には貧乏神像こそないが、店主自身が貧乏神の化身のようなもので、一向に商売ははやらない。賽銭をあげて拝んでくれる奇特な客もいないから、店は寂れ

る一方である。

ところが世の中には、そういう店だからひいきにする、という物好きがいることは、先の戎橋の例でご覧の通りである。

「老舗とか大店（おおだな）の古本屋は入りずらくてねえ。もっとも私の買う本は、そういう一流店には置いてない。いやあ、言ってはなんだが、お宅のような目立たぬ店が、私の好みだよ」

運転手つきのベンツで来店するAさんが、自分は貧乏神ですよ、と最初に自己紹介したのである。安物の本しか買わない、というジョークであった。

その通り、Aさんは二十年前当時、店の表の百位円均一しか買わない客であった。百円の品なら、漫画でも雑誌でも、なんでも買ってくれた。均一の棚を、来るたび、根こそぎさらっていく。どこの古本屋でも、そうだったらしい。Aさんは「貧乏神さま」で有名だった。これは蔑称ではない。古本屋にとって、実にありがたい客だったのである。だから様を付けて呼んでいたわけだ。ピカピカのベンツに、タイヤがきしむほど、大量の古本を積んで、ご満悦で帰っていく。百円の雑本と、高級車の、ちぐはぐな取り合わせが、何ともおかしい。

いつの頃からか、そのベンツが見えなくなった。Aさんの事業が失敗して、本当の「貧乏神さま」になったらしい、とうわさでなく、わかったのは、Aさんが古本屋から買い集めた百円均一の本が、古本市場にトラックで運びこまれたからだ。トラックで数台分の、膨大な量である。

量は凄いが、どうせ物は古本屋の百円均一、と思うのは、しろうとで、十年前の百円は百円でなくなっていたのだ。たとえば最もいちじるしい値上がりは、漫画であって、一冊二、三千円はざら、作者によっては二万三万円の、目をむくような値がついたのである。

雑誌も然り。「GORO」や「写真時代」が、単行本並みの値段である。

Aさんが先を見越してこれらを収集していたとは思えないが、処分して驚いたのは、古本屋よりもむしろAさんだっただろう。貧乏神の古本屋を利用したために、金持ちになったのだから。私たちがAさんに「貧乏神さま」と呼ばれる立場に逆転したわけである。

私たち古本屋の大方は貧しいが、客に貧を押しつけることはしない。むしろ豊かな富を与えているつもりである。富は必ずしも金銭を意味しない。Aさんの例は、もう一方の極端である。古本屋はホコリの中で商売しているけれど、そういう誇りを持っている——駄洒落の落ちになってしまった。貧乏神の独りごとである。

講談社刊『いつのまにやら本の虫』より転載

出久根　達郎（でくね　たつろう）

小説家・随筆家

1944年茨城県生まれ。

1973年から杉並区で古書店を営む。1992年『本のお口汚しですが』で講談社エッセイ賞を、1993年『佃島ふたり書房』で直木賞受賞。短篇集『半分こ』で芸術選奨文部科学大臣賞。

公益社団法人　文藝家協会理事長

愛染帖

新家　完司　選

（投句285名）

駄菓子屋でみんな学んだ外れクジ

（評）いつも残念賞だったクジ。「世の中はそんなに甘くはないのだよ」と教えてくれていたのだろう。おかげで忍耐強くなった。

弘前市　高瀬　霜石

相席がタイプでおちょぼ口になる

（評）女子会ならワイワイガヤガヤ、大口を開けてバックバクなのだが…。しばし花も恥じらう乙女に戻ってトキメキのひととき。

尼崎市　清水久美子

表しか見せてくれない人ばかり

（評）素っ裸で歩いている人はいないように、誰しもこころに「よそ行き」を纏っている。裏側は知らない方がいいのかもしれない。

松江市　石橋　芳山

マライア・キャリーも私も鬱病である

（評）他人の痛みは百年でも我慢できる。持病もまた同じ。だがマライアと同病だと誇らしげに言われると、何やら羨ましいような…。

豊中市　木藤こみつ

近づくと口から寄って来る金魚

（評）餌が欲しいからだろうが、「口から」しか前に進めないのではないか？　当たり前のことを改めて言われるとちょっと可笑しい。

東大阪市　北村　賢子

お地蔵さんにされて窮屈そうな石

（評）お地蔵さんなって喜んでいる石ばかりではなく、「寝転がってのんびりしていたいのに…」と思っている石もあるだろう。

枚方市　海老池　洋

夏到来電気蚊取器再稼働

（評）原発の再稼働ほど問題ではない蚊取器の再稼働。しかし、蚊取器に供給される電気は原発からのものとは、笑えない現実。

米子市　成田　雨奇

ガリ版の重さそのまま青春期

（評）人それぞれ、青春時代に繋がる物や風景がある。ガリ版であれば新聞部だったのかも。頑張っていたあの頃の自分が愛おしい。

岡山市　大石　洋子

働いただけの生涯だった父母

（評）父母の思い出は黙々と働いていた後ろ姿だけ。だが、それは子供たちが不自由なくスクスク育って欲しいと願ってのこと。

堺　市　奥　時雄

ガンで逝った友へ礼状書いている

（評）いつも良くしてくれた友。感謝の言葉は水臭いか、と思っているうちに逝ってしまった。書き尽くせない「ありがとう！」。

八尾市　村上ミツ子

日脚伸びちょっと脇道逸れてみる　神戸市　山口　光久

祖父祖母が思いを懸ける初節句　三田市　多田　雅尚

過疎の家ひときわ高く鯉幟　八尾市　山根　妙子

鯉のぼり絶滅危惧種だと思う　堺　市　内藤　憲彦

薫風に鯉が泳がぬこどもの日　神戸市　近藤　勝正

カーネーション照れくさいけど買ってくる　神戸市　上田　和宏

母の日の子の懐が気にかかる　河内長野市　木見谷孝代

無意識に母の日恩を売っていた　米子市　後藤美恵子

よろず屋の氷の旗が立って夏　堺　市　加島　由一

チューリップ枯れて紫陽花出番です　大阪市　森　廣子

コーヒーもアイスに替える衣替え　川西市　大坪　一徳

アップルのルは言わないよ　おじいちゃん　河内長野市　梶原　弘光

ヨロシクのクの字あたりに下心　青森県　松山　芳生

富士見市　中島　通則
カラオケの昭和歌謡がいいサブリ

豊中市　貝塚　正子
羞恥心酒に溶かして二、三曲

鳥取市　上山　一平
口ずさむハワイ航路をスキップで

三原市　鴨田　昭紀
アナログの定番星影のワルツ

堺　市　矢倉　五月
作曲家と渾名をもらうほど音痴

鳥取県　橋本　整
ナツメロが遠い昔を揺り起こす

河内長野市　山岡冨美子
家計簿を見ているときは哲学者

奈良市　大久保眞澄
仮想通貨老眼鏡をすり抜ける

橿原市　居谷真理子
コマーシャル不老長寿も夢じゃない

三田市　堀　正和
コラショにしようヨイショはかっこ悪いから

佐賀県　真島久美子
恋をしたオトコ上腕部が匂う

大阪市　古今堂蕉子
恋をしたオンナ瞳がでかくなる

岡山県　山縣のぶ子
コンビニが増えて独身者も増える

神戸市　細川　花門
迷ったら両方呑もう酒と酎

吹田市　木下　敏子
無理じゃない程度の無理を言ってみる

橋本市　石田　隆彦
怪しいなチヤホヤされる訳がない

枚方市　山口弘委智
川柳でばしゃばしゃばしゃと顔洗う

池田市　上山　堅坊
遊びにも一途　川柳にも一途

奈良県　長谷川崇明
聴力が落ちてのんびり句を作る

弘前市　稲見　則彦
閃きは神のくださるアドバイス

防府市　坂本　加代
さりげない一齣写す句の広さ

朝霞市　前田　洋子
没という鞭をくらっているモグラ

三田市　北野　哲男
やめられぬものに川柳酒二合

大阪市　栃尾　奏子
藤圭子聴いて泣いてるコップ酒

堺　市　村上　玄也
だから今動けるときに伸ばす羽

鳥取市　前田　楓花
死ぬ時を悟って猫は姿消す

三田市　上田ひとみ
シャンとせな守らなあかん猫が居る

池田市　太田　省三
アバウトでごめんねO型なんです

鳥取県　斉尾くにこ
百薬の長　年に四斗樽二つのむ

堺　市　坂上　淳司
大笑い五百歩分のアドレナリン

大阪市　平井美智子
名物がたこやきなんて寂しすぎ

青森市　守田　啓子
おいしいもん一杯あるよ　大阪は

鳥取県　竹信　照彦
背伸びしただけで痙攣起こす足

黒石市　北山まみどり
骨盤を先日という位置へ戻す

沖縄県　森山　文切
ゴールデンウィーク続く年金者

岡山市　永見　心咲
笑われて丈夫になった首根っこ

島根県　原　徳利
アマゾンの奥地にコインランドリー

大阪市　栃尾　奏子
都合よくシャイとハイとのアダプター

堺　市　村上　玄也
肩凝りにジャズ腰痛にフラダンス

鳥取市　前田　楓花
たましいをジャブジャブ洗うUターン

三田市　上田ひとみ
暗号のように飛び交うギャル言葉

池田市　太田　省三
絆創膏貼って失恋治療中

鳥取県　斉尾くにこ
がっかりとしているなんて見せぬ顔

堺　市　坂上　淳司
不眠症金魚の跳ねる音を聞く

天上支部が本部に変わる同窓会
ヤリだせばヤル気スイッチONになる

八尾市　高杉　千歩
まだ寒い私に夏は来ないらし

松原市　森松まつお
朝メシをしっかり食べて医者はしご

和歌山市　古久保和子
人脈へ延長コード絡ませて

奈良県　中堀　優
丸くなる年頃なのに尖りだす

山口市　青木　隆子
騙す人やさしい顔でやって来る

大阪市　江島谷勝弘
歴代の首相夫人は控えてた

河内長野市　増田　清乃
ハグしたら子供みたいに照れた義母

大阪府　米澤　俶子
化けるのにお金をかけているのです

京都市　都倉　求芽
美白美白　透明人間になるつもり

横浜市　川島　良子
スケジュール埋めて寂しさから脱皮

米子市　竹村紀の治
眠ってる金は無いかとくる電話

香芝市　大内　朝子
気がつけば祈ってばかり母の役

府中市　岸田　武
一日に一回妻に嘘をつく

松山市　郷田　みや
お湿りを拒み続ける砂時計

京都市　清水　英旺
新聞の隅でうごめく小悪党

河内長野市　森田　旅人
バラ百本もらえぬままに朽ちそうだ

桜井市　安土　理恵
命乞いまだ終活がのこってる

枚方市　佐藤　武紀
美女に見とれ何のCMだったかな

鳥取県　石谷美恵子
無理に笑うと悲しい顔になってくる

尼崎市　山田　耕治
ぶらり行き会いたかったと言えばよい

宝塚市　田中　章子
困ったな何を食べてもおいしいの

門真市　坂本　星雨
老い独り歩けるうちの墓仕舞い

鳥取市　倉益　一瑤
脳細胞雑菌ばかりふえて来た

八尾市　前田　紀雄
働き方改革しない相撲道

箕面市　中山　春代
捨てるほどあるのにもらうエコバッグ

三原市　笹重　耕三
いざという時のためです汗をかく

神戸市　奥澤洋次郎
ひや汗をかく性分のままの歳

日高市　根岸　方子
リフォームに夢のカケラをちりばめる

尼崎市　市坪　武臣
スマホ持ち僕の頭は活性化

寝屋川市　伊達　郁夫
スマホ見て呑む口実を探してる

三田市　尾崎　一子
宅配とスマホで足りる子が来ない

大阪市　津守　柳伸
スマホにはついて行けないのが独り

那覇市　前川　真
杖二つヨイショとコラショ仲がいい

富田林市　片岡智恵子
火垂の墓いくさを憂い作者逝く

河内長野市　中島　一彌
闖入し家主を値踏みしてる猫

上尾市　中村　伸子
餌よりも高いアイボの利用料

大阪市　髙杉　力
ドロナワな性格手術で治らない

岡山県　田中　恵
ひょいとした風の吹きよでみな忘れ

男鹿市　伊藤のぶよし
現実直視じょうずにできる歳になる

紀の川市　楠原　富香
ウエストのくびれ懐かしあっぱっぱ

松山市　柳田かおる
喝采もなく婆ちゃんになっていく

熊本市　杉野　羅天
いいですなあ皆お爺ちゃんお婆ちゃん

羽曳野市　中川ひろ介
廃トンネルで熟成された旨い酒

鳥取市　福西　茶子
胸キュンのラブより飲んで歌う仲

江南市　脇田　雅美
一升を八人で飲む同い年

香南市　桑名　孝雄
俺を見よ酒はこんなにすばらしい

八幡市　今井万紗子
飲み仲間同じところで躓躓く

広島市　岸本　清
ありがとう妻は酒代けちらない

大阪市　宇都満知子
酒は父譲り手先は母譲り

笠岡市　藤井　智史
晩酌は明日へ繋げる力水

松江市　中筋　弘充
逝った娘の誕生日には酒が要る

羽曳野市　吉村久仁雄
同行二人夜はゆっくり一人酒

大阪市　藤田　武人
徳利を絞るとボヤキ溢れ出す

富田林市　山野　寿之
酒よりもなお酔い覚めの美味い水

札幌市　三浦　強一
飲みに行こう部下喜んだ良き時代

藤井寺市　鈴木いさお
酒やめる覚悟はいつもすぐ棄てる

米子市　池田　美穂
飲まぬから酒税はもっと上げましょう

鳥取市　池澤　大鯰
初蕨病棟に居て夢で食う

和歌山県　森下よりこ
食パンは耳から食べる癖がある

岡山市　丹下　凱夫
うまいうまいうまいと言って食べ上手

豊中市　齋藤奈津子
体調がいい日狙って検診に

高槻市　富田　保子
異常なし結果の帰りケーキ買う

豊中市　水野　黒兎
へめへめと描いて案山子に艶が出る

加西市　金川　宣子
信念を何度曲げたか数知れず

唐津市　仁部　四郎
働いた証人として会葬者

鳥取県　門村　幸子
「ただ今」と「やれやれ」同時帽子脱ぐ

奈良市　米田　恭昌
「どや」で会い「ほな」で別れるいい仲間

土佐清水市　辻内　次根
男性の平均寿命へ数か月

長岡京市　山田　葉子
同じ夢見てた歳月それも夢

枚方市　丹後屋　肇
お隣の綺麗な庭に妬いている

河内長野市　原熊知津子
お利口な若者が増えつまらない

宝塚市　丸山　孔一
晴れてきた風が履かせるスニーカー

鳥取市　大前　安子
生返事したことさえも忘れさり

河内長野市　藤塚　克三
外人と目線が合うと先ずドキリ

米子市　中原　章子
体裁を気にする力失わぬ

枚方市　寺川　弘一
手当たり次第丸かじりした頃が華

豊中市　松尾美智代
古稀すぎて手に残る物何もない

和歌山市　磯部　義雄
いつの日か乗る車椅子押している

鳥取県　山下　節子
小銭入れ持ってローカルバスに乗る

堺　市　羽田野洋介
目印はきらきら光るものにする

箕面市　広島　巴子
誕生日墓案内の電話くる

田辺市　岡本　昇
卒寿半ば退屈しない日が続く

豊橋市　西郷紀美代
息子には介護見据えた頼み事

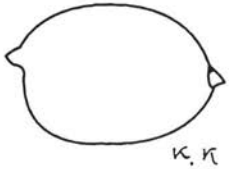
鳥取市　夏目　一粋
欲あれば寿命もきっと延びてくる

共選欄

檸檬抄

（薫風書、カットとも）

（投句　356名）



「柔らかい」　山口光久選

柔らかく咲いても強い華の芯　香芝市　大内　朝子
柔らかな調べでこころ洗ってる　大阪市　岩﨑　玲子
柔らかい握手が武器とつゆ知らず　奈良県　安福　和夫
純情をその気にさせた京ことば　横浜市　川島　良子
特注の枕へソフトランディング　尾道市　大本　和子
柔らかな言葉がのせる甘い罠　奈良市　髙橋　敬子
逢いにゆく柔らかい眉描き上げる　鳥取市　倉益　一瑤
石頭柔軟剤に漬けておく　岡山県　田中　恵
柔らかい言葉でくるみ釘を刺す　大阪市　坂　裕之
野心持つ男の言葉柔らかい　大洲市　中居　善信
柔らかな夫婦になった八十路坂　倉吉市　岡﨑美知江
どの子にも五月の風は柔らかい　堺　市　柿花　和夫
うろこはがすと柔らか頭出てきたよ　宝塚市　田中　章子
やわらかな話で酌めば壁が取れ　唐津市　坂本　蜂朗
柔らかい物腰自信のぞかせる　三田市　北野　哲男

「柔らかい」　斉尾くにこ選

思わずホッコリ主幹の語り口　奈良市　大久保眞澄
よかったなぁ浪花千栄子の大阪弁　堺　市　坂上　淳司
柔らかい声はないのか北のアナ　川西市　山口　不動
思いっきり柔らかいのだ財務省　河内長野市　村上　直樹
取り扱い注意私は熟れた桃　西予市　西田美恵子
亡き父母に羽毛布団をやれたなら　堺　市　奥　時雄
介護ロボお手柔らかに願います　奈良県　谷川　憲
フワフワのソファー立つのにひまがいる　鳥取県　山下　節子
柔らかに会釈行き交う熊野みち　寝屋川市　森　茜
風も色も柔らかだった瀬戸の旅　橋本市　石田　隆彦
柔らかい男性の手の気味悪さ　鳥取市　吉田孔美子
柔らかい口調で解雇告げられる　河内長野市　原熊知津子
柔らかさ過ぎて優柔不断です　尾道市　小畑　宣之
柔らかな座布団の上あぐらかく　鳥取市　山野すみれ
冷奴崩れた訳は言いません　寝屋川市　伊達　郁夫

こう見えて家では主骨もある　篠山市　久保木　剛
柔らかいところへ落ちたがる本音　大阪市　栃尾　奏子
山坂を越えた言葉だ柔らかい　紀の川市　楠原　富香
発想が柔らか過ぎて破天荒　神戸市　敏森　廣光
柔らかな脳が生み出す新技術　豊中市　水野　黒兎
赤ん坊のほっぺ搗き立て餅のよう　唐津市　山口　高明
柔らかになるまで湯煎する心　和歌山市　古久保和子
流動食まずいか妻は貝の口　弘前市　福士　慕情
座布団の厚みはきっと罠だろう　佐賀県　真島久美子
柔らかい口調の苦情長くなる　長岡京市　山田　葉子
柔らかな笑顔で女嘘を吐く　大阪市　原田すみ子
古稀からの感情線はやわらかに　貝塚市　吉道あかね
喜びを伝える風の柔らかさ　黒石市　北山まみどり
疑いを知らない心柔らかい　寝屋川市　籠島　恵子
柔らかな人になれよと南風　鳥取市　前田　楓花
新緑の森に抱かれて羽化しそう　河内長野市　木見谷孝代
お小言は柳に風と受け流す　広島市　岸本　清
柔らかい言葉に胡椒ふってある　和歌山市　北原　昭枝
しなやかに揺れてあなたの骨を抜く　奈良県　渡辺　富子
柔らかな包みに透ける猜疑心　大阪市　小野　雅美
できちゃった婚ほど拍手多くなる　弘前市　高瀬　霜石
取り扱い注意私は熟れた桃　西予市　西田美恵子
柔らかいものにさわった満員車　南あわじ市　萩原　狸月

忠告をミキサーにかけ呑んでます　茨木市　島田　誠一
柔らかな目に泣きごとをつい洩らす　羽曳野市　藤原　大子
搗き立ての蕨餅です召し上がれ　神戸市　細川　花門
見るからにマツコ直美は柔らかそ　京都市　清水　英旺
焼きたてのパンに幸せふわりふわ　八王子市　川名　洋子
ケーキ買い満員電車やりすごす　豊中市　江見　見清
土の道挨拶さえもやわらかい　西宮市　亀岡　哲子
柔らかに伸びた若葉に習うこと　唐津市　仁部　四郎
大空を風に任せて泳ぐ鯉　大阪市　坂　裕之
柔らかいものにさわった満員車　南あわじ市　萩原　狸月
柔らかい布団がほぐす夜勤明け　米子市　中原　章子
熱し燃えると鉄だって柔らかい　松山市　柳田かおる
前頭葉柔らかくしてジャンプする　和歌山市　武本　碧
全権委任すれば柔軟だった棘　岡山市　永見　心咲
こんにゃくも時にはギュッと硬くなる　高槻市　初代　正彦
ふの字からやわらかくおなりとささやかれ　朝霞市　前田　洋子
訣別の手紙ソフトな文字で書く　大阪市　小野　雅美
見守っている老母のソフトランディング　東京都　川本真理子
コンニャクもコンニャクなりに考える　弘前市　高瀬　霜石
柔らかな大和言葉にある歴史　三田市　北野　哲男
カーテンの少しふくらむ子の昼寝　門真市　坂本　星雨
柔らかな表情を持つ厚い胸　枚方市　藤村　亜成
膝まくら暫し檸檬の夢を見る　弘前市　福士　慕情

不機嫌なあなたへやんわりと呪文　西予市　黒田　茂代
柔らかな返事だ嘘がばれている　唐津市　仁部　四郎
やわらかな鼓動抱きしめ母になる　三田市　野口真桜子
五月晴れ右脳左脳も柔らかい　藤井寺市　太田扶美代
柔らかに出られ反論しまいこむ　横浜市　菊地　政勝
柔らかいベッドで心地よい朝寝　三田市　堀　正和
柔らかい布団がほぐす夜勤明け　米子市　中原　章子
やんわりと包んで温い国訛り　大阪市　升成　好
やわらかい風に会いたく一歩引く　西宮市　亀岡　哲子
柔らかく認知同士で認めあう　札幌市　斉藤　宏子
突かれて心へこんだままでいる　河内長野市　穂口　正子
柔らかい笑顔核心突いてくる　堺　市　矢倉　五月
温顔で周りの垣根低くする　枚方市　海老池　洋
柔らかな陽射しに老いを泳がせる　明石市　糀谷　和郎
柔らかな人ねどちらへでも転ぶ　松山市　宮尾みのり
柔らかい母が一番芯がある　枚方市　山口弘委智
失敗は生かせばいいと薫る風　堺　市　澤井　敏治
柔らかい言葉と笑みで看る介護　東大阪市　佐々木満作
どしゃぶりの後のでっかい虹の色　下松市　有海　静枝

秀　句

柔らかな眉で梃でも動かない　島根県　伊藤　寿美
ふわふわと掴みどころのない自由　大阪市　平井美智子
吐き出してしまえば風が柔らかい　米子市　竹村紀の治

柔らかい顔で寝ている棺の中　鳥取市　倉益　一瑤
ツチノコを信じる柔らかい大地　佐賀県　真島久美子
柔らかな脳が生み出す新技術　豊中市　水野　黒兎
色っぽいその唇に誘われる　豊中市　高柳　閑雲
弾き語りのリズムが柔らかくほぐす　長岡京市　山田　葉子
干されたもの残されたもの千切れ雲　青森市　守田　啓子
神神しいまでに柔和な両陛下　大阪市　津村志華子
粥啜る回峰行の僧の如　豊橋市　藤田　千休
シフォンケーキ上手に焼けた日の娘　桜井市　安土　理恵
柔らかい言葉をくれたあかんたれ　大阪市　森　廣子
マシュマロの小骨がちょいと引っ掛かる　生駒市　飛永ふりこ
輪の中にクッション一人居るだけで　富田林市　中村　惠
やわらかい視線で何も見ていない　橿原市　居谷真理子
柔らかい掌の罪なにもしてないの　京都市　都倉　求芽
柔らかい感性手付かずの個性　松山市　宮尾みのり
この地球思ったよりも柔らかい　宝塚市　丸山　孔一
柔らかな肌に理性が白旗上げる　鳥取市　谷口回春子
トゲのある茄子曲線に囲まれる　海南市　小谷　小雪
君となら濡れたい柔らかな雨だ　大阪市　高杉　力

秀　句

餅肌を独り占めしてすみません　三田市　福田　好文
ふわふわと掴みどころのない自由　大阪市　平井美智子
やがて着る土が素足に柔らかい　大阪市　升成　好

英語 de Senryu㊾

麻生路郎句集『旅　人』

英 訳　吉村　侑久代　Kim Horne

軒下の　下駄にもならぬ　桐がのび

under the eaves
paulownia is growing
not making clogs

羊羹のすこしかたいも　旧家らし

a little tough,
the sweet bean jelly
shows an old family

---

under 下で　*eaves* 家の軒　*paulownia* 桐　*grow* 育つ　*clog* 下駄　*a little* 少し
tough 固い　*sweet bean jelly* 羊羹　*show* 示す　*old family* 旧家

～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句⑲

米国で活躍するルーマニア生まれの才女　ソニア・コーマン *(Sonia Coman, Romania, USA)*

ソニアは、十代の頃からルーマニアに居ながらにして日本語を話し、俳句も作る天才少女として知られていました。現在、彼女は英語、フランス語、イタリア語、日本語、そして母国語のルーマニア語を駆使し、メトロポリタン美術館の美術編集部で仕事をするなど、美術史家、詩人として活躍しています。19 世紀後期フランスの陶器に影響を与えた日本の美的本質に関する論文で、今夏コロンビア大学から学位を取得しました。英語、ルーマニア語が併記されている彼女の初めての俳句集 *PASSAGES*『道』から彼女自身の日本語訳も付けている作品を引きます。滴の中に光る太陽のような作品です。

amphitheater/ fireflies swirl/ with no audience
　蛍飛び円形劇場に客らなし

icicles/ the wing of a gull/ brushes a star
　つらら垂れカモメの翼星に触れ

walking and thinking/ walking and crying/ red twilight
　歩いては涙を流し赤い夕

counting clouds/ counting dreams/ long flight home
　雲数え夢を数えて帰国便

「ちぐはぐ」

（投句　220名）

山口高明選

ちぐはぐな鍋と蓋でも五十年　富田林市　山野　寿之
ふぞろいのさびたくさりがすててある　青森市　守田　啓子
ちぐはぐに揺れて仲良しヤジロベー　吹田市　須磨　活恵
司会は力み候補はホラを吹く　唐津市　仁部　四郎
言い分けが下手で傷口広くする　紀の川市　楠原　富香
右左ちぐはぐ履いて孫得意　加西市　澤中　朋子
官僚の辞書に「ちぐはぐ」載ってない　宝塚市　丸山　孔一
継ぎ接ぎもパッチワークという出世　弘前市　稲見　則彦
いちにちは長くていちねんは早い　弘前市　高瀬　霜石
オスプレイ守るどころか落下物　堺　市　大和　峯二
親子ほど違う夫婦のペアルック　鳥取市　福西　茶子
いつ死んでもいい口癖によく食べる　西予市　黒田　茂代
お隣に美女と野獣が住んでいる　高槻市　原　洋志
ちぐはぐなコーディネートを見る鏡　河内長野市　梶原　弘光
好き勝手言ってにこにこ遠い耳　唐津市　坂本　蜂朗
ちぐはぐをお洒落と言ってくれる夫　宝塚市　田中　章子
いてほしい時にはいないのが夫　橿原市　居谷真理子
靴のちぐはぐは気にせぬ三歳児　高槻市　片山かずお
かみ合わぬ人ひとりいる会議室　河内長野市　森田　旅人
洋服はユニクロ　バッグはエルメス　大阪市　小野　雅美
食べたい物行きたいとこも違う妻　大阪市　江島谷勝弘
伝統を無視して古都に高いビル　大阪府　米澤　俶子
好きなのにわざとつれない素振りする　三田市　福田　好文
本心と違う言葉が飛んで出る　和歌山市　武本　碧
ちぐはぐな相槍打って蚊帳の外　神戸市　山口　光久
忖度が過ぎて答弁矛盾する　三田市　多田　雅尚
言い分のちぐはぐ妻に花持たす　大阪市　樋口　眞
南北が同床異夢のハグをする　河内長野市　渡邊　修
ちぐはぐな笑いで見舞う友といる　池田市　上山　堅坊
風呂上り父の下着がうしろ前　藤井寺市　若松　雅枝
水割りにチョコポッキーが出るお店　堺　市　矢倉　五月
じゃんけんのテンポ今一噛み合わず　岩国市　上村　夢香

佳　句

きっかけはボタンひとつの掛け違い　黒石市　北山まみどり
大福の中にイチゴというコラボ　大阪市　平井美智子
不統一知ったことかと蟻の列　男鹿市　伊藤のぶよし
ゴムなのにブリジストンという社名　三田市　村田　博
世話好きと言われお節介とも言われ　大阪市　若本　安代

人

ミサイルを打って平和の旗手となる　札幌市　小沢　淳

地

ちぐはぐに生きるスクランブル交差　大洲市　花岡　順子

天

シャンソンを歌う和装のお嬢様　大洲市　中居　善信

軸

世間では通らぬ理屈永田町

「通　知」

（投句　225名）

中村　恵　選

四季おりおり届く自然界の通知　西予市　黒田　茂代
吉報を待つ父さんは檻の虎　唐津市　山口　高明
満々の自信へ通知届かない　大洲市　花岡　順子
回覧板回すほどにはない中身　神戸市　冨永　恭子
予期もせぬ転居通知で胸騒ぎ　奈良県　安福　和夫
マイナンバー通知は来たが馴染めない　河内長野市　中島　一彌
死亡欄あって新聞止められぬ　男鹿市　伊藤のぶよし
七夕に亡父がくれた努力賞　富田林市　関　よしみ
あなたにはつくづくあきれはてました　大阪市　江島谷勝弘
手を抜けば鏡知らせる染みと皺　奈良県　長谷川崇明
招待状に黒留袖がはしゃいでる　鳥取市　岸本　孝子
スマホから指示されているスケジュール　大阪市　小野　雅美
妻からは戦力外の通知受け　三田市　九村　義徳
ケイタイで命拾った崖の下　山口市　青木　隆子
母になる知らせかレモン丸齧り　大阪府　米澤　俶子
御飯が炊き上がりましたピーピーピ　海南市　小谷　小雪
再検の通知に募りだす不安　富田林市　山野　寿之
癌告知たぶん藪医者だと思う　紀の川市　楠原　富香
通知表カバンの中で二連泊　三田市　多田　雅尚
一斉発信ひっかかりのもいるはずだ　大阪市　古今堂蕉子
着いたなら着いたぐらいは言うて来て　香芝市　大内　朝子
ダイエット合格通知するハカリ　和歌山市　土屋起世子
地下からの知らせジャガイモ発芽する　鳥取県　竹信　照彦
つばくろが夏を知らせにやってくる　大阪市　長髙　俊雄
梅雨空に夏は近いと蚊の羽音　可児市　板山まみ子
非通知の電話が神を売りにくる　和歌山市　武本　碧
花切手貼られて届く請求書　大阪市　平井美智子
春雷に別れ話が紛れ込む　和歌山市　上田　紀子
速攻の着信拒否で知る別れ　下松市　有海　静枝
告知せず家で看取って悔いはなし　西宮市　福島　弘子
国からの通知にろくなものがない　三田市　北野　哲男
保育園合否が変える設計図　日高市　根岸　方子

佳　句

合格の通知だ封筒が重い　西宮市　緒方美津子
通達は風が素早くしてくれる　紀の川市　宇野　幹子
傷痕を残したままのメール音　佐賀県　真島久美子
破棄するか残すか思案する通知　四條畷市　吉岡　修
急がねば殿がお待ちの早飛脚　大阪市　森　廣子

人

光熱費わが家のエコの通知表　高槻市　初代　正彦

地

幸不幸みんな通知で始まった　松江市　栂瀬みちを

天

空も地も何か伝えているのだが　橿原市　居谷真理子

軸

失った命の重さ知らされる

初しぐれ教室

題 ― 蟻

居谷 真理子

むつかしく面白い題ですね。思い出すのは〈労働歌蟻が歌えば凄かろう〉。平成6年から12年まで川柳塔社主幹であった橘高薫風師の句です。労働歌はあまり耳にしなくなった昨今ですが、やはり「働く蟻」「蟻の列」などの作品が多く寄せられました。また自分独自の視点で蟻の姿をとらえようとした句も多数あって感服。

川柳ワールドは自由が命です。どうぞ自由に発想を広げ、作句をお楽しみ下さい。

（原は原句　参は参考句）

原 家じまい白アリさんもお引越し　里子
「家じまい」。手持ちの辞書には載ってない言葉ですが、意味は分かります。

参 白アリが新居をさがす家じまい

原 あがいても縋るしかない蟻の列　(小)雅美

参 あがいても私の場所は蟻の列

原 草むしり蟻の一撃悲鳴上げ　隆子
「悲鳴上げ」まで言わず、読者の想像に任せましょう。

参 草むしり蟻の総攻撃に遭う

原 スイーツの新規の店を蟻に問う　真
楽しい句です。もうひとひねり。

参 蟻に問うケーキ屋さんはどこですか

原 精密に設計された蟻の塔　三樹夫

参 人間に舌を巻かせた蟻の塔

原 神様はどうして分けた僕と蟻　みちを

参 神様の仕分けで僕と蟻がいる

原 ヒトと蟻大した差ではないと神　くみ子

参 神の目にさして違わぬヒトと蟻

原 働き蟻の屍はどこに消ゆ　孚彦
屍を「しかばね」と読めば全体で十七音になりますが、「かばね」と読ませてリズムを整えました。

参 働き蟻の屍はどこへ消えるのか

原 共生を拒否してヒアリ海渡り　まさる

参 新天地求めてヒアリ海渡る

原 キリギリスの生き方蟻に教えられ　福貴子

参 キリギリスで生きよと蟻に教えられ

原 小さな蟻等身大の餌を運ぶ　武紀

参 けなげにも蟻身の丈の餌を運ぶ

原 せくせくと働く蟻に励まされ　のぞみ

参 黙々と働く蟻に励まされ

原 歩きはじめ蟻んこに指を触れ　(貝)正子
情景が目に浮かびます。優しい句です。

参 ヨチヨチの子にアリンコはお友達

原 蟻さん今日はどちらへいい日和　(見)温子
これも優しい句。思いきって童歌風にしてみました。

参 蟻さん蟻さん今日はどちらへいい日和

原 どうやって来たのアリさん五階まで　亜希子

参 アリさんが来たわ五階の我が家まで

原 働き蟻キリギリスにもなれなくて　風露

参 働きますキリギリスにはなれぬので

原 うまい物求めて長い人の列　(田)廣子

原 世の中を這いつくばって生きていく　廣光
両句とも「蟻」を詠み込まず蟻を表現しようとなさいました。意欲は素晴しいですが、やはり題から離れすぎました。

参 うまい物求めて蟻も人も列

参 世の中を蟻の目線で蟻の歩で

原 蟻の巣に蓄えている非常食　昭枝

助詞はとても大切です。いろいろ言い変えてみましょう。

参 蟻も巣に蓄えている非常食

原 偵察か蟻一匹が台所　雄大

参 偵察に蟻一匹が台所

原 家までも倒す脅威の白い蟻　美枝子

参 家だって倒せますよと白い蟻

原 パン屑を運ぶ姿の蟻は俺　俊雄

参 パン屑をせっせと運ぶ蟻は俺

原 蟻と同じ俺も日雇い労働者　優

さらに苦みとユーモアをプラス

参 蟻は正規俺は非正規労働者

原 蟻千匹なんと寂しいデモの列　和之

数字を入れて効果的な場合と、入れず想像させる方が良い場合とありますが…。

参 蟻たちのなんと寂しいデモの列

原 ひたすらな蟻の生き方みならおう　ミヨノ

参 ひたすらな蟻に習って生きている

原 行列の蟻の先頭見ていない　由紀子

参 先頭を知らずに付いていく蟻だ

原 蟻にでもきっとあるだろ怠け者　紀美代

参 蟻にでもきっといるだろ怠け者

原 もがいても落ちて上がれぬ蟻地獄　ひでお

参 もがいてももがいても今蟻地獄

原 究極のウエスト持って働く蟻　(大)洋子

愉快な句、下六がなんとも残念。

参 究極のウエスト蟻たちの誇り

原 蟻一筋流れて初夏の軒の下　光雄

「流れて」の効果でしょう、不思議な魅力のある句です。

参 蟻一筋流れて初夏の昼下がり

原 女王蟻人間一緒女子強い　(高)弥生

参 女王蟻女は強いなあどこも

原 死ぬ迄は蟻の一念よく生きる　(門)幸子

参 死ぬ迄は蟻の一念つらぬこう

原 得物あり黒山になり宴する　朋子

情景はよく分かります。やや説明過多。

参 黒山になり蟻たちのご宴会

原 温暖化蟻も感じている異変　こみつ

参 温暖化蟻も感じている不安

原 小さな声寄れば大きなパワーなす　厚子

三句とも題に遠いです。

参 蟻の声寄せて大きなパワーなす

原 僕は僕蟻の動き向いてない　(斉)宏子

参 僕は僕蟻の仲間になれません

原 大物を総出で囲む蟻の郡れ　整

人間の様子として詠んでみました。

参 バンザイで大物囲む蟻の群れ

原 蟻地獄落ちたが如く足掻く日々　勝正

参 蟻地獄落ちたが如く昨日今日

原 夕立を心配顔で走る蟻　洋一

参 夕立が来そうですねと走る蟻

【佳句】

ニュースです働くアリはすべてメス　不二夫

三割のニートが居ます蟻社会　なつみ

そのくびれ秘訣何かと蟻に問く　美穂

女王も働き蟻も蟻は蟻　開子

蟻もまた一兵卒が汗流す　一彌

蟻一匹出来得ることを真っしぐら　(大)安子

働くから糖尿病にならぬ蟻　こずえ

行儀よく蟻の挨拶軽いキス　徳利

【今月の推せん句】

ハルカスから見下ろす蟻のせわしなさ　中島　通則

一途さに邪魔したくなる蟻の列　久保木　剛

働き蟻列を離れた五月病　上山　一平

川柳塔鑑賞

同人吟　福士慕情

―6月号から

八起目で知った転びのテクニック

永田紀恵

転んでは起き上がる、そんな人生流転の中で、転び方の要領を得たとは羨ましい限りである。人生まだまだ転ぶ時がある。転倒の防止ができれば嬉しい。

はてここは外国ですか大阪城

森松まつお

観光地は今や右を向いても左を向いても外国人ばかりである。昨年、大阪城に行って驚いた。話してる言葉が意味不明の外国語ばかり、特に東南アジア系の人が多いように見受けられる。

刑事よりおまわりさんは優しそう

藤井宏造

呼び方からして違う、お巡りさんは自転車に乗って地域の防犯を見て回る。周辺の人達とも会話を交わす。「犬のおまわりさん」という歌まであるが、刑事の歌は聴いたことが無い。

味よりも高い値段で覚えてる

萩原狸月

値段を見て物事を評価する人は多い、画廊を観ても、自分的には感動も無い絵がゼロの数が多いと良い絵なのだろうと思ってしまう、言いえて妙である。

老いてゆくことを忘れていた不覚

夏目一粋

右脳左脳の衰えを感じないまま、昨日と同じ事をしているのに何かしらが違う、新聞の文字が霞みだしたり、階段の上が り降りにしても疲れ、揚句には小さな段差にも躓躓く。

ため息を春の音符にのせてみる

柳田かおる

雪が消え、草木が芽吹き、桜が咲き、春の花が咲き競う、こんな時に溜息は似合わない。小鳥たちも春を楽しんでいる。私は何をしているのだろうと気付いた作者。素敵な音色が聞こえてくる。

直角に曲って影を困らせる

田中恵

何時も何処へでも素直についてくる影、ちょっと意地悪を思いついた作者、表通りから薄暗い路地裏にでも曲がるものなら影は途方にくれてしまう。早く光の当たる場所へ出てあげる。

逃げるとき必ず後ろ振り返る

早川遡行

逃げ切るには出来るだけ距離を離しておくに限る。マラソンでも後ろから足音がすると気が気ではない。振り返りながら自分の位置を確かめる。

花吹雪隅に寄せられ愚痴話

中原比呂志

桜花爛漫咲き誇った桜もやがては散ってしまう。風に舞い地に落ちた花弁は隅へと追いやられる。もう花を愛でる人は居ない、花の嘆きが聞こえそう。

山菜も私も灰汁を抜いてから

古久保和子

春の山菜の多くは、タンサンや灰などで灰汁を抜いてから食する。灰汁を抜かないと苦かったり、辛かったり、灰汁を抜いてまろやかになりたい私。

言い争う相手いるって幸せだ

田浦　實

子らが巣立ち二人きりの生活になる。相手が居ることが普通になりたまには喧嘩もする。相手が居るからこそ言い争いもできるのである。一人暮らしは辛い。

末吉と神様までが皮肉言う

寺本　実

お神籤を引いて凶はめったに引いたことが無い。大吉を願って引くのだがこれも難しい。大吉、吉、中吉、小吉、末吉、この順列は分からないが、これから吉になるという末吉、まさに皮肉である。

少しずつ捨てる淋しくないように

平井　美智子

断捨離で一気に捨てようとするから途中で手が止まり、捨てるものに愛着があり迷ってしまう、少しずつ少しずつなら何とか捨てられそうだ。

どん底のいまを出発点とする

遠山　唯教

落ちているだけ落ちているのだから、もうこれ以上落ちることも怖いもの何も無い、此所がスタートのチャンス、あとはどん底を上るだけである

四面楚歌それでも僕は黙らない

岩佐　ダン吉

周囲がみな敵や反対者ばかりで助けてくれる人は居なくても、自分の信念を曲げることは無い。ダン吉さんの動かぬ真情が汲み取れる。

神前の誓いみごとな偽装ぶり

吉岡　修

結婚式で誓いの言葉を交わし、固めの盃を飲み干し、永久の幸せを約束したのに、あれは何であったのか。あの幸せに満ちた一瞬が偽装であったとは。

こっそりと遺影写真は撮ってある

中井　アキ

残った人達に心配を掛けさせないようにと終活を考えているのでしょうか。いざと言う時に遺影を探すのも辛いものがある。私の知っているおばあさんは、仏間の亡父の隣に掲げている。

隠してもやがてはばれる雪景色

海老池　洋

地上の汚れた物を覆い隠していた雪も陽光に溶かされて総てを曝け出してしまう。どんな隠し事も何か切っ掛けがあれば忽ち馬脚を現す。

盆栽に苛め抜かれた跡がない

内海　幸生

松等、針金で縛られ自由を奪われたかのように見えるが、姿形を美しくするための作者の愛情だったと気付く。

農薬へ虫も抵抗力をつけ

平田　実男

虫も学習するのだろうか、次々と出る農薬に虫達もじっとしてはいない。

葉桜になっても美味い花見酒

竹村　紀の治

桜は気温によって早咲きや遅咲きがある。桜祭りの会期に合わせて満開がぴったり合ってくれれば良いがそうはいかない。要は、花より団子。

戒名の呼名が長い黄泉の句座

三浦　強一

家の宗派は曹洞宗で戒名は六文字から十一文字まである。先立たれた川柳人の句座でも柳号は通用している。と思う。

結局は神が見捨ててゆくいのち

松山　芳生

神が見捨てるのか、はたまた神が必要でお召しになるのか。神仏は無いと家族は嘆くしかない。

水煙抄鑑賞

—6月号から

栃尾奏子

背後から春が生まれる音がする

廣瀬良磨

春風にどうぞと席を譲られる

坂本星雨

春夏秋冬の中で、春の句はダントツ一位で詠まれていると思う。四季の巡る国に生まれ私達はこよなく春を愛している。

天翔けるお誘いの笛柔らかい

森　廣子

内緒だが一年ごとに若返る

穂口正子

愛しいあなたが私に手を差し伸べる。その手を握ればきっと、天馬のごとく大空へ。天上はもう、二人だけの世界。そんなお誘いが、いつやって来ても良いように、年なんてとってはいられない。去年の私より、今年の私の方が美しい。花の命は自分で決めるものなのだ。

目配りの仕方は猫に教わった

池田美穂

女を動物に例えると、その喜怒哀楽全てが猫の所作になりそうだ。

言い切った男の眉は本物だ

岡崎美知江

女はすぐに別れる、死ぬ、と平気で言う。だが、男が甘くない言葉を吐く時、それは完全な終止符である。

嘘ですね胸の海月を光らせて

真島久美子

忘れましたか。エエ忘レマシタ。未練はありませんか。アリマセンヨ。……では何故、泣いているのですか。

風船がふわりいのちをもらい翔ぶ

高柳閑雲

もう一度あの日の魔法かけてみて

三谷松太郎

ふわり浮く風船を家に連れて帰ると翌日必ず風船が無い。どこにあるかと聞くと空へ帰ったと言う。しぼんだ姿を見て、悲しまぬようにとの優しい嘘であった。

宙を舞う風船は魔法。理屈など知らなくて良い。そしてあなたの言葉もあの日の風船のように私の心をときめかす魔法。

許そうか赤い涙が涸れたなら

小野雅美

なんてこと。鏡の中の私が怒りと憎しみに歪んで、見たことない不細工さだわ。ホラホラ、妬心で血の涙まで出て来た。このままじゃ彼まで失ってしまいそう。美しい私に戻るためにも、今回の件は許すしかなさそうね。

自画像の斜め後ろにいるわたし

生田和之

そうそう。自画像も似顔絵も、なりたいワタシ。こうだったらイイナ～って私。だからネ。絵描きさん、三割ほど盛って仕上げてくださらないかしら。

面接テストばあちゃんは押す太鼓判

東内美智子

曲り角幸せ神に背を押され

宮宅比佐恵

まだ入社二年目で年収も少ないって。何言ってんだい。良いご縁じゃないか。

あんな真っ直ぐな瞳の子はなかなか居ないよ。父さんが何と言ったって婆ちゃんが保証するよ。婆ちゃんの自慢のあんたが好きになった人なんだろう。

堂々と胸をはって二人で生きておいき。

91 動物たち（1）

川柳に詠われた動物の中で、私たちにいちばん身近な犬と猫つきましては、№85と№90で取り上げました。

その他の動物は「比喩」として用いられることはありましても、実物を観察して生まれた作品は稀です。それは、町の中ではなかなかお目にかかれないためでしょう。今回はそのようにペットとして飼われることの少ない動物を詠った作品を取り上げました。今月は猿と馬と牛。来月は熊と象と豚。いずれも比喩ではなく動物そのものを述べた句です。

生きるため猿もイルカも芸をする　岩崎　公誠
檻の猿も退屈そうに僕を見る　岸本　宏章
孫じゃなくしがみついたの猿だった　岡嶋　洋子
人間に似ているいやな猿の顔　上山ヒサヲ
お猿にも生命線がちゃんとある　寺川　弘一
崇りなどあるかとゴリラ樹に登る　林　瑞枝
ゴリラってみんなだいたい同じ顔　松木　秀

猿に芸をさせたり檻に入れて眺めて楽しんでいる人間たち。冷静に見詰めると何やら哀しい気分になってきます。また、その顔や動作が人間に似ているからという理由で「猿は好きになれない」という人も多いようです。

人間に最も近い「猿」ですから同じように手相があるのは当然でしょう。が、そのようなことにはまったく興味を示さず、迷信などにも無関心という猿やゴリラのほうが合理的に生きているような気がします。

いなないた馬に故郷はすでに無し　大野　風柳
鼻の差の口惜しさなんか知らぬ馬　福士　慕情
ひょいと目が合って勝たせてくれた馬　河津寅次郎
オルフェーヴルに憧れている木馬　高島　啓子
英雄の乗る馬いつも駆けている　江見　見清
木曽馬のボディー親近感を抱き　金子美千代
霜降りの馬刺しは足の遅い馬　真島久美子

競走馬として訓練されている馬にはもう故郷の草原は遠いもの。だが、鞭うたれて必死に走っていても、それが何を意味するかは理解していないであろう馬たち。

オルフェーヴルは中央競馬史上七頭目の三冠馬。その駿馬に憧れている「木馬」は本稿唯一の比喩。木曽馬に対しての親近感、馬刺しになった馬への想い、共に納得です。

闘牛の牛は何処まで本気だろう　柴田　午朗
霜降りの肉になかなかならぬ牛　利光ナヲ子
耳番号知らない牛がモウと鳴く　金子　一孝
本当は草と遊んでいたい牛　松山　芳生
牛売って牛の匂いの紙幣になる　進藤　一車
口蹄疫殺す知恵では情けない　加藤　正二
出産の近づく牛を撫でてやる　中原　正

無理に闘わされている牛。霜降りの肉になるのが運命の牛。耳に付けられたタグの意味など知らない牛。牛舎などではなく広々とした草原で遊んでいたい牛。そのような牛を売り捌いたお金は少し良心がチクチク。広範囲の伝染を恐れての殺処分は人間の身勝手さの極みですが、出産間近の牛を撫でてやる優しさはまだ残っているようです。

（投句205名）

あちらこちらで紫陽花が満開です。その切り花を頂いたりして、部屋の中でも季節を満喫しています。

暑くなったり、急に温度が下がったりで、「寒暖差疲れ」という疲労が蔓延しているそうで、思い当たる方も多いのではないでしょうか。

わが頭も、着たり脱いだり、そのように簡単に対応出来ないものかと焦ります。

では、ナビご一緒に。

青森県　松山　芳生

平成の終焉鈍痛が走る

（評）平成という時代もいよいよあと僅か。良かったことの記憶は薄れやすく、辛かった記憶は鮮明さを増すのです。

朝霞市　前田　洋子

独りです泣きたいほどに自由です

（評）独りで暮らす方が人生に対する満足度が高いとテレビで言っていましたが、泣きたいほどに、が胸に迫ります。

寝屋川市　森　茜

蜘蛛の糸すうっと下りてきてくれぬ

（評）何かあった時、なかなか助けの糸は下りてきません。試されている期間と受け取れればいいのですけど。

弘前市　稲見　則彦

わたしっていつでもカメラ目線なの

（評）これはまた自信満々ですね。でもこれくらいでなくっちゃあ、と人さまには言えるのですが。

土佐清水市　辻内　次根

人間を試せば深い深い闇

（評）人が心に抱えている闇の深さは外見で決めつけられません。だからこその哀しさでもあるのでしょう。

藤井寺市　鈴木いさお

極楽の居心地はまあこんなもの

（評）憧れた場所も暮らしてみれば、まあこんなものだろう、なんて。でも、これ否定ではなく結構満足なんですよね。

大阪市　田中ゆみ子

いい朝だ今日は私の誕生日

（評）大いなる自己肯定、いいですね。誕生日ぐらいは自分を中心に地球が回っていると思いたいですから。

札幌市　小沢　淳

セクハラに古い男が潰される

（評）古い男、だけではなく、社会全体が鈍感だったのだと思います。特に立場を悪用するヤツ、イヤですねえ。

和歌山市　古久保和子

水音がする四十五度のあたり

（評）四十五度がムズカシク、またオモシロイですね。読み手が感性をフル回転させなければなりません。

和歌山市　土屋起世子

トンネルを抜けると花が待っていた

（評）トンネルを抜けると「雪国」ではなく、「花」が待っていたとは、何となくウキウキしてくるではありませんか。

鳥取市　夏目　一粋

ほどほどの方がいいのよ記憶力　西宮市　亀岡　哲子

シンクロの美脚の花がいま開く　紀の川市　楠原　富香

年金暮しゆらりゆらりと舟を漕ぐ　高槻市　初代　正彦

お菓子まで内緒話の輪に入る　岡山市　永見　心咲

地震頻発日本国は蓮の上　米子市　八木　千代

あの日あの絵時が止まった美術館　西宮市　緒方美津子

お静かに御意見があるそうですよ　玉野市　片岡　富子

我慢には限界がきて立ち上がる　海南市　堂上　泰女

元気出せ元気出せよと花菖蒲

佐賀県　真島久美子

恋ばかりしている風が止むまでは　米子市　後藤　宏之

ときどきは揺らしご機嫌お伺い　弘前市　高瀬　霜石

飲んで泣いて起きたら新しくなった　大阪市　柴本ばっは

五感みなお休みします流れます　八尾市　山根　妙子

根強さも華やぎもある二刀流　黒石市　北山まみどり

じゅうたんが狭くてジャンプできません　羽曳野市　徳山みつこ

少しの間やさしくします後妻業　芦屋市　黒田　能子

めずらしく今日のわたしは冴えている　高槻市　片山かずお

いつまでもこうしていたい日向ぼこ　香芝市　大内　朝子

もういいよ親指姫のかくれんぼ　弘前市　福士　慕情

この池で咲いて散るなら悔いはない　大阪市　若本　安代

蓮咲いて新元号が見えてくる　松山市　栗田　忠士

片道切符ですがお乗りになりますか　鳥取県　門村　幸子

遊び心ふくらます日々大賀ハス　大阪市　笠嶋　惠美

生老病死味わう今が面白い　横浜市　菊地　政勝

花薫り少女に羽化の兆しみる　大阪市　宇都満知子

ゆるキャラが着ぐるみ脱いでひとやすみ　羽曳野市　中川ひろ介

週刊誌鮮度欠かせぬスキャンダル　大阪市　平井美智子

のほほんとフリードリンク三杯目　堺　市　澤井　敏治

誰ですか昼寝の邪魔をする人は　豊中市　木藤こみつ

うらうらと浮かれていようもうすこし　江南市　脇田　雅美

たらい舟バランス取りに一苦労　大阪市　大治　重信

琴ひけば夫と猫は逃げていく　鳥取市　山下　凱柳

ウッフッフ私は今が旬なのよ　米子市　池田　美穂

永田町見事な蓮が咲くらしい　堺　市　遠山　唯敎

優しさに迷うこころを隠せない　神戸市　山根　弘華

帳尻を合わせて今日の夢を買う　枚方市　海老池　洋

人臭さ好きで足向く繁華街　三田市　野口真桜子

飲み干したグラスに浮かぶ花言葉　宝塚市　岸田　万彩

見習いをやっと卒業初舞台　大阪市　石橋　直子

寅さんは今頃どこにいるだろう　寝屋川市　平松かすみ

分けるのに苦労している子沢山　箕面市　出口セツ子

釈迦の手の上で泣いたり笑ったり　沖縄県　森山　文切

薔薇になる夢を強制されている　和歌山市　武本　碧

善人に化ける手品を編んでいる　下松市　有海　静枝

この世から自動運転ですのあの世　沖縄県　禱　モモト

人生の学びの友は百五歳　大阪市　原田すみ子

ウオーターベッドで眠り姫になる　唐津市　坂本　蜂朗

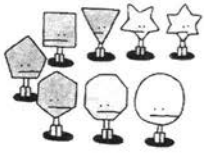
適量の酒ゆらゆらと別天地　豊中市　藤井　則彦

少子化もどこ吹く風の燕の巣　豊橋市　小松くみ子

幸せもワイングラスも割れるもの

9月号発表

(7月15日締切)



(平本　勝彦　画)

柳箋に2句

本社 六月句会

◇六月七日（木）午後一時
アウィーナ大阪

梅雨入りの翌七日、貴重な晴れの日に本社句会は一二八名（内投句者七名）の参加で開催された。初出席は神戸市の田本古鈴さん。

今月のお話は鈴木いさおさん。題は「本社句会に見るユーモア句パートⅡ」。「パートⅠ」から3年半、一万句余りの本社句会の入選句から、千句、五百句と厳選し、更に160句に絞って楽しい句を紹介してくださった。では、いさお選の中から、

消去法で選んだなんて言えないわ　朱夏
くしゃみしたとたん背骨にひび入る　楓楽
(人)高倉健の隣に埋めてほしい　義
(地)そこをなんとかそこをなんとか閻魔様　真理子
(天)三菱東京UFJ銀行　保州

喉の確かな内に「神田川」を熱唱され、完司理事長の「酒」シリーズで大いに会場を沸かせ、楽しいひとときをくださった。（眞澄）

月間賞は桝本宏子さん（京都市）

（司会―真理子・志津子）（脇取―すみ子・隆彦）
（受付―宏子・寿之）（懸垂幕墨書―耕治）
（清記―憲彦・勝弘）

席題「足」　島田誠一選

肩書がとれて軸足揺らぎ出す　松浦　英夫
靴に足合わせて生きた戦中派　柿花　和夫
じわじわと美人の方へ千鳥足　吉岡　修
デカイ足デカイ態度の声変わり　森田　旅人
二足歩行になった時から苦を背負う　山岡冨美子
家までは覚えてました千鳥足　内藤　憲彦
現場百回足が事件を締め括る　荒川　鈍甲
足かせも手かせもはずす一周忌　山本　進
足音で今日の機嫌を聞き分ける　穐山　常男
もう足も両手も出ない蝸牛　細川　花門
いつだって夢を掴んでいる足裏　平井美智子
足跡は真一文字に父の道　山野　寿之
客足の途絶えた街の招き猫　木本　朱夏
頭から足から老いは容赦なし　西出　楓楽
足出たら俺が払うと太っ腹　油谷　克己
縄文の足跡 工事遅らせる　山田　耕治
気前よく奢った金で足がつき　岸田　万彩
ときめきもサブリと思う軽い足　初代　正彦
地の神を鎮めるための四股を踏む　平尾　定昭
揚げ足は取るが責任取りません　安福　和夫
足下から根が生えている影法師　中島　一彌
足跡を辿れば父の始発点　藤田　雪菜
免許返納自前の足が情けない　米澤　俶子
愛よりも金の有る方足が向く　前田　紀雄
いつだって前を向いてる足の指　藤井　安造
優先席スマホで遊ぶ長い足　石田ひろ子
言う事を聞かぬ仲間になった足　古今堂蕉子
足が出て誉められるのは試歩の杖　矢倉　五月
タックルが大学の足もと崩す　江島谷勝弘
老い哀しタイムスリップしたい足　出口セツ子
足元が液状化してます 総理　大久保眞澄
面の皮ほど厚くならない足の裏　原田すみ子
気は若いけれども足腰が謀叛　山岡冨美子
秋天に干してやりたい足のうら　緒方美津子
主役よりイケメンだった馬の足　吉岡　修
自前の足とことん鍛え百めざす　前　たもつ
膝小僧が段差こわいと言うてはる　松原　寿子

佳

足音で勝ち負け分かる棋士の妻　川端　一歩
父ちゃんの杖になってた両の足　平松かすみ
ずかずかと土足で入る胸の傷　大内　朝子
楢山のバスに思案の老いの足　伊達　郁夫
徳俵に残る鍛えた足の指　澤井　敏治

人

迷路行く足に合わない靴履いて　森　廣子

地

踏み締めた大地はきっと温いはず　小野　雅美

天

白足袋におんなの意地が見え隠れ　酒井　紀華

軸

返納はアッシー次第 過疎の道

兼題「薄い」　加川靖鬼選

薄味に慣らされ舌が寂しがる　伏見雅明
血圧も短気も治す薄い味　平賀国和
これよりもうすく切れないハムの味　青木公輔
米朝会議 薄い氷の上にある　木藤こみつ
人間の味薄くする大都会　穐山常男
新元号とそんなに馴染めないだろう　荒川鈍甲
ご近所なのに馴染みが薄いおつき合い　松原寿子
飛び付いたあなたの胸は薄っぺら　小野雅美
皿の絵が綺麗に透けているてっさ　村上玄也
より薄くページが増えた広辞苑　宇都満知子
浅漬けのナスを肴に大ジョッキ　村上直樹
薄くて効用ユニクロに辿りつく　前たもつ
モナリザの笑み薄笑いかも知れぬ　海老池洋
麻生氏の紙より薄い倫理観　坂上淳司
羊羹の厚さ薄さは親密度　原田すみ子
幸せの薄い女を好きになる　藤村亜成
言い勝って薄い空気の中にいる　西出楓楽
ようかんはもっと厚目に切るもんよ　森松まつお
薄情なネコが機嫌をとりにくる　大久保眞澄
薄っぺらな辞令が重くのしかかる　三宅保州
美しい河豚皿の絵が透けている　小島蘭幸
病室も女でいたい薄化粧　鈴木栄子
掻き上げる髪はないのよお父さん　田本古鈴
薄皮で包んだ嘘が透けて見え　村上玄也
薄くても汗で稼いだこの賞与　村田博
朝一で薄くルージュを引く白寿　能勢利子
団体になって薄れた羞恥心　川端六点
かあさんへうす味にするおみそ汁　指宿千枝子
偲んで忍んで薄紫になりました　中岡千代美
薄くなる記憶に句読点つける　鈴木かこ
薄っぺらな舌だ秘密守れない　山本希久子
仏壇に母の好みの薄いお茶　伊達郁夫
薄い紅ひいて私は決意する　能勢良子
薄くなったな太ってるなは禁句です　古今堂蕉子
饒舌のたびに空気が薄くなる　岩佐ダン吉
僕より若いのに僕よりも薄い　鈴木いさお

佳

納棺師母へ最後の薄化粧　藤井宏造
惚けたって記憶薄れぬキノコ雲　澤井敏治
あの人が座ると薄くなる空気　木本朱夏
悲しみの記憶うすれてなつかしい　萩原狸月
うす味で旬の具材を活かす母　初代正彦

人

網膜に今も微笑む妻がいる　山本進

地

薄紅を引いて女は蝶になる　木嶋盛隆

天

だんだんと透けてきましたしゃあないか　江島谷勝弘

軸

薄味に馴れてさし水持ち歩く

兼題「ジャンプ」　岩佐ダン吉選

ジャンプして座った椅子に棘がある　福田好文
ジャンプしたつもりではまる水溜り　清水英旺
水溜り空の青さをひとつ飛び　山﨑武彦
見事やなぁジャンプであの世逝かはった　桝本宏子
ホップステップそして今ではただの人　吉村久仁雄
日に三度ジャンプをすると背がのびる　木藤こみつ
時どきにジャンプ心を立て直す　山本昌代
ジャンプなどせずとも回り道がある　江見見清
腰をかがめてセエノーで跳んでいる　大久保眞澄
背が縮み吊革へさえミニジャンプ　澤井敏治
ジャンプする助走ばかりで日が暮れる　伊達郁夫
ジャンプはやめたコッコッと壁越える　鈴木かこ
誰にでも従順なのよジャンプ傘　木本朱夏
ジャンプして掴んだ虹だ放せない　太田扶美代
ホップステップその先にある落し穴　柿花和夫
ジャンプした掌は虚空を掴んでる　藤村亜成
着地して電気が走るアキレス腱　宇都満知子
ジャンプ力試す余生の水たまり　山本希久子
ジャンプしても過去の事実は消えません　田中ゆみ子
跳べていた国の用水路にドブン　坂上淳司
ジャンプしたけれど昔の歩幅です　江見見清
ペンギンが転けたジャンプのはずだった　大久保眞澄
好奇心 古希のわたしをジャンプさす　原田すみ子
拉致家族ジャンプの年に請い願う　川端一歩

たんぽぽの綿毛ジャンプが得意です　能勢　良子
賀状にはいつも飛躍の年とあり　島田　誠一
地球から逃げる一尺ほどジャンプ　平尾　定昭
定年という絶好のジャンプ台　三宅　保州
ジャンプより腰据え皆で話そうか　松岡　篤
痩せ蛙ほどはありますジャンプ力　新家　完司
尾の取れたオタマジャクシの初ジャンプ　大内　朝子
ジャンプして掴んだものが生臭い　木本　朱夏
軽い気で飛んで飛べない水溜り　長谷川崇明
本心はジャンプもしたいカタツムリ　海老池　洋
聡太君のジャンプ棋界を塗り替える　石田　隆彦
若ぶって一間飛びで足がつる　安福　和夫
三連覇広島カープジャンプする　前田　紀雄

佳

梅雨の鬱いっきに払うジャンプ傘　山岡冨美子
思いきりジャンプ青空を掴んだ　居谷真理子
沈下橋水の中し子ジャンプする　中島　一彌
戦へのジャンプを二度とするでない　三宅　保州
煽ててもジャンプはしないダンゴ虫　森松まつお

人

願望の平和へジャンプする非核　大内　朝子

地

大仏がジャンプをしたら凄かろう　海老池　洋

天

七色の薬並べてジャンプする　榎本日の出

軸

あの時のジャンプの傷が誇らしい

兼題「もやもや」　久保田千代　選

もやもやな返事で妻にどやされる　丹後屋　肇
もやもやの気分忘れた三次会　福田　好文
激辛が梅雨のもやもや吹き飛ばす　水野　黒兎
父の日はなにかもやもやしています　松浦　英夫
来る来ない言うか言わないするしない　山田　葉子
もやもやを解く鍵も一度彼に逢う　宮崎シマ子
もやもやを斬って明日の白を待つ　長谷川崇明
もやもやを加速させます外は雨　宇都満知子
晴れ渡る空へもやもや差し上げる　指宿千枝子
はっきりと言ったら終わるおつきあい　田中ゆみ子
もやもやしてんねん眠られへんねん　森　廣子
ハルカスの眺望もやもや吹っ飛ばす　油谷　克己
幕引きはいつもトカゲの尻尾切り　中島　一彌
もやもやを盲導犬も溜めている　川端　六点
もやもやを一気に飛ばすバタフライ　飛永ふりこ
点あった無かったかもと辞書を繰る　矢倉　五月
もやもやもいっぱい吐いて娘は帰る　今井万紗子
アメフトのもやもや晴らす辞任劇　坂　裕之
国民のもやもや煽るワイドショー　宇賀　史郎
もやもやを下げたまんまで旅に出る　内田志津子
ごめんねと言えばもやもや晴れるのに　西出　楓楽
もやもやもさっぱり青い青い空　山本　昌代
もやもやの私を癒す上握り　平松かすみ
もやもやの湯気も一役美人の湯　金川　宣子
湯煙が包む男の独り言　伊達　郁夫
言い勝ってもやもや晴れる訳でなし　西出　楓楽
もやもやをすっきりさせる赤ワイン　能勢　良子
一升ビンの中へもやもや解き放つ　海老池　洋
もやもやを缶チューハイで消している　細川　花門
もやもやが晴れぬ足りぬとまた二合　村上　直樹
もやもやが海馬のあたり立ち込める　大内　朝子
浮かばない目標もやもやで終る　立蔵　信子
もやもやの胸にスカッとみつをの詩　上山　堅坊
鳩尾に刺さったままの言葉尻　鈴木　栄子
もやもや忘れるあっけらかんとした笑顔　藤村　亜成

佳

もやもやとさせて置くのも生きる知恵　太田としお
言い勝ってさてそれからの不眠症　島田　誠一
結論は玉虫色のまま終える　村上　玄也
混浴に湯気が遮る深夜二時　内田志津子
わだかまり残したままの多数決　三宅　保州

人

液状化すすむ海馬を抱えてる　澤井　敏治

地

誤作動がつづくもやもやしてる脳　木本　朱夏

天

秀作が生まれ出そうなもやもやだ　新家　完司

軸

もやもやの心へ欲のすきま風

兼題「はずす」　松原寿子選

核心をはずして妻と手を握る　伏見雅明
代表選外されてからやる気出る　丹後屋肇
消去法本物だけが残される　鈴木かこ
色めがね外すと増える温い友　関よしみ
ハメ外した夜も十二時には帰る　新家完司
はずされて補佐官肩の荷を下ろす　丹後屋肇
わたくしをほめてはるので席はずす　柴本ばっは
九条をはずして語れない戦後　藤井宏造
はずされてやっと気付いた思いやり　山本昌代
はずしたら男の闘志火が点くか　小島蘭幸
僕の人生妻を外して語れない　太田としお
核心を外し答弁政と官　水野黒兎
やる気だな覚悟が視線外さない　島田誠一
温かい心で垣根取り外し　海老池洋
縄梯子外されてから運がつき　石田ひろ子
削除キー押して指先疼き出し　長谷川崇明
よく喋る人は二次会誘わない　川端一歩
衝動買い心の鍵は外れてる　緒方美津子
発端はレギュラーはずすイジメから　江島谷勝弘
腕枕もう外してもいいですか　川端六点
非核から外れてならぬ被爆国　内藤憲彦
敢えて的外す人生選っている　小野雅美
一瞬の油断チャンスは雲の上　小山紀乃
はずしたら私の戻る席がない　山本進

一球目はずして恋のテクニック　居谷真理子
教科書からはずれされている国の罪　柿花和夫
もう今は戦力外の居候　安福和夫
どこまでもジャンプしたいな夏の空　荒川鈍甲
ブラを外すとおかわりが出来る　中岡千代美
おんなから女へ外すイヤリング　木本朱夏
アベさんをはずす以外策はなし　江島谷勝弘
飲み会に僕を外せば通夜になる　村田博
この辺でふたりっきりにさせたげる　上田ひとみ
ボタンひとつはずして薫風を胸に　江見見清
やれやれと仮面をはずすマイルーム　大内朝子
補聴器を外すと自分取り戻す　山﨑武彦

佳

片足がすぐにはずれる人の道　吉村久仁雄
油断のできる場所です仮面はずします　矢倉五月
民衆の期待はずされまた闇へ　森廣子
大賞は外す潰すで決まりだな　山﨑武彦
矢はいつも望まぬ方へ飛んでゆく　平井美智子

人

はずされて人はだんだん強くなる　榎本日の出

地

今日を終わる心の鍵をいまはずす　吉岡修

天

人間の仮面外すと生きやすい　前たもつ

軸

胸のチェーンはずし人生やり直す

兼題「起伏」　小島蘭幸選

のんびりと起伏もなくてもう白寿　榎本舞夢
起伏さえ知らずここまで無我夢中　森田旅人
幾山河越えた昭和も靄の中　荒川鈍甲
この起伏のり越えてからお茶にする　榎本日の出
人それぞれ起伏背負って長い坂　澤井敏治
足腰を鍛えてくれる丘の家　新家完司
ありがとう言いたかったな反抗期　内藤憲彦
バブルで儲け仮想通貨ですってんてん　清水久美子
足もとのでこぼこだけを見て歩く　田中章子
登り降りこの楽しみも千枚田　柴本ばっは
ソプラノで笑ってテノールで泣いて　栃尾奏子
夫婦道起伏をつくるのは男　石田隆彦
茶飲み話に漸くできる幾山河　山本進
北斎の波は男だあの起伏　柴本ばっは
ちっちゃいけど起伏に富んだ日本です　能勢良子
馬の背に似たる故山を懐かしむ　山田耕治
てっぺんの椅子に座った紙おむつ　伊達郁夫
地獄極楽見てきて今は聞き上手　吉村久仁雄
転んだり跳ねたり愛という起伏　鈴木かこ
突然に敗戦聞いた少年期　前たもつ
あの世から見れば浮き世はまっ平ら　柿花和夫
感情の起伏を埋める美術館　穐山常男
凹凸のない体型は母ゆずり　居谷真理子
いろいろあって人はまあるい星になる　柿花和夫
思春期は泣いて笑って輝いて　栃尾奏子

アンジュレーション攻略の生む名ドラマ　澤井　敏治
天国と地獄見てきた一発屋　森松まつお
こんなにも怒れる私いたんだね　山本加お里
アメリカンファースト起伏に富んでいる　前田　紀雄
ピカソでも「青の時代」があったのだ　藤井　宏造
美魔女等の胸のスロープ要注意　新家　完司
孫帰りあふれた音が消えている　原田すみ子
なんだかんだあった砂丘と海の色　立蔵　信子
やっと言えた産んでもらってありがとう　内藤　憲彦
砂丘のうねりにみすゞの詩をきく　鈴木いさお
起伏のない退屈な日がやってきた　能勢　良子
のっぺらぼう極楽なんか興味ない　村上　直樹

佳

そういえば結婚七年目だった　上田ひとみ
我儘な姉に翻弄されている　内田志津子
波瀾万丈おいしくなってきたバナナ　平井美智子
能面の裏に嵐の過ぎた跡　木本　朱夏
図書館に行く躁の日も鬱の日も　居谷真理子

人

立ち漕ぎで乗り越えてゆく夏の坂　平井美智子

地

感情の起伏 妻は女優である　上山　堅坊

天

千年の仏もあったろう起伏　**桝本　宏子**

軸

ふるさと遠し豆笛にある起伏

句会燦燦

五月句会を読む　弘津　秋の子

死ぬまでに見えたらいいな妻の顔　**山本　進**

五月の「お話」は山本進さん。進さんは難病で視力を失われ点字パソコンで作句をされている。背景を知ると味わいの深まる句である。

サラリーマン家一軒の物語　**木島　盛隆**
半世紀前の浮気が未だ弱み　**松岡　篤**

こちらはバブル時代の昭和の世相を彷彿とさせる句である。交通の不便な地の一軒家は、少子化の現在では子にも見捨てられ空き家となってゆく。浮気はイコール離婚となるご時世である。作者名不明となっても時代の句として残ってゆくだろう。

白浜も上野も同じパンダです　**細川　花門**
南と北同じ言葉で語り合う　**平賀　国和**

「同じ」であってもずれがある。微妙な感覚を捉えた二句である。パンダといえば上野動物園を連想する。同じ民族の北朝鮮と韓国も、やっとトップ同士の会談の日を迎える。

桜からさくらへ浮かれまだ此の世　**木本　朱夏**
同じ服着ても姉には華がある　**太田扶美代**
べしゃんこのこころ正した熱いお茶　**山本　昌代**
マスクとるはっきりノーと言うために　**穐山　常男**
サクラサク家が傾くまで笑う　**伊達　郁夫**
時々は生年月日邪魔になる　**西出　楓楽**

各題から心に残る句を一句ずつ記す。「題」から発想を飛ばし自分の中にどんどん取り込んでゆく。とことん向き合う。逃げない。その時、思いが読む人に伝わってゆく句が生まれるのであろうか。

晩学の根っこに熱い好奇心　**内藤　憲彦**

答えはこの句にある。

名地川柳塔

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願いいたします。
編集部

川柳塔すみよし（大阪）森松まつお報

ゴミ箱へ今日の無念を投げ入れる　(矢)五　月
次世代が地球のゴミを譲り受け　雅　美
出すゴミで暮らし向きまで丸わかり　里　子
ゴミだって夢も希望も持っている　美　籠
福島を過疎にさせてる汚染水　志津子
スターダスト夢のかけらはまだ捨てず　久仁雄
気を付けなその内わたし粗大ゴミ　ふりこ
私には大事な物も他人はゴミ　美世子
焼酎で体のゴミを掃除する　いさお
雑音にはさせぬ反対の狼煙　ゆみ子
難聴のお陰で旨い酒が飲め　行兵衛
わたしたちウワサ以上の仲なのに　勝　弘
労りが雑音となる見舞客　重　信
合唱の不協和音に乱される　満　作
家中の雑音詰めた冷蔵庫　ばっは
阪神が勝ったら勝ったで大騒ぎ　舞　蹴
雑音に耐えて掴んだ恋の道　舞　夢
雑音は気にせずアナタだけ見てる　まつお
大穴を鼻差で負けてへたり込む　ひろ介
退院日くらくらします空の青　宏　造
現実と夢の狭間でくらくらと　大　輔
一合でくらくらあとは泣き上戸　隆　昭
自由の身遥かローンの終る頃　俊　雄
判断がくらくらするともう隠居　日の出
目が眩むそんな男に出会いたい　福貴子
針金に負けるもんかと松の意地　一　歩
こわだかに話し曲げてるやぼな人　廣　子
臍曲げた妻を宥める5カラット　克　己
御神木道路を曲げて鎮座する　直　子
円満にはいと言いつつへのじ口　満知子
曲げ輪っぱおにぎり二つ玉子焼き　妙　子
へそ曲げた私に誰も近づかぬ　芳　香

はびきの市民川柳会（大阪）中川ひろ介報

欠席します自分探しの旅に出る　か　こ
蛹から蝶へ裸木から新芽　みつこ
衆生皆流転輪廻の走馬灯　壽　峰
流れには乗って気楽に日々平和　ちづる
人間の流転輪廻は神の示唆　欣　之
親が子へ子はまた孫へ継ぐ輪廻　いさお
自由でも恵まれなくて不自由に　冬のト
生々流転きのう涙できょう笑顔　久仁雄
なさけかけ恵んだ女知らんぷり　清
安住の地求め難民移動する　紀　雄
ガッチリと恵む絆の大家族　高　鶩
力強く生きてきた僕成長し　雄　太
太陽の恵みはさける白い肌　まつお
戦争で恵まれなかった少年期　専　平
世の中がどう変わろうと老い二人　登志子
恵まれぬ子達に贈るランドセル　シルク
天恵と思うわたしの物忘れ　大　子
自分史に流れ流れた白い雲　一　文
声だけは歳より若く生き生きと　千鶴子
金ないが集える友等恵方顔　洋　一
代返を頼んだ相手欠席す　フ　ジ
子宝に恵まれ今の幸せを　喜久子
恵まれた暮しの中で出す不満　奏　子
AIが企業戦士を流転する　真
ブランドに身を包みゆくランドセル　久仁子
生々流転人も巡りて雪月花　ひろ介

和歌山三幸川柳会　楠見　章子報

ハンカチで包める程のチャンスです　ひろ子
汗を掻く量でチャンスに巡り合う　義　雄
人生に敗者復活戦がある　順　一
二巡目のチャンスは鮮度落ちている　和　子
余力まだあります花を咲かせます　俶　子
今ここに居ること出来るのもチャンス　八重子
絶好のチャンスは素手で掴まえる　碧
逃げ足の早い尻尾のないチャンス　ま　き
ライバルの弱点見付け先に出る　千　鶴
チャンスには遠く鼻毛を抜いている　次　根

女ざかりの短きことよ白酒よ　理恵
見栄と欲年を取っても衰えず　一雄
多忙なり今日も梯子の医者通い　みね
恋の花咲いた女の愛しさよ　准一
ばあちゃんと連呼されてるうちが花　宏枝
花びらがポエムの香り漂わす　敏照
花燃ゆる今日という日を謳歌する　菜摘
百態のドラマの中の赤いバラ　昭枝
百七ツ生きて人生花ざかり　エイ
花だより聞いてジョギング遠回り　起世子
それからの楽しみつづく花の種　美枝子
ひとりして夜を過ごした日の不安　絹子
今日もまたひとり芝居の幕が開く　当代
ひとり居の未来図未だ描けぬまま　純子
字足らずも字余りもあるひとり言　保州
ドタキャンの穴埋めに呼ばれるひとり　知香
歩いても歩いても山遠くなる　幹子
春らんまん別の私が歩き出す　智三
意のままに宇宙を歩くホーキング　日出男
春風にバス停一つ背を押され　弘子
モンローウォークはや溝蓋にけつまずく　章子
生きている確かめている歩いてる　ダン吉
夕焼けの向こう歩いてみたくなる　明子
駅までは同じ歩調の共稼ぎ　昇
沸点はどこにあったか母の道　富香

竹原川柳会（広島）　古田　太虚報

月の夜のらくだまぶしき郁夫館　輝恵
駆けて来た君の笑顔のまぶしすぎ　幸子
恋びとがまぶしいほどによく笑う　寛
十五歳少しまぶしくなって来た　淑子
まぶしいね0歳笑いみな笑い　千代美
師の句碑を見上げる青い空がある　蘭幸
煮詰まって脳へチェンジの散歩する　弘子
マンネリが続く交替せぬ政治　昭紀
もう一人代打がほしいチェンジする　鬼焼
ゆっくりと花のトンネルギアチェンジ　夢香
チェンジなど出来ぬ夫といる私　栄香
見上げればきりがないよと住む底で　規代
安倍総理心の底が分からない　宣之
底冷えの差入れコーヒーの温さ　笑子
ダンボール抱えて底が抜けている　康弘
靴底は父の苦労の形で減り　敬子
胸底に潜む私とたたかう日　京子
素通りが出来ずつい買う物産展　歩美
満開の花行列を吸い込んで　初音
一大決心をして実家の墓じまい　厚子
つまずいた段差が教えてくれること　比呂子
鯉のぼりウチの三匹元気良く　史子
やっぱ春とかげがそとで見つかるよ　小二　陽
おほしさまおうちにあそびにきてください　二歳　ちか

川柳塔唐津（佐賀）　仁部　四郎報

手抜きした二番目何故か背が高い　蜂朗
故郷の黍焼酎が恋し夜　高明

村上玄也選

栄転も左遷も乗せる春の風　慕情
ずっと休日何でも出来て何もせず　すみ子
失恋をドラマ仕立てにして笑う　寛
看護師の言葉それぞれある個性　なぎさ
不味いもの不味いと言える歳になる　修
うしろからいつも数えている席次　隆充
お見合いに写真と違う顔が来た　かずお
ゴミの日に詰めた内緒をカラス撒く　福子
満ちてなお隣の庭が気にかかる　一瑤
頬染めて児童妊婦に席譲る　カズ子

佳句地十選（6月号から）

桝本宏子選

ずっと休日何でも出来て何もせず　すみ子
人の道教えてくれたお針箱　ひろ子
両手からこぼれる春の設計図　小雪
心から妻に感謝はもっと先　勇太朗
楽しいと書くたびペンがやわらかい　(小)雅美
病院へ一番乗りで行く元気　正美
ときどきはびっくり水のいる夫　瑠美子
おばちゃんの素顔仰天した鏡　六点
心の奥の山がなかなかこえられぬ　わこ
喋り出すまではきれいな人だった　眞澄

ベストセラーもっと読みたい老眼鏡　實
棄権せぬそれが力だ投票所　四郎

川柳塔みちのく（青森）稲見　則彦報

一服の煙が悪さして困る　ひとし
栄転の風に舞ってる花吹雪　のぶよし
男膳きょうも納豆目玉焼き　芳生
花吹雪いつもの場所に無い天守　慕情
少年の回転木馬にある迷い　則彦
花吹雪ちょっといたずら衿の中　小とみ
二馬力で稼ぐ姿を子も真似る　重虎
散ってなおドラマは続く花筏　美鈴
温泉と馬刺しで治す風邪もあり　隆樹
たてがみを前世に置いて来た私　規子
シンプルだなあ火が消えた蛍の字　劦
毒を盛る人人裁く夜の闇　一呑
ふる里に来て人間を焼き直す　黙人
プライドと一緒に散ってゆく桜　吹喜
足るを知るシンプルライフでいく余生　洋子
花吹雪三味の音色に乗って舞う　初枝
綱渡りでも一服は確保する　柳子
いっぱい働いた少しゆっくり休ませて　澄子
欲望にしがみつかずにリラックス　風来坊
描くにはシンプルな程難しい　真由美
好みが違っても馬が合う二人　英子
青空へVサインする始発駅　龍馬
忍耐を重ね守っている平和　ふさゑ
高齢者の尺度わからぬ古希迎え　花峯
労られ付和雷同を友にする　きよし
運動会昼の重箱待っている　井蛙
いい酒でありたし杯伏せるまで　霜石
冷酒がぶり理性乱れて右左　呑舟
口実は雪の様子を見に来てるだけ　和香子

川柳塔鹿野みか月（鳥取）福西　茶子報

田植えした足の血蛭が吸っていた　重忠
アンケート「いいえ」と答え突っ込まれ　ゆり子
高級車安物売り場の駐車場　綾子
へたな絵だいいえよく見てピカソです　好幸
豊作へ精根込めて田植えする　裕
恋破れピアノ連打で狂わしい　実満
田植機は唸り蛙は大合唱　茶子
藤井君出てから知った将棋界　鈴
魂を深く鎮めるピアノ聴く　小鹿
国会は矛盾だらけの嘘だらけ　照彦
観衆の拍手にピアノ有頂天　弘子
不覚にも雲にまかれたまま迷子　和子
なぜかしらピアノの音に目がウルル　草文
国民の為とか言って兵を出す　すみれ
渋滞もそれなりうれし新車だね　孔美子
いいえとは言えぬ空気が場を包む　盛桜
殴り合いなどはなさらぬピアニスト　完司
年金を抑えて介護保険上げ　京
春ですねどこかでピアノ弾いている　かおる
ドル・ユーロ一億円を壺に詰め　蟹郎
女房に首を横には振れませぬ　恒
切り捨てた筈のいいえに叩かれる　満
人生と共に歩んできたピアノ　みさ子

京都塔の会　山田　葉子報

ラーメン屋若者ずらり集め昼　篤子
手料理をずらり貴女を逃がさない　福子
チューリップずらり並んで競ってる　弘子
精鋭の顔顔顔の入社式　欣之
復興へ並んで泳ぐ鯉のぼり　牛延
アンテナを小さく立てて街に住む　昭
伸び代がまだまだあると言い聞かす　光久
米寿なのに年を忘れて又走る　ルイ子
デジタルの速度に白旗を挙げる　肇
ピンチには賢い妻が助け舟　五月
月半ばいつもピンチで火の車　益子
ピンチ来る後期高齢決定書　泰夫
よちよちと歩く姿も今のうち　弥生
花吹雪送られる人送る人　北舟
昔は胸が今はお腹が張っている　かずお
力説も手応え無しで素っ気なし　元一
手応えを信じて上げた網なのに　多津子
手応えが過ぎる返事も困りもの　宏子
窮しても王者あっさり切り返す　正彦
誘い球打つとピンチをひろげそう　葉子
ピンチには落ち込まないで空を見る　忠子

家計簿から諭吉さんが消えてゆく　英旺
墓ずらりやさしい彼岸の日を浴びて　求芽
空白がずらりと並ぶ予定表　弘之
錠剤ずらり効いているのか気休めか　文代
あの世にはずらり会いたい人ばかり　哲子
本箱に文豪ずらり居た昭和　公子
ピンチだと何時も一人で騒ぎたて　保子
座ったら立てなくなった元牡丹　美津子
うまくいった手術に医師の目が笑う　満子

川柳塔なら　大久保眞澄報

勝ち組が選んでつくるその歴史　崇明
身勝手な人を選んだ星条旗　堅坊
犬だって優先順位選んでる　すみれ
ほんまかな平和選んだ北の国　勝弘
老いてなお質より量を選ぶ癖　薫
選択肢あるから人間は迷う　俊八
総選挙だまされる人だます人　隆吉
長生きかぼっくりとるかケセラセラ　倫
満ち足りた日のこと反芻する余生　文聡
言いかけた言葉五分にし円満に　敬子
自信満々天狗の鼻を折りに行く　比呂志
子供らの満足顔が母の糧　將文
満たされた顔がなんとも締まらない　和夫
人として生まれて不満など言えぬ　良一
片隅で母はにこにこ満ちている　辰雄
満腹になって怒りの矛収め　俊雄
満点を目指して立った崖っ縁　蕉子
ルノワールの魔法肥満も美しい　眞澄
煌めきの中にうごめく悪の華　賛郎
きらきらと生きる熱気をゴーギャンに　ふりこ
きらきらと夢を咲かせるわたし流　富子
自分史の汚点償うボランティア　貫一
人生は二人歩きの一人旅　孝子
お手をどうぞラストダンスは花の香と　成子
遺稿から心残りがにじみ出る　よう子
凡人まだ悟れず五欲抱いたまま　恭昌
受けた生燃やし尽くして地に還す　のぶよし
九条の傘に住み飢餓免れる　紀雄
人生は氷の章も火の章も　百合子
人生の重さに両手しびれ出す　國治
人生の節目節目に嗤う鬼　盛隆
人生の最終章を紡いでる　優

南大阪川柳会　松岡篤報

口裏を合わせ敵とも手をつなぐ　あや子
曖昧をつなぎ楽しむ老二人　弘委智
つながれて私も犬もおとなしい　あさ子
ばらばらの姉妹をつなぐ母介護　栄子
人と人つなぐ絆は愛だろう　たもつ
風に散る花びら受けるコップ酒　ひさ乃
裏切りを受けても人を裏切らぬ　歌留多
暖かい春の光を手で受ける　直子
もう受ける学校無いとなげき節　篤
光受け窓に礼するヒヤシンス　裕子
満中除やっと妻の死受け入れる　克己
お駄賃は両手で受けた金平糖　柳伸
のる者の気持ち計らぬ体重計　益子
期待した佐川証言空回り　いさお
政治にも子にもがっかりされ通し　恭昌
まずいケーキレシピ通りのはずなのに　真佐子
花いかだ花むしろだけ観て帰る　東風
隠ぺい改ざんこの政権にがっかりだ　一歩
恋心一気に冷めた箸使い　楓楽
アリバイに下手な芝居でばれていた　修
芝居しているうちボケが板につき　実
子の自立促す芝居幕開ける　博
見舞客下手な芝居をありがとう　弘子
あと戻りさせてはならぬ回復期　なぎさ
人生の鋭角にあるミステリー　志華子
欲ばらずやること減らし生きている　峰子
大本営昔も今も嘘をつく　国和
カタカナに苛められてる高齢者　和雄
古希すぎてやっと命を愛おしむ　勝弘
ときめきの風を味方に万歩計　更紗
本棚に少年になる森がある　郁夫
散ってさえ春を運ぶか花筏　俊雄

わかあゆ川柳会（島根）　松本はるみ報

晩酌の一杯笑顔がまってます　好栄
春の陽のこの優しさにゆるむほほ　恵美子

雪の中何処へ行くやらミケの恋　かつ子
さわやかな風の中には金木犀　安子
がやがやと話し合ってる登下校　ハル子
夕暮れの窓に不安を問うてみる　はるみ
密造でない甘酒を飲みくらべ　昌

川柳茶ばしら（愛知）　**関本かつ子報**

うす味に慣れさせられてチョー元気　まみ子
柔らかい顔の時には何かある　三樹夫
薄情と言われようとも貸さぬ金　美千代
噛み合わぬ投打開幕五連敗　遡行
介護の甲斐足は不自由生き字引　雅美
ロボットの涙見られるかも知れぬ　かつ子

プラザ川柳（大阪）　**梶原　弘光報**

五月晴川辺色どる鯉の列　政夫
銀行印造るも利息二十円　克三
コンビニで銀行の用すべて済み　正子
入ったことない銀行の応接間　弘光
孫が来るこころほのぼの身が軽い　和代
夫の帰りを待ってるなんてそら昔　淳司
孫が増え財布の諭吉出番待つ　悦夫
靴磨き初出勤をそっと待つ　文子
消えた娘を待って怒りの拉致の海　一彌
疲れたら帰っておいで待ってるよ　清乃
君だけを愛していると粋なラブ　修
聞き上手相槌うまく入れている　五月

今日流す汗は明日の生きる糧　久美子

ほたる川柳同好会（大阪）**水野　黒兎報**

少子化に街から消えた火の用心　柳童
指差して消した消したと火の始末　順子
途中から口出し火種撒き散らす　正子
アンティーク火鉢はいまや金魚鉢　純子
火遊びの味を覚えて声変わり　則彦
いっそのこと割ろう未練の欠け茶碗　久子
割り切ってがやがや暮す三世代　郁子
おいしいの笑顔見たくて卵割る　美佐子
割引券レジに出したら昨日まで　奈津子
割り勘と言いたいところ場の空気　守啓
スイカ割りしてみたくなるこの暑さ　信男
上等の割箸嬉し春の膳　春代
最悪の結末が待つリボ払い　孚彦
加齢かな目をこすってもダブるロゴ　一弥
下り坂一休みして上を向く　桂子
バラにトゲ自分の花を守るため　黒兎

川柳あまがさき（兵庫）　**大浦　初音報**

転ぶなと補聴器とおる杖の声　公子
胃の調子悪くなる前よく食べる　たみえ
ギラギラの服が目印待ち合せ　柳明
連休も終りしとしと梅雨近し　初音
ワンワンとマサルロシアへ嫁に行く　(入)修平
今日も又犬に引かれて行く散歩　新録

ロンドンで値切りたいから英会話　真桜子
枯山水庭に白砂の渦が巻く　英坊
この先はちょっかい出さず身を尽くす　つな子
許すこと覚えた妻の苦が笑い　紀華
シャンシャンのはずの監査が文句言う　健二
亡母に汲む朝一番の春の水　雪菜
リラ冷えの愛はハグして温める　歌留多
帰国して我が家の水をゴクゴクリ　宏造
母の背で覚えた歌は忘れない　千賀子
スコッチの銘水割りを飲む至福　純
石清水豪雨で恐い水もある　奮水
ウォーキングみどりの五月匂う街　祐康
永年の確執水に流す時　雄次
雨音を聴いて街路樹ほっとする　靖鬼
アドバイスしてあげるから飲みに行こ　まつお
アドバイス求めた相手悪かった　ひろ介
政治家の水掛論としっぽ切り　(谷)修平
新しいレシピ覚えて日び豊か　ヨシエ
サクラサク諭吉ニコニコ出て行った　正和
板門店手を取り合える距離だった　哲夫
会葬へ聞こえる様に読む弔辞　哲男
飲みすぎやでそこそこにせなまた転ける　勝弘
素通りした事さえ惜しくなる齢　美籠
アドバイスたった一言「気にするな」　耕治
お節介ですと言われたアドバイス　かずお
昼にしてはいいおかずだなグラス出す　菊江
友の名をまずは覚える新学期　こみつ

ドーンと来いあなたの胸でよく眠る　ひとみ
伏流水湧き出るまでの長い旅　葉子

川柳同友会みらい（鳥取）吉田　陽子報

ひとり身は人の情けが身にしみる　由里
じわじわと迫る政策老いを的　安子
散る花へ返しきれない恩残る　澄子
気合い入れカイロ二つで村役目　千恵子
見るだけのチラシにもある世の動き　和代
悔しいが運も実力諦める　章子
厄介もほどほどあれば生きる張り　和之
政界に談合ちゃんと生きていた　美恵子
花金のシャッター通り寂しいな　紫音
駄目はダメ空気読めぬといわれても　葵
かいざんの漢字が書けるようになり　一眸
クックパッド昭和の味になる土筆　みどり
何事も我流一本筋通す　陽子
孤独ばかり拾う低体温の街　武志
モザイクをかけてください我が居室　華蓮
芯に当たるまでの素振りをくり返す　游子
背の高い低いは個性だと思う　公弘

川柳塔おっぱこ吟社（香川）川﨑ひかり報

当たり前のように今日も箸を持つ　初恵
お祭りが好きで掛け持ちする若さ　弘
手作りのコサージュ胸に晴れ姿　よしみ
諮り事若い意見も聞き入れる　放任
年金が生きろ生きろと背中を押す　いさむ
少しづつ修正してる遺言書　ひかり

岩美川柳会（鳥取）　山下　節子報

屁っ放り腰で東尋坊の崖のぞく　重忠
悪い遊びの方へ方へと船はゆく　一瑤
人間を間引く企業の崖っぷち　一粋
うつろな目をした孤児に貢ぎたい　天翔
セクハラに強気の官僚崖っぷち　一平
貢ぐ物無いのでせめて笑顔でも　茶子
もう少し遊びましょうよ陽は高い　美恵子
孫の守りいっつも鬼になってやる　蟹郎
崖っ渕の暮らしも笑顔絶やさない　たぬ
日々楽し土と遊んで暮らしてる　菖子
外灯さん眠っていいよ初デート　幸安
団らんは電球の下かるた取り　敏子
貢ぐだけ貢いで見たがおかげなし　清信
崖の下のぞけば明日が見えますか　雅女
お歳ですバランス悪い崖の上　振作
子に貢ぎ孫に貢いで独り住む　彰夫
戦争の崖っぷち走り生き抜いた　千代
古民家に電球寂し蜘蛛の糸　凱柳
雄鳥の性一心に貢ぐ虫　公子
躊躇する落石注意崖の下　弘六
学ぶのは好き遊ぶのはもっと好き　節子
かこつけて今日も飲んでる休肝日　照月

川柳大阪　山﨑　珠生報

自転車のルール違反が目に余る　司
みすゞの句みんなちがっていいと言う　福貴子
まちがい電話美人の声ですいません　満知子
裕ちゃんと僕はそんなに違わない　（鈴）いさお
宝物人それぞれにちがうもの　芳香
家の中役割がある父ちゃんも　美世子
違うでしょ何回言えば解るのョ　珠生
パートにも意地とプライドありますの　かよこ
働き方昔終身今パート　紀雄
歯車のパートひとつに意地がある　雅美
ミサイルを冗談ですと流すのか　志津子
いややわぁまたまたてんご言わはって　克己
欲しいなら買ってあげようハルカスも　まつお
節穴がいっぱいですが佳い年輪　和
千年杉己の長寿自慢せず　一歩
努力した日々年輪が実り出す　美籠

川柳塔わかやま吟社　小谷　小雪報

先着順だったら負けたことがない　保州
貧乏を上手に潜り抜けたこと　克子
発芽するもやしのように生きている　知香
七人の男手玉にとった過去　紀久子
国のため貢献してる愛煙家　日出男
借りものはなるべく早く返します　小雪
美人妻ペットのように連れ歩く　冨美子
定年後ペットのように付いてくる　よしこ
物言わぬ瞳がすべて語ってる　ほのか

毛穴から深呼吸して若返る　まさみ
夢二描く女に抱かせたいチワワ　徑子
ピカドンに毛穴爛れた少女の死　愿
伸びゆく芽踏み台外すタイミング　紀子
踏み台で羽ばたく子等の無事祈り　秀子
前向きになろう踏み台などいらぬ　寿子

川柳ささやま（兵庫）　**北澤　稠民報**

ゆっくりと歩いて楽し季の変化　かほる
別々の花を咲かせていい夫婦　哲男
この先に何があるのか坂のぼる　稠民
誇り高き男が愛する野のすみれ　眞由
笑うのよ心が笑い朝が来る　さゆ子
八十路来て日焼け気にせず草を引く　幸子
ふるさとは音楽界の締めの曲　善輔
生まれ来て人生の旅進行中　照代
自分なりほこりを持って老い歩む　美智子
欲も無し日々の暮しを丁寧に　喜弘
子が田植歪んでいても黙っとこ　剛

川柳塔さかい（大阪）　**内藤　憲彦報**

確約はしないぽつぽつそんな歳　好
雨上がり竿のしずくがリズムよく　妙子
語り部がぽつぽつ繋ぐ命の輪　志津子
アンニュイな午後慰める雨の音　敏治
ぽつぽつでもフルマラソンはゴールまで　(綾)清
風五月桜ぽつぽつ北の国　和夫
ぽつぽつの雨がチャンスになるふたり　朝子
諭吉離れ居心地のいい財布買う　舞夢
浮いていると自覚　群から距離を置く　蕉子
足音と影は生涯離れない　五月
離れていても息子の声は聞きわける　満知子
どん尻からもどんどん離れ必死です　みつこ
古稀過ぎりゃ離れ離れの寝床です　光雄
古里では浦島太郎になっている　憲
諸行無常いずれ離れて遠くなる　唯教
しぶしぶでもいいから核を捨てなさい　愿
撫でられて妻に尻尾を振る夫　雅明
しがらみにしぶしぶ押した保証印　俶子
謝罪会見社長にあわすおじぎ草　誠一
同伴にしぶしぶ夫連れて行く　世紀子
せがまれて免許取立ての助手席　八千代
ドラフト外で採った選手がレギュラーに　としお
しぶしぶの見合いで祝う五十年　ひろ子
手を振って友と離れた汽車の窓　かりん
米英が先ずは我が身と輪を離れ　堅坊
十年も合わない友だ噛み合わぬ　さくら
傍に居るとうるさい離れると淋し　ゆみ子
蟹せせるテーブルマナーから離れ　みつ江
好みが無いと宝石売場すぐ離れ　澄空
離れても握っていたい赤い糸　富夫
自分史にやがて別離の章が来る　扶美代
人は人耐えた努力がチャンス呼ぶ　憲彦
引っ越しのたびにあの世が近くなる　進
平手打ち溜めた思いが父の目に　雅美
披露宴高い祝儀に千鳥足　時雄

あかつき川柳会（大阪）　**山本　昌代報**

夜叉になる覚悟の爪をといでいる　シマ子
貧乏神いちばん古いお友達　一歩
爪先立ち痛むだろうな拉致家族　信二
午前中のシメに新聞読んでいる　信子
なにかある妻が晩酌進めだす　浩子
酒よ酒酒に溺れて悔いはなし　清
爪研いで研いで夫待つ午前二時　壽峰
古い人間だ無器用に生きている　(松)秀夫
足用の爪切りあるが届かない　和雄
顔の傷猫にかかれたことにする　栄子
青春が詰まった古い同人誌　克己
逮捕されほっとしている脱走者　敏子
新聞を隅まで読んで時事吟ず　(櫻)秀夫
血の変事阪神支局忘れまい　鮎子
核廃絶目を皿にするトップ記事　紀雄
安倍総理努力足りんぞ拉致事件　ばっは
安部さんに期待出来ない拉致家族　一文
むつかしい古文はまるで外国語　喜代志
古書店の出合うわたしの青春譜　ひろ子
祝い酒口のチャックがゆるみがち　哲男
AI時代温故知新が然と生き　たもつ
晩酌は命の元に成る泉　善之
セクハラが罪が無いとは時代過誤　福貴子

言わずもがな育児に介護丸い爪　満知子
朝刊のニュースがっかりする目覚め　紀乃
鬼瓦酒を飲んだらえべっさん　朝子
よくやったこれでまたもや栄転か　万作
地球から離脱しなさい星条旗　堅坊
古希過ぎて同窓会が盛り上がる　ひろ介
朝刊のまずスーパーのチラシから　直子
阪神が勝っては飲んで負けて飲み　篤
黒電話何の不便もない暮らし　穏夫
ご記憶は戻ってきたがあの程度　ダン吉
朝めしは天声人語聞きながら　いさお
新聞が国に順じてから悲劇　鈍甲

翠洋会（大阪）　大久保眞澄報

後ろ髪引かれて決心が揺らぐ　満作
決めた事その時だけは守ってる　敬子
決断が苦手煮えきらない男　良子
決心がつかぬ断捨離山となり　千枝子
さっぱりと親子も決める車間距離　日の出
決めたのは鉛筆私ではないわ　眞澄
贅沢に慣れた子供の不仕合せ　恭昌
飽食の日本に来るぞ食飢饉　善之
飢餓の国片や食物捨てる国　蕉子
贅沢をすればするほど虚が深む　ふりこ
平均寿命過ぎ贅沢に生きてます　昭
東大出の嫁さんもろてまだ不足　桃花
清貧を求め生きたが遺産なし　げんえい
真っ白いご飯を毎日食べている　義
ボディーはSせめてハートはLにする　大子
薬指リングのサイズスッポヌケ　紀子
年金のサイズで余生ふくらます　弘子
家事分担決めてますます妻が飛ぶ　すみ子
春風にこころ癒やしてもろてます　舞夢
ただ今ペットが飛んで来てくれる　楓楽
言い過ぎを悔いる言葉がうずを巻く　富子
迎えにきた傘と一緒に飲み直す　希久子

川柳さんだ（兵庫）　田中章子報

貧しいが悔いないなんて負け惜しみ　哲男
不注意を後悔してる松葉杖　修平
忖度をいっぱいしたがヒラのまま　正和
チャンスの女神がおいでおいでをしてたのに　千代美
便り待つ母に笑顔をみせぬまま　えい子
大切に生きる後悔しないよう　ヨシエ
目標は元気なうちに行く冥土　加代子
お姫さま抱っこされたいからやせる　ひとみ
天辺を目指す男にぶれがない　好文
性別の分からぬ程に生きてやる　宣子
最後まで自分の足で歩くこと　和世
終活をやめて婚活しています　花門
今日は今日明日は明日考える　義徳
検討をしてみましょうと妻が言う　健二
ビットコイン策めぐらせて知能犯　行兵衛
考えてますありがとうよりいい言葉　つな子
考えを中断させているクシャミ　美籠
川柳をロダンのポーズで考える　雄太郎
胎内でデザインされた容姿です　美智子
梅雨の入り下絵の君が艶を出す　哲夫
平凡と言うデザインも私流　千津子
芸術品飲むのが惜しいラテアート　宏造
太陽の塔再ブレークだ爆発だ　厚子
処世術時には使う男泣き　紀恵
手術終え迎える夫の目に涙　一子
受け取った辞表のインク滲んでる　博
三兄弟兄が泣いたらみな泣いた　祐康
過疎の村ドロボー入り活気付く　廣子
ITの今も魚屋蠅たたき　野薫
紫陽花の緑に恋をした蛙　周三
表情で安心を見る娘の家族　迪
欲捨てて肩の荷軽くなりました　順子
愛してる言えぬ夫のありがとう　優子
一葉もルーペで見たら諭吉さん　雅尚
コツコツと歩んだ足を撫でてやる　恭子

富柳会（大阪）　関よしみ報

春暑し並ぶ埴輪の眼は虚ろ　伸雄
フラスコの中に沈めたのは炎　田鶴子
母の木が揺れて古さを振り落とす　澄子
縄文の土器に原始の息遣い　壽峰
一粒の種が大地に根を落す　清
つぼみから葉桜までを駆けぬける　隆充

一粒の涙が落ちて咲いた花　常男
弱音吐く母がシャキッと嫁の前　武人
鍵穴まで塞いで独り切りの夜　あかり
モノクロの記憶父と母の匂い　かこ
汗の粒飛ばして若さ走り抜け　恵
千年の古都を紐解く刻は贅　寿之
躑躅満開今幸せに包まれる　アキ
一輪は孤独貫き通す芯　よしみ
米粒の愛へ通ってくる雀　欣之
じっくりと見つめ直している絆　森子

川柳花の輪（大阪）　**岡本薫報**

メロン切り一気に皆が集中す　笑子
春の陽にうたたねの母細い肩　風
メロン一個九人に分けるママの腕　みちる
薄すぎて倒れるほどに切るメロン　正太郎
仏壇にメロン供えて熟れるまで　昭好
細いけど母の元気に安堵する　泰子
おお男以外と細い文字を書き　薫
細腕で家庭切り盛り強い母　信子
大赤字メロンが救う夕張市　勇太朗
定年後妻の細腕頼もしく　敬子
細い身よりほど良い方が魅力ある　あや乃

長柳会（大阪）　**辻村ヒロ報**

喜んで先頭譲る母の背な　ヒロ
丸い背を引きずり歩く老いの気力　弘美
清流に蛍ふんわり露天風呂　洋二
清潔感出してコックの白帽子　登美子
本棚のヘソクリ無いが聞けもせず　福子
苦労人メガネの奥の涼しい眼　敬二
思い出が断捨離の手を止めさせる　隆彦
老夫婦対座黙念茶を喫す　純風
せっかちな血の一滴は親ゆずり　和子
残り香に惚れたあの日の洗い髪　正博
銀行の人手が余るキャッシュレス　孝代
銀行に縁ない我が家火の車　隆明
銀行に預金も無いが借りも無い　英美
定年後加算忘れた預金帳　淳司
ゼロ金利左うちわの夢くだき　ふみ
父の口癖金ならあるぞ銀行に　ともこ
定期預金殖えた昭和が懐かしい　幸子
銀行も妻も増やしてくれぬ金　正美
貸金庫中にへそくりラブレター　由夏
まだともうせめぎ合ってる誕生日　旅人
俺を待つエンマはずっと待ち呆け　直樹
俺の句はまだか残りは天地人　孝
惜しまれる年はとっくに遠くなり　光弘
極楽が満杯ならば待つつもり　一男

川柳塔まつえ吟社（島根）**相見柳歩報**

伸びてからあわてん坊になる鋏　とも子
間伸びした時間に花を育ててる　知恵子
育毛剤使って伸びぬ薄毛見る　輝山
伸びてきた生命線がジャンプする　久絵
髪と爪計ったように伸びている　禮子
森が消えそのあと自販機が並ぶ　桂子
木は森へ不正文書は国会へ　瑞人
ゴキブリの動きは若い時の俺　芳山
老いてなお気づかうことは人の道　あきら
カッコいいジュリーと僕は同い年　みちを
すてきだね何をやっても若いよね　朋子
ピクルスで脱水キュウリ若くなる　哲子
若者に負けてならぬと鍬にぎる　静枝
若い木に育てたあとは風まかせ　邦代
泣けるだけ泣いて一本の道になる　寿代
産道を通って泣いたのは昨日　徳利
それぞれに道を極める難しさ　豊仙
デコボコの道を忘れぬ足の裏　雪代
道端の花も五月の顔で咲く　ひふみ
村道を走りカーナビ黙らせる　弘充
帰り道ブルーライトに癒される　青帆
アスファルト太古が眠る道の下　柳歩
二十四色並べて迷う雨の色　美智子
選ばれるつもりもないが選ばれず　草庵

六甲川柳会（兵庫）　**奥澤洋次郎報**

とりあえず健康ですとメールする　としお
断捨離のかけ声ばかり沙羅の花　美津子
長生きも歯がゆい思い痛み出し　芳江
満塁が度度あって無得点　洋次郎

夢一つ明日にむかって咲かせよう　弘華
抑止力唱えあっては核保有　正彦
結婚の約束果す苦難の日　礼子
非核化を進めて子等に明日がある　洋一
三才児との約束は破れない　千代
明日もまた今日と同じと念じてる　和宏
明日はまた違うところが痛くなる　道子
独身の自由に生きて病む孤独　狸月
馬耳東風歯がゆさつのる親心　憲三
好きな子に好きと言えずに恋終る　利子
笑う日が来ると信じてする介護　美恵子
精一杯　今を生きてる母白寿　武彦
歯がゆいが居ないと困る夫です　光久
泣き笑い越えた分だけ友ができ　弘
無重力指輪外したあの日から　盛夫
約束の期限が重く迫り来る　浩司
ほどほどのストレスバネにして生きる　千賀子
男だよ二言はないと胸を張る　ひとみ
相合傘なのに歯がゆい距離でいる　常男

八尾市民川柳会（大阪）　中薗　清報

アメリカンファースト世界咬みまくる　紀雄
雲つかむ話になった酒五合　盛隆
無添加の安心を買う人の列　壽峰
孫達が笑いをもって喜寿祝う　一文
大都会揉まれ揉まれて抜けた灰汁　高鶯
人間の隙間をのぞく好奇心　あかり
二十五時日付変らずいる都会　幹和
突然の訃報に狂う感情線　常男
咬みしめて味わう一言の情け　森子
傷ついた都会を癒す里の風　寿之
行く末へ噛んで含めておく躾　欣之

倉吉川柳会（鳥取）　竹信　照彦報

百五歳とても明るい家族葬　完司
やっと明るくなった南北和解　康子
今の世で明るい老後望めるか　紀美恵
選者さん明るい人が楽しいな　玲子
明るさに七難隠す得な人　雄大
投句した新聞捲る朝一番　日出子
日捲りを捲って今日も無事無難　石花菜
札束をめくることない暮らしぶり　けいこ
スカート捲りまるでセクハラしてる風　龍枝
ダイエットしている日捲りカレンダー　風露
朝刊を真っ先捲るお悔やみ欄　酔芙蓉
選者受け句箋を捲る手が滑る　茂夫
鉄鍋の蝗が蓋を蹴ってたな　萩江
戦時中屋外授業蝗捕り　智恵子
蝗軍団と奮戦してる猫　重忠
風呂の火で蝗焼いてた食べていた　妻子
バッタなら食えぬ蝗が酒のアテ　野蒜
全財産すっかり使いあの世行く　由紀子
大臣の嘘がすっかり国に染み　次男
すっかりと詐欺を見透かし逆脅し　恭子
記憶なしすっかり慣れた国会語　祐子
拉致帰し核もすっかり無くするか　照彦

西宮北口川柳会（兵庫）　藤井　宏造報

戦へと続く橋なら渡らない　千代
ジンを酌み異国に溶けるジャズピアノ　野鶴
心までスイングさせるジャズライブ　盛夫
ジャズが好きちょっとお高くみえるかな　敦子
ジャズ葬で希望通りに友送る　宏造
月並みと言う川柳を脱したい　正彦
折りにふれ尋ねてくれる子がみたり　光子
草花もとりどり天に主張する　いわゑ
メール一通母の日はさらりと過ぎた　恭子
曲がり角なにか期待をしてしまう　わこ
恩返し母には出来ずボランティア　みよし
雨ですね靴もわたしも休ませる　哲子
流れ雲ひょっこり母の顔になる　紀華
ランドセルあのねだからがいっぱいで　ひとみ
お日様は一人一つの影画く　弘委智
平凡な一日でした眼鏡拭く　千賀子
月並みなお礼を言って出す賄賂　武臣
ユーモア句誰も笑ってくれなんだ　正和
記念日は月並みですがありがとう　武彦
花嫁の父月並みなことしか言えず　章子
ネクタイを少し緩めてジャズに酔う　靖夫
人は人だから何にも言えません　迪
言ったでしょ貴方見たのは上辺だけ　新録

空缶にコツコツためている小銭　輝彦
兄だからガマンと僕はいつも損　健彦
歳時記とトリスを持って緑陰へ　野薫
転げるなよ月並みだけど身に沁みる　秋果
なんべんも言うたやろしゃりでるなと　勝弘
だから言ったと古い話を蒸し返す　浩司
こいのぼり空に飽きたか川の上　弘子
化粧品コマーシャルには美女ばかり　伯備
月並みな訓示大阪弁が味にする　和宏
生きている僕も雀も水を飲む　美津子

ふうもん吟社（鳥取）　両川　無限報

診察の前に腰痛軽くなる　善平
待ち望んだ春も花粉でうとましい　真理子
二刀流ゴルフ川柳やってます　金祥
落ち込んだ気分を晒す日向ぼこ　俊久
神仏にしっかり頼み不合格　鐘軌
半分は義理で離れぬ影法師　毅
男女同権男も泣いていいですか　雅女
重い荷を背負う可愛い千羽鶴　妻子
月末に小銭集めて切り抜ける　志激
小銭から札へ駄賃の値が上がり　茶人
噂通り小銭をためて億の家　栄子
小銭ため買ったジャンボが大当たり　清信
年金暮らし小銭も札も命綱　房江
小銭しか無いが笑って暮らしてる　敦子
手の平に載せた小銭で決める飯　美津子

小銭という言葉は俺の辞書にない　凱柳
フワフワのソファー立つのにひまがいる　節子
フワフワと今日する事がない無職　義徳
ふわふわと戯れるわが銀の髪　一平
羽根つけてフワフワ飛んで天国へ　勲章
フワフワの羽毛布団は落ち着かぬ　幸子
七色の恋フワフワとしゃぼん玉　みゆき
たんぽぽの綿毛本音が掴めない　八千代
フワフワの海月は鯛に食べられる　蟹郎
心配の種がフワフワ飛んでくる　一粋
フワフワの黒髪あった写真見る　振作
人権を無視する言葉死語とする　大
亭主関白今では死語の代名詞　回春子
詐欺泥棒死語になる日よ早く来い　昌鼓
死語いくつ消してきたのか広辞苑　一瑤
恋も愛も永遠に死語にはならぬ　楓花
いつの世も死語にならない母の愛　天翔
何もかも捨ててふわふわしたくなる　無限

川柳藤井寺（大阪）　太田扶美代報

めがねしてまだ要りますの虫メガネ　喜代子
努力賞あげたい人が側にいる　一歩
世の中を染めてはならぬ色めがね　キーキー
だんだんとややこしくなる記憶力　シルク
ハズキルーペ妻は夫のアラ探す　久仁雄
三歳児のおもちゃになった虫めがね　勝弘
平仮名で書くと他人になる夫　瑠美子

気が弱いだからヤクザはサングラス　清
ちはやぶる百人一首題材に　真
コンタクトの記憶世間汚れている　よしみ
ひらがなは日本文化の真髄だ　一文
真がみえるめがねをどうぞ麻生殿　みつこ
女子会の噂話は色めがね　光男
お力を借りたし諭吉コレクション　六点
シリアの子力になれず沈む日日　彦弘
百均の眼鏡で句会通ってる　紀雄
メガネ拭く心の窓を拭くように　信二
愛の力金の力に勝るかも　育代
妻の目がめがねの奥で光ってる　いさお
まだ友はかしこで終わる文くれる　フジ子
平仮名の熱き恋文読み解けず　絹子
癌なんか笑い飛ばしてやる気力　扶美代

川柳塔打吹（鳥取）　斉尾くにこ報

鼻唄を歌って今日もルンルンだ　芙美子
風呂焚きで歌った時に我に酔い　恭子
五月晴れ鳥も若葉も唄い出す　泰山
せっかちでゆとりないから怪我しがち　玲坊
ゆとり持ちやさしく妻の愚痴を聞く　紀美恵
この次はクルージングだ婆さんや　節子
薫風をたっぷり昼寝でもしよう　宣子
失敗をしても故郷が待っている　芳光
時間にゆとりあって遅れた事がある　龍枝
今日句会明日からヨーロッパ旅行　石花菜

吸い物にトンガラシ混ぜうふふのふ　重忠
端切れ布混ぜて思わぬマイバック　貴恵
差出口人の話をまぜ返す　妻子
流行に混ぜて着ている古い服　悦子
震度六脳の中まで混ぜ返す　滋
先ずビール酒に焼酎紹興酒　紀の治
パソコンの中で世界が混ざりあう　三津子
マニキュアで変身してる指楽し　久芽代
顔だけでたりず爪まで化粧する　清
昨日まで瓜と爪とが逆だった　野蒜
爪を研ぐつもりはないが爪を切る　大鯰
穏やかに爪を隠して聞き流す　美知江
私の敵はわたくし爪を切る　美ッ千
つぶやきと吐息を混ぜてゆらぐ空　くにこ

大山滝句座（鳥取）　新家　完司報

病みあがり鈍い動作で間をかせぐ　大鯰
何事も丸で生きたと言う楕円　宣子
大胆になれる限度はセミヌード　楓花
湯上りの赤ん坊には敵わない　紀の治
大胆なパフォーマンスで切り抜ける　博子
勲章で飾った服は遊園地　熊四郎
蕾から徐々に開いて熟女なり　七七
キツネの子木の葉かかえて両替機　モナカ
ワイルドライフ帰国困難地域　くにこ
自慢するものがないので借りてくる　芳光
太っ腹に付けが後から追ってくる　雄大
大胆になった貝柱になった　正人
年金が増せば嬉しい旅をする　風露
増えてゆくふりがなのいる子供の名　けいこ
孫自慢嫌いな嫁が産んだのに　由紀子
思案する切り取り線の前に来て　美ッ千
へそくりが増えて使い道がない　石花菜
戦争も勤勉なのが日本人　野蒜
迫真の似顔デフォルメ効いている　幸子
大胆と緻密備えた御仁なり　昭子
正確なアンダースローで飛ぶツバメ　富隆
二度見するCT画像に増す不安　博文
拉致問題安倍氏どうする待つだけか　正男
太陽と潮風泳ぐ聞き鰺　道唱
大胆に皆ヌードになるお風呂　久子
寝ていてもどんどん増える国赤字　清明
珍客に俺が自慢のトロロ汁　重忠
桜さく追っかけ梨もてんてこだ　希楽良
いつ死ぬか解らないのに生きている　完司

岸和田川柳会（大阪）　石田ひろ子報

粋がってアンチの立場とりたがる　英夫
アンチプレー選手と乖離尻尾切り　笑司
主役よりアンチヒーロー目立ってる　珠子
国に命捧げた叔父の部屋の窓　一子
右側の窓を覗けば戦車見え　洋二
窓際でじっと我慢の元上司　忠太
わかってる背中しっかり見てるから　律雄
傷痕の残さぬ医師に辿り着く　信二
胎動にきっちり母を自覚する　みつ江
きっちりと組まなくてよいフルムーン　宗博
きっちりと反論を浴び磨かれる　ダン吉
きっちりとしすぎてスキのないおかた　秀夫
部屋の中片づけてからおちつかぬ　昭愿
激昂にも戸はきっちりと閉めて去る
とかくしんどいきっちり過ぎる人といて　玲子
きっちりと生きて親への恩返し　多喜子
きっちりと蓋をしたもう愚痴らない　康信
終活ともしもに備え遺言書　和美
もしやもしあれこれ悩み髪が抜け　邦彦
島抜けは夜の潮時知っている　三成
勝ってたらハワイあたりに日本基地　隆昭
もしかして落としたものはプライバシー　ふさゑ
暖簾分け秘伝のタレを餞別に　喜代志
お互いの以心伝心電話来る　カズ子
母送りタンスに残る几帳面　規予子
好奇心わたしのアンチエージング　ひろ子

川柳ねやがわ（大阪）　籠島　恵子報

泣きにいく穴場は母と決めている　朝子
ストレスが音になってる台所　洋
あなたへの思いへペンを走らせる　賢子
はやぶさ2りゅうぐう迄はあと僅か　博
表より裏の目的あぶり出す　武彦
淀競馬穴場へ女性ダッシュする　祥昭
家計簿が胸撫でおろす子のパート　肇

逃げ場ない男を許す雨上がり　仁
我が思い解ってくれと北の空　秀雄
つり糸は誰にも穴場教えない　寿子
故郷の老母へ感謝のカーネーション　壽峰
パートから生き甲斐目指しフルタイム　髙鷲
届くなり田舎自慢をする荷物　博泉
悪政も声届かねば変るまい　鈍甲
飛行機の部品がないという怪奇　銀杏
会えるかなあの人乗るバス9時2分　亜成
主亡くても見事な赤いアマリリス　尚世
無い筈の記録あとから顔を出す　高志
紋白蝶かもそろそろ羽化が始まった　茜
生きていて現況届しています　ルイ子
人生はパートでないよフルタイム　弘一
パートしてお辞儀が出来る娘に育つ　郁夫
大粒へ目が手が延びる苺狩　弘委智
内定が届いたようだ響く声　麗
バーゲンの品でも嬉し母ほろり　あさ子
中途半端なところで腰をすえている　恵子

城北川柳会（大阪）　近藤　正報

煩悩の消えない喜寿は始発駅　博
深緑一陣の風老い払う　捷二
過去は消し今の自分で勝負する　杈香
ふる里恋し時どき駅の風を聴く　たもつ
じゃじゃ馬の渾名も消えてお母さん　北舟
駅裏で今夜も盛ん猫の恋　実
青春切符カメラ駅弁五合瓶　直樹
瑞瑞しい野菜に会える道の駅　朝子
朝の駅立食いソバに戦士たち　俊雄
ステークス感住む駅前のワンルーム　肇
駅ホーム母が手渡すゆで玉子　千恵子
相談が怖い娘の里帰り　あさ子
老いてなお太い絆の酒の友　和
詫びながらカーネーションを母の忌に　星雨
相談を親身に聴ける母の耳　志華子
また一人住所録から友が消え　洋志
しつこくていい不様にこの世生き延びる　賢子
相談があったら救われた命　満作
この列車乗れば翌朝ふるさとに　縣祚
記憶ないと言った言葉はもう消えぬ　寛昭
猫の恋しつこく鳴いて成就する　榮子
好奇心満たす何かをさがす駅　弘委智
消え去らぬ想い出胸に575　高志
知らぬ間に消えた故郷の田植うた　和夫
押し売りのしつこさに勝つうちの妻　義昭
言い足りぬことが背中に書いてある　郁夫
生きるんだ弱気を消して前を向く　武彦
恥を知る人が消えてる永田町　堅坊
老々の介護へ向かう始発駅　満洲夫
金平糖聞き耳たてている内証　ばっは
チャンス来ぬ種火に灰をかけたまま　勝弘
信用はたった一度のミスで消え　正

豊中もくせい川柳会（大阪）初代　正彦報

サラダ鉢のグリーン混ぜる箸涼し　公子
老々介護時に浮き出る深い皺　肇
深いシミ余白の中に落としとく　求芽
横槍の鋭い刃先一理あり　黒兎
父親も家族団らん混ぜてくれ　健三
子の天才いつの頃まで思ったか　多美子
深みだが足が着くから大丈夫　武彦
五線紙をはみ出し早い夏が来る　きらり
戦争の語り部刻む深い皺　歌留多
スクープが深層心理暴き出す　野鶴
聞きなさい埴輪の口が言いたげだ　(永)玲子
効率の悪い仕事は覇気を欠く　久子
スマホ漬け親の苦言も効き目なし　満子
満月に横槍入れる黒い雲　宏子
横槍が欠席ですわ会和む　(岩)玲子
プチ家出今日はどこまで行こうかな　見清
ヘルパーさん迎える掃除しています　葉子
新駅に用もないのに降りてみる　千鶴子
深読みをし過ぎて急所見失う　則彦
筍を茹でると夏が笑いだす　郁夫
老春の夢追い過ぎて深い淵　正彦
混ぜ方に納豆通がこ煩い　勝弘
効いてきましたかと鏡笑ってる　耕治
横槍を宝のように使う人　堅坊
何人でもはいれる穴を掘る総理　眞澄
虚実混ぜ今日の私を醸し出す　雅美
まだ生きる余白を埋めているパズル　美智代
口元にいつも効かせるありがとう　美佐子

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔打吹	14日(土) 13時30分締切 髪・荒れる・のんびり・席題	倉吉市上灘町9　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637－3　牧野芳光 方 川柳塔打吹　事務局
川柳ねやがわ	15日(日)　13時締切 席題・不運・成り行き・大人 自由吟	寝屋川市　産業会館 〒572-0063 寝屋川市春日町9－9　高田博泉
川柳藤井寺	15日(日) 14時締切 首・ナンバー・席題共選	藤井寺市生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5－8－20－303　鈴木いさお
豊中もくせい川柳会	16日(月) 13時50分締切 天使・払う・きっかけ 自由吟	豊中市立中央公民館　3F 阪急宝塚線「曽根」駅　徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5－26　初代正彦
川柳さんだ	17日(火) 13時30分締切 財布・尖る・ブーム・見逃す 自由吟	キッピーモール（JR三田駅前） 〒669-1545 三田市狭間が丘5－10－19　谷　祐康
川柳たちばな	18日(水) 13時45分締切 印象吟・休(互選)・飲む 自由吟	立花公民館(尼崎市塚口町3-39-7)℡06-6422-6741 〒661-0953 尼崎市東園田町3－49－5　藤井宏造 ℡06-6494-5187
岸和田川柳会	21日(土) 14時締切 覚悟・踏む・まさか・アピール	岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄「岸和田」駅東へ5分 〒596-0076 岸和田市野田町2－13－19　中岡香代
川柳塔みちのく	21日(土) 17時締切 人相・だからって・深い	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」℡0172-36-6614 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛　℡0172-36-8605
川柳ふうもん吟社	22日(日) 13時30分締切 自由吟・一人占め・ズカズカ 心急く	開発ビル　2F（鳥取市片原1－107） 〒689-0202 鳥取市美萩野2－171－3　中村金祥
はびきの市民川柳会	22日(日) 14時締切 企・火傷・ムード	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車　北東へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8　徳山みつこ
南大阪川柳会	23日(月) 18時30分締切 ドタバタ・やわい・信じる・意味	大阪市立住まい情報センター　5F　研修室 地下鉄谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳塔すみよし	28日(土) 14時15分締切 悪夢・ギリギリ・切る	住吉区民ホール 〒580-0026 松原市天美我堂3－130－2－404 森松まつお
和歌山三幸川柳会	28日(土) 13時15分締切 そして・通う・絆	和歌山商工会議所　4階　第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
京都塔の会	30日(月) 14時締切 アピール・闇・わくわく・席題	京都ハートピア　地下鉄「丸太町」駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勧修寺堂田70－16 桝本宏子　℡ 075-591-0424

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6779-3490）へご連絡ください。

7月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　ら	5日(木) 14時締切 汗・バイキン・診察	奈良市立中部公民館　4F 近鉄「奈良」駅④番出口　徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787　松本方　安土理恵
城　北 川柳会	7日(土) 14時締切 光る・さばさば・弾む・自由吟	旭区老人福祉センター　3F 地下鉄谷町線「千林大宮」駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14　江島谷勝弘
川　柳 とんだばやし 富柳会	7日(土) 14時締切 港・ある日・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4－1－10 池　森子　TEL・FAX 0721-25-0603
倉　吉 川柳会	7日(土) 14時締切 ちょっぴり・厳か・野・席題	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072－17 谷口次男
川柳塔 ま つ え 吟　社	7日(土) 13時30分締切 暇・握る・どきどき・根	松江雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222－1　相見柳歩
八尾市民 川柳会	8日(日) 14時締切 台風・よたよた・笑う・雑詠	八尾市渋川町・安中町集会所 JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2－1－7　土田欣之
川柳塔 わかやま 吟　社	8日(日) 14時10分締切 兼　題＝はてな・僅か・鈍 課題吟＝建具	和歌山商工会議所　TEL 073－422－1111 兼　題　〒649-6253 岩出市紀泉台366　藤原ほのか 課題吟　〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 桒原道夫
西宮北口 川柳会	9日(月) 14時締切 波・疑う・べたべた・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにしのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602　梅澤盛夫
ほたる 川　柳 同好会	10日(火) 13時30分締切 船・混ぜる・もちもち	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール蛍池　蛍池駅前ビル　5F 〒561-0813 豊中市小曽根2－4－1　水野黒兎
川柳塔 さ か い	10日(火) 14時締切 ビール・別れる・折り句：サカイ	東洋ビルディング　4F 堺東駅北西改札口から2分 〒599-8103 堺市東区菩提町5－171　矢倉五月
川　柳 あまがさき	10日(火) 14時締切 薄い・客・うっかり・自由吟	尼崎市女性センター・トレビエ 〒661-0953 尼崎市東園田町3－49－5　藤井宏造 TEL 06-6494-5187
あかつき 川柳会	13日(金) 14時締切 膨らむ・桃・動機・時事吟	大阪保育運動センター（新谷町第1ビル2F） 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2－312　前田紀雄
川柳大阪	14日(土) 14時締切 無駄・ファイト・古い	地下鉄・長堀鶴見緑地線　京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6　山崎珠生
六　甲 川柳会	14日(土) 14時締切 半分・爪・座る・自由吟	六甲道勤労市民センター　5F　E室 JR「六甲道」駅南隣　メイン六甲内 〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4－11－11　上田和宏

柳界展望

★「第17回宿場町やかげ川柳大会」は5月12日開催。同人成績。

天　位　新家　完司
もやもやと頭はんぶん
ほど煙

天　位　小島　蘭幸
モンローの吐息はやがて歌になる

★「井笠川柳会　第19回笠岡大会」が5月26日、笠岡市保健センターで開催。同人成績。

第3位　岡山県知事賞
平井美智子

第4位
岡山県議会議長賞
倉益　一瑤

第5位　岡山県教育長賞
小島　蘭幸

第6位
笠岡市議会議長賞
新家　完司

第8位
笠岡文化連盟会長賞
有海　静枝

第9位　山陽新聞社賞
工藤千代子
小島　蘭幸

天　位
兄の草笛夕焼けになっている

▽表　彰△

○栗田忠士さん（同人・松山市）。愛媛県教育委員会から、児童生徒への川柳の普及活動で表彰された。

▽動　向△

○「弓削川柳社」4月10日付、会長に光延憲司氏が就任。

▽出　版△

○島ひかる句集『生きてゆく力となった山がある』。

○栗田忠士句集『追いかけていたのはただの風だった』。

いずれも、新葉館「川柳作家ベストコレクション」B6判P95。定価1200円+税。

▽訂正とお詫び△

○6月号P98、「句会燦燦」13行目。ホーキンス→ホーキング。

▽新誌友紹介△

奈良市　森中ヒサ子
京田辺市　北野　國男
和歌山市　南方冨美代
紹介者　木本　朱夏
阿南市　小畑　定弘
富士見市　中島　道則
紹介者　中島　一彌
岡山市　坂上　淳司
田中　政宏
紹介者　藤井　智史

常任理事会6月7日
①二賞選考委員補充及び各地柳壇選者交代について②誌友拡大取り組みについて③95周年記念事業基金募集について④主幹・理事長改選年について⑤定例確認事項

次回常任理事会7月6日（火）AM10時～

第7回「ふるさと」川柳募集

課　題　「力」（一口2句・12人による共選）
選　者　渡辺　松風・興津　幸代・米山明日歌
中山　恵子・吉崎　柳歩・赤松ますみ・
石橋　芳山・梅崎流青　他
締　切　**7月31日**（消印有効）
投句料　1000円（切手不可）
★添付の誌上大会投句用紙他　便箋等使用・2句を1枚の用紙に記入
賞　最優秀賞　1点（樺細工色紙掛・仙北市産品）他
発　表　柳誌「湖」10月末発行
投句先・問合せ
〒014－0602 秋田県仙北市ひのきない字長戸呂85
浅利亥一郎方
第7回「ふるさと」川柳事務局　宛
電話　0187－48－2236
主　催　**川柳「湖」（うみ）**

第65回　八尾市民川柳大会

と　き　**8月5日（日）**　正午開場
（昼食は済ませてお越しください）
ところ　八尾文化会館5F レセプションホール（プリズムホール）（近鉄八尾駅下車徒歩5分　西武デパート東隣）
かいひ　2000円　（作品集・鉢植え花）
宿題と選者　各題2句　提出・席題なし
「広」　木嶋　盛隆　選
「平」　鈴木　かこ　選
「酒」　赤松ますみ　選
「白」　木本　朱夏　選
「土」　大西　泰世　選
「山」　森中恵美子　選
「海」　土田　欣之　選
出句締切　**午後　1時**
懇親宴　4000円（希望者のみ当日受付）
お問合せ　土田　欣之（電話072－992－4943）
主　催　**八尾市民川柳会**

第69回　西日本川柳大会

と　き　**10月8日（日）** 9時～16時
ところ　岡山県久米郡久米南町下弓削
久米南町文化センター
第1部　兼題(投句)**7月15日(土)　必着**
「　宴　」　大家　風太　選
「　糸　」　大森　昭恵　選
「黙　る」　野島　　全　選
投句料　1000円
投句先　〒709－3614
岡山県久米郡久米南町下弓削446－2
弓削川柳社宛（電話　086－728－3540）
応募封筒表に「西日本川柳大会」と朱書のこと
第2部（当日）各題2句・特別席題1句
欠席投句拝辞
兼　題（大会当日11時締切）
「飽きる」　岡田　　篤　選
「たっぷり」　森山　盛桜　選
「情　け」　村上　氷筆　選
「怪しい」　新家　完司　選
特別席題（当日発表）　長谷川紫光　選
参加費　2000円
主　催　**弓削川柳社**

第49回　奈良新聞川柳大会

日　時　**7月22日（日）　10時開場**
会　場　奈良県文化会館　小ホール
TEL　0742－23－8921
宿　題　「ニュース川柳」大西　将文　選
「ま　さ　か」　居谷真理子　選
「酔　　う」　大楠　紀子　選
「ゆ　ら　り」　松本　柾子　選
「　闇　　」　藤原　一志　選
「メロディー」　阪本　高士　選
「叫　　ぶ」　山田　順啓　選
「追　　う」　田中　新一　選
各　題　**2句　出句締切　11時30分**
会　費　3000円（昼食・発表誌呈）
出席申込み　**7月10日まで**　下記へ
〒630－8686　奈良市法華寺町2－4
奈良新聞社文化事業部「川柳大会事務局」係
TEL　0742－32－2115
FAX　0742－32－2774
欠席投句　1000円(切手拝辞)同封下記へ
〒630－8325　奈良市西木辻122－1－801
吉冨ひろし　宛
締　切　**7月10日**（当日消印有効）
主　催　**奈良新聞社**

「川柳雑誌」「川柳塔」通巻一〇〇〇号記念出版

『麻生路郎読本』

A5版
514頁
頒価　三〇〇〇円
（郵送料共）

目次
麻生路郎アルバム
麻生路郎作品「旅人」「旅人その後の作品」
麻生路郎文集・麻生路郎語録
麻生路郎物語（東野大八）
麻生路郎の人と作品
麻生葭乃作品「福寿草」
麻生路郎著作解題・麻生路郎年譜
麻生路郎・葭乃作品索引

ご希望の方は左記の事務所までお申し込みください。
〒543－0052　大阪市天王寺区大道1丁目14番17号
花野ビル201号
電話　06－6779－3490
川柳塔社
振替　〇〇九八〇－四－二九八四七九番

川柳塔WEB句会　兼題「落ち着く」

＊平抜きと佳作は到着順
＊webサイトと内容に齟齬がある場合、webサイトが正

5月例会入選句　投句数347句（175名）　青砥たかこ　石橋　芳山　共選

青砥たかこ　選

ワンコそば落ち着いてなどいられない　荘子　隆
落ちつきがちょっと出てきた傘寿前　のひろ
定位置にどっかり腰がおさまった　柳谷　益弘
夜桜や妻のうなじに落ち着かず　氷川の杜
電話待ち　鼓膜が落ち着きをなくす　汐海　岬
落ち着いた顔でカラスはごみの中　絹田　あさ
もの忘れ増えて落ち着く夫婦仲　富田　保子
退職後混濁未だ落ち着かず　上平　祥
落ち着いて同意する旨タップする　さとち
吹き溜まり　ここで芽を出すことにする　川本真理子
落ち着いて見ればなんでもない仕掛け　沢田　正司
転がらぬ石です苔が生えました　ホッと射て
美食家も〆の茶漬けで胃を洗う　前川　真
心臓の爆音閉じ込めるコルク　葵
落ち着いて風向きを読む出世凧　白鳥　象堂
落着のお白洲に舞う花吹雪　光畑　勝弘
下り坂すぎて落ち着くふくらはぎ　田村ひろ子
やんちゃして落ち着く先は妻の膝　内田志津子
落ち着きをなくした負けたなと悟る　西口いわゑ
そわそわもドキドキも消す深呼吸　高浜　広川
落ち着いて選んでいれば別のひと　石川　柳寿
鮒釣りの腕時計から針の音　斎藤　秀雄
落ち着きは西方浄土見てるよう　中内　孚彦
もう誰も喧嘩は売らぬ棺の中　勢藤　潤
煩悩をもぐらたたきで落ち着かす　藤井　智史
新緑に落ち着きが出るランドセル　安西　建次
結局は生まれ故郷の酒を酌む　村田　博
不味いけどなぜか落ち着くレストラン　船岡　五郎
仮面一枚脱いでお茶漬け食べて居る　森　廣子
とにかくも落ち着くために淹れるお茶　澁谷さくら
病状が落ち着き直ぐに欲しい酒　伊藤　良一
披露宴で挨拶終えた主賓席　門田　吉雄
佳　落ち着かせたいので弱火からトロ火　橋倉久美子
佳　祭囃子落ち着いてなどいられない　大島ともこ
佳　いつもの席でいつもの人と飲んでいる　平井美智子
佳　落ち着こう今ジョーカーが手の中に　西口いわゑ
佳　落ち着くね復讐なんか思うとき　柴田比呂志
人　落ち着くと面白くない人になる　城崎　れい
地　落ち着いているが時々不整脈　大木　雅彦
天　落ち着いて詐欺師を諭すおばあちゃん　松岡　篤

石橋　芳山　選

横たわる円周率のど真ん中　なお
定位置にどっかり腰がおさまった　柳谷　益弘
吹き溜まり　ここで芽を出すことにする　川本真理子
転がらぬ石です苔が生えました　ホッと射て
大仏の尻のほくろに諸説あり　西沢　葉火
ウインクも流し目もない家で飲む　安藤　なみ
シャガールの馬がなんだか肥えてきた　米山明日歌
流されて妙に落ち着く橋の下　板垣　孝志
スポンジが落ち着くまでの三日間　たごまる子
恋破れまた図書館の奥の席　居谷真理子
落ち着かせたいので弱火からトロ火　橋倉久美子
残り香を着て過去も抱きしめている　荒牧　千晴
削除押し消してゆくただ消えてゆく　荒牧　千晴
深呼吸わたしはひとりきりじゃない　尾崎　良仁
冷静に見るとそうでもない美人　すずき善作
メビウスの輪を走る川内優輝　山田こいし
行く先は昔ながらの喫茶店　フーマー
父親のような顔したブルドック　上原　稔
姿見に落ち着く場所がない比丘尼　福村まこと
高鳴りがゆっくり沈む「ぐりとぐら」　大内せつ子
鮒釣りの腕時計から針の音　斎藤　秀雄
落ち着きも限度があろう「ナマケモノ」　塚越　孝一
待っていた雨へ農夫は手を伸ばす　野平光太郎
ウォシュレットたばこ一服いい気分　若　芽
駆けつけ三杯ほど飲みましたので　雨森　茂喜
先着の後方左はしの席　徳重美恵子
仮面一枚脱いでお茶漬け食べて居る　森　廣子
猥雑な言葉が消える無菌室　森山　盛桜
ぼんやりとペンダコといる24時　久保　卓子
欠けていたピースようやくはまった絵　澁谷さくら
鼻高いランチのあとのソーダ水　稲垣　康江
胡坐かく父はやっぱり畳の間　山本　昌乃
佳　いつもの席でいつもの人と飲んでいる　平井美智子
佳　落ち着いた暮らし退屈とも思う　うちだあつこ
佳　落ち着くと面白くない人になる　城崎　れい
佳　落ち着いているというより無関心　森下　博史
佳　味噌よりも豚骨よりも醤油だな　稲垣　康江
人　水になる前の湿りのなかにいる　怜
地　断定の助動詞にそう云われたら　雨森　茂喜
天　珈琲は濃い目にひとりきりの午後　新家　完司

投句方法　【川柳塔】を検索→【川柳塔 WEB 句会】をクリック
senryutou.net/html/index02.html　（サイト管理　森山文切）

暑中お見舞い申し上げます

西宮北口川柳会

例　会　毎月第２月曜日　午後１時　西宮市立中央公民館
（阪急電鉄神戸線西宮北口下車　南出口徒歩３分）
プレラにしのみや６F

投句先　〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602　梅澤盛夫

久保田千代　北野哲男　北島邦男　北川美香　筧　靖夫　川　良種　河合敏夫　亀岡哲子　片山宣子　金川靖忠　加川洋鬼　奥澤次郎　大矢伸　大坪一徳　緒方美子　奥田み津子　榎　つ子　江島谷忠夫　延寿庵勝弘　梅澤野霸　上田盛夫　上田ひみ　井上和宏　市坪じろう　足立武臣　秋元つな子

野口真桜子　西口い わ ゑ　長縄嘉代子　長野峰明　長島敏子　難波伯備　七反田順子　長浜美籠　中西豊子　富山ルイ子　冨永恭子　都倉求芽　寺井富次　寺兼秋果　近田敦子　田中章子　竹山千賀子　瀬島流れ星　神野千恵子　佐藤健彦　酒田浩司　酒井紀華　小林わこ　黒田能子　小田紀乃　蔵山光子

両川　山田　山崎　山口　山口　山口　山内　山野　矢上　村本　宮　みぎわ　松村　丸山　牧渕　前川　堀　古川　福田　藤原　藤本　藤岡　藤井　福島　能勢

無限　昭九朗　耕治　武彦　ヨシヱ　光久　弘委智　野迪　氷薫　喜筆　は明　輝な　一彦　富喜之　千津子　正子　奮和　正水　みよし　り直　宏こ　弘造　利子　子

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔すみよし

会長　古今堂蕉子

甲田　吉川　北村　川端　加島　小野　奥村　大西　大隅　大治　大内　榎本　榎本　江島谷　宇都　内田　井丸　磯島　石橋　荒川　浅井

靖子　哲矢　賢子　一歩　由一　雅美　五月　晴雄　克博　重信　朝子　舞夢　日の出　勝弘　満知子　志津子　昌貴　福紀　直子　博子　公行　平

橋本　萩尾　西出　長髙　長浜　中村　中川　中島　中井　土井　飛永　鶴田　田中　立中　鈴石　柴木　佐々木　阪本　坂井　古今堂

典子　紀子　楓楽　俊雄　美籠　民子　ひろ介　栄子　崩　舞蹴　ふりこ　遠野　ゆみ子　廣子　郁子　いさお　ばっは　満作　美世子　裕之　蕉子

吉村　横山　山本　山本　山根　山岡　矢倉　森松　森松　宮本　宮崎　三宅　松下　松崎　増田　藤原　藤原　藤島　藤井

久仁雄　里子　半進　妙錢　冨美子　五月　芳香　まつおん　かりこ　シマ子　保州　小枝子　大輔　隆昭　大子　昭　たかこ　宏造

暑中お見舞い申し上げます

川柳あまがさき

会長　長浜美籠

足立つな子　木山歌留多　古川　奮水
池野　英坊　九鬼　洋子　細川　花門
石川きよみ　小山　聖也　堀　正和
市坪　武臣　酒井　紀華　松村　里江
入江　修平　酒井　健二　森　菊江
三好　京江　坂本　晴美　森　たみえ
上田ひとみ　竹林千代子　森松まつお
江見　見清　竹山千賀子　森松　芳香
大浦　初音　田中　章子　山口ヨシエ
奥村　五月　谷　祐康　山田　耕治
長川　哲夫　鶴田　遠野　渡辺　柳明
加川　靖鬼　都倉　求芽　鈴木　新録
片山かずお　中川ひろ介　岸田　万彩
釜野　公子　永田　紀恵　桝本　宏子
河津　正治　野口真桜子　山田　葉子
北川　純　平井　富夫　谷口　修平
北野　哲男　藤岡　りこ
木藤こみつ　藤田　雪菜

例会　毎月第二火曜日
場所　尼崎女性センター・トレピエ

川柳　葦群

■主な内容
同人作品「葦群抄」
近詠作品「葦の原」
作品鑑賞　新家完司・大西泰世
柳論　エッセイ　句会報　ほか

■A5版　45頁　季刊（年4回）
年間 4000円（〒込）
発行人・編集人　梅崎流青

〒832-0087 福岡県柳川市七ツ家426　TEL.0944-72-6046
振替口座　01760-2-120254
E-mail　house7@cello.ocn.ne.jp

暑中お見舞い申し上げます

河内長野川柳協会

顧問　板尾岳人

長柳会・プラザ川柳

会員有志

山岡　冨美子
村上　直樹
坂上　淳司
黒岩　靖博
山室　光弘
辻村　ヒロ
木見谷　孝代
大島　ともこ
石田　隆彦
森田　旅人
梶原　弘光
藤塚　克三

暑中お見舞い申し上げます

卑弥呼の里川柳会

真島久美子

〒689-0411
佐賀県神埼郡吉野ヶ里町大曲 2426-2

第七回　卑弥呼の里廿流川柳大会

日　時・平成三十年七月二十九日（日）
　十二時開場　十三時締切（欠席投句拝辞）
会　費・千円（天地人賞を準備しています）
会　場・吉野ヶ里公園駅コミュニティーホール
　吉野ヶ里公園駅北口に隣接しています
お　題・「予感」「守る」「リズム」「こそこそ」「翼」
　（各題二句）
女子会（ティーパーティー）
会　場・同会場で、大会終了次第始めます。
会　費・五〇〇円
※今大会は女性のみの大会になっていますので男性はご遠慮下さい。

暑中お見舞い申し上げます

翠　洋　会

浅井　公平　　高杉　千歩
安土　理恵　　髙橋　敬子
安福　和夫　　谷口　　義
阿部　紀子　　辻内げんえい
指宿千枝子　　津村志華子
岩本　浩二　　寺井　弘子
榎本日の出　　飛永ふりこ
榎本　舞夢　　西出　楓楽
大川　桃花　　能勢　良子
大久保眞澄　　原田すみ子
太田　　昭　　前川　善之
奥田みつ子　　山本希久子
古今堂蕉子　　横山　捷也
小谷　集一　　米田　恭昌
佐々木満作　　渡辺　富子

暑中お見舞い申し上げます

竹原川柳会

会長　小島蘭幸
会計　岩本笑子
　　石原淑子
　　古田太虚
　　土井輝恵
　　若年幸子

ほか会員一同

暑中お見舞い申し上げます

湯川胃腸病院

・消化器内科・脳血管内科・放射線科
・緩和ケア（ホスピス）〔健保取扱〕
併設：デイサービス・ショートステイ

ISO9001 認定施設・緩和ケア病棟質向上認証施設

■診察受付　月～金 8：30～16：00（土 8：30～11：00）

JR 桃谷駅徒歩 3 分　TEL.（06）6771-4861

湯川胃腸病院　検索

暑中お見舞い申し上げます

川柳ふうもん吟社

会長　両川無限
会員一同

事務局：〒689-0202 鳥取市美萩野2丁目171-3
中村金祥方
TEL 0857-59-1056

月例会：毎月第4日曜日　13:00～
会　場：砂場隆浩事務所（鳥取市片原1丁目107）

暑中お見舞い申し上げます

富　柳　会

池　森子　石橋未知
中井アキ　久世高鷲
山野寿之　井澤壽峰
肥山一文　田嶋伸雄
関よしみ　沢田和子
中村惠　松本正治
栃尾奏子　福元田鶴子
藤田武人　都筑文重
林澄子　他一同
森下よりこ

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔さかい

会長　村上玄也
副会長　矢倉五月

綾田清　石田ひろ子
出海素頓馬　井上洋一
内田志津子　宇都満知子
梅木澄空　榎本舞夢
太田としお　太田扶美代
奥時雄　小野雅美
柿花和夫　楠井輝子
源田八千代　齋藤さくら
澤井敏治　柴本ばっは
島田誠一　髙木世紀子
田中廣子　田中ゆみ子
谷川憲　玉瀬富夫
津田シルク　遠山唯教
徳山みつこ　内藤憲彦
中野健吾　中林佳子
原清晋　日野愿
伏見雅明　古川光雄
増井ヨシ枝　升成好
宮本かりん　向井清
山岡冨美子　山根妙子
山本半錢　山本進
米澤俶子

暑中お見舞申し上げます

川柳塔鹿野みか月

会員一同

会長　森山盛桜

川柳の理論と実践

楽しく読み進むだけで実力がつく〔川柳の理論と実践〕。このたび第３刷ができました。まだお持ちでない方は、是非この機会にお求め下さい。

四六版ソフトカバー　326頁。送料＋消費税＝2,000円

〔ご注文は下記へ。ハガキかFAXにて。お支払いは到着後で結構です〕

〒689-2303　鳥取県東伯郡琴浦町徳万597　新家完司
FAX専用　0858-52-2449

暑中お見舞申し上げます

南大阪川柳会

会員一同

住まいの情報センター（地下鉄谷町線・堺筋線 天神橋６丁目駅③出口）
原則として第４月曜日・６時から（８時終了）

暑中お見舞申し上げます

サークル 檸檬

浅野房子
井丸昌紀
太田扶美代
奥田みつ子
片岡智恵子
久保田千代
古今堂蕉子
長浜美籠
西口いわゑ
西出楓楽
西村哲夫
前たもつ
松尾美智代
山口光久
山本加お里
山本希久子
吉村久仁雄

暑中お見舞い申し上げます

ほたる川柳同好会

水野黒兎
小牧信男
宮田輝
藤原桂子
寺井柳童
多田契子
荒木郁子
貝塚正子
永森美佐子
斎藤奈津子
中内孚彦
藤沢長一
高嶋勝
田中螢柳
栗田久子
中山春代
池田純子
樋口順子
上田陽子
上山堅坊
倉本一弥
藤井則彦

句会 第二火曜日 午後一時より
勉強会 第四火曜日 午後一時より
場所 豊中市蛍池公民館

暑中お見舞申し上げます

豊中もくせい川柳会

会員一同

暑中お見舞申し上げます

京都塔の会

会員一同

暑中お見舞い申し上げます

川柳さんだ

会員一同

例会：毎月第3火曜日 13時・JR三田駅前 キッピーモール6F

暑中御見舞い申します

川柳藤井寺

会員一同

代表　鴨谷瑠美子

暑中御見舞
申し上げます

川柳塔唐津

岩崎實
坂本朗
仁部四郎
山口高明

大阪川柳の会

事務局　〒532-0025　大阪市淀川区新北野1-3-4-706　本田智彦 方
TEL 06（6303）7297

代表
礒野いさむ

世話人
足立淑子
井上かれん
池田武彦
碓氷祥昭
大堀正明
伊達郁夫
内藤光枝
藤井満洲夫
本田智彦
森口美羽

◎会場　駅前第二ビル5階（大阪市北区梅田1-2-2-500）　※開場　午後1時

和歌山県川柳協会

会　　長　三宅　保州
副会長　川上　大輪
［お問い合せ先］　事務局長　古久保和子

〒640-8111 和歌山市新通7丁目17
TEL 073－423－8930

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔わかやま吟社

同　人　一　同

事務局　〒640-8482 和歌山市六十谷1188-14
川　上　大　輪　方
電話・FAX 073-462-7229

暑中お見舞申しあげます

和歌山三幸川柳会

主　　幹　三宅　保州
理事長　古久保和子
副理事長　喜田　准一
副主幹　磯部　義雄
〃　川上　智三
理　事　田中　みね
〃　玉置　当代
〃　楠見　章子
〃　武本　碧
〃　森口　美羽
〃　宇野　幹子
〃　石田　ひろ子
〃　山東　日出男

事務局　〒640・8111
和歌山市新通七―一七
古久保　和　子　方
TEL 073・423・8930

例会　毎月第四土曜日　12時30分
和歌山商工会議所
「バス停　和歌山市役所前」

暑中お見舞申し上げます

八尾市民川柳会

会長　中薗　清　　会員一同

暑中お見舞い
申し上げます

川柳茶ばしら

早川　遡行
板山　まみ子
山本　三樹夫
脇田　雅美
金子　美千代
関本　かつ子

川柳大阪

会長　山崎　珠生

暑中お見舞い申し上げます

浅田河南子　中園　功
磯島福貴子　長髙　俊雄
今井万紗子　長浜　美籠
上山　堅坊　中原比呂志
宇都満知子　中村　喜楽
江島谷勝弘　長谷川　司
大内　朝子　東川世志子
大野　照月　堀田　温子
奥村　五月　前田　紀雄
河田冨美子　宮西　弥生
川端　一歩　森松まつお
北村　賢子　森松　芳香
古今堂蕉子　門野　隆司
小林　わこ　矢倉　五月
阪井美世子　山田かよこ
鈴木いさお　山本　昌代
高木　信酔　芳　鉄心
滝沢　美濃　和田　和
手崎　川童

暑中お見舞申し上げます

いずも川柳会

会長　竹治ちかし
会員一同

事務局　〒693-0026　出雲市塩冶原町3-1-5　竹治ちかし方
TEL 0853-22-4309

暑中お見舞い申し上げます

はびきの市民川柳会

会長　徳山みつこ　　会員一同

暑中お見舞申し上げます

岸和田川柳会

岩佐ダン吉
増田隆昭
雪本珠子
藤原　昭
松崎大輔
石田ひろ子
岸井ふさゑ
小島笑司
助川和美
次井義泰
中岡香代
仲谷弘子
藤井康信
宮野みつ江
飯田忠太
桐島カズ子
井岡一子
井上益男
三宅白水

柿花和夫
海信二
髙橋律雄
立藏信子
出原誠夫
中里はこべ
中原宏之
西田喜代志
不破仁緑
松浦英夫
向井清
三宅保州
梅原洋二
花篤茂
鈴木益子
阪口たかお
西岡義博
木村心

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔みちのく

主幹　福士慕情

同人一同

事務局　〒036-8275 弘前市城西1－3－10
稲見則彦（☎0172－36－8605）

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔まつえ吟社

主幹 石橋芳山

同人一同

連絡先　〒690-0001 松江市東朝日町206－7
石橋芳山方
TEL. 090－2003－5846

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔なら

会長　安土理恵
副会長　安福和夫
副会長　宇賀史郎
会計　飛永ふりこ
世話人　大久保眞澄
〃　加門萌子
〃　高橋敬子
〃　高畑おたか
〃　仲西賛郎
〃　仲堀優
〃　長谷川崇明
〃　渡辺富子
会計監査　江島谷勝弘
顧問　中原比呂志

暑中お見舞申し上げます

城北川柳会

江島谷勝弘　近藤正　小林杁香　永井縣筰　綱島榮子　藤原千恵子

暑中お見舞申し上げます

川柳塔きゃらぼく

会員一同

事務局　〒683-0804 米子市米原5-1-3-304
TEL 0859-21-7656　竹村紀の治

暑中お見舞申し上げます

鳥取県川柳作家協会

会員一同

会長　牧野芳光

〒682-0034 倉吉市大原637-3
TEL. 0858－23－0140

暑中お見舞申し上げます

川柳塔社

主幹　小島蘭幸

理事長　新家完司

副主幹　川上大輪

副理事長　木本朱夏

副理事長　鶴田遠野

常任理事　石田隆彦　居谷真理子

内田志津子　江島谷勝弘

大久保眞澄　片山かずお

久保田千代　島田誠一

鈴木いさお　内藤憲彦

中川ひろ介　藤井宏造

松原寿子　藤村亜成

森松まつお　吉村久仁雄

川柳塔社常任理事会

編集後記

★幻の中に時計が鳴っている　路郎

★車・カラーテレビ・クーラーが三種の神器ともてはやされ、若い女性の脚には新発売のパンティーストキング、トップモードのパンタロンの裾をヒラヒラさせて加山雄三の「君といつまでも」が流れる街を闊歩。大松博文のベストセラー『なせばなる』『俺について来い』に活を入れられた昭和40年、大学生が100万人を突破。国中が右肩上がりに大きく動き出していた昭和40年7月7日、路郎はこの世を去った。その後に訪れるいざなぎ景気の恩恵に浴することもなく、苦渋の78年の生涯だった。

★出久根達郎氏の随筆には定評がある。氏のご好意により『貧乏神さま』を転載させて戴いた。氏はお若いころから古書店を経営されていた。『作家の値段』（講談社文庫）には古書にまつわるあれこれが興味深く綴られている。また川柳に並々ならぬ関心がおありのことは随筆の随所に伺える。機会があれば氏の川柳観をお聴きしたいものだ。

★古川柳研究の第一人者清博美氏がご多忙中にもかかわらず、目次下をご執筆くださった。路郎と親しかった石曽根民郎の記念文庫設立に奔走された川柳愛には胸が熱くなった。路郎の「遠く来て信濃に山のない日なり」には「雨の松本にて」と前書きがある。民郎に逢った時の感慨であろう。路郎没後53年目の7月号を飾ってくださった出久根氏、清氏に心よりお礼を申し上げます。

★先頃放映されたNHKの「ためしてガッテン」の「寝たきり予防法」の一つを紹介しよう。「人と人の繋がりが大切、人に親切にする、人とわいわい喋る、食べる」それらが有効という。抜けた抜けないはさておき、句会後の飲み会とお茶の時間を楽しみたい。　（朱夏）

△近ごろは「報連相」よりも「確連報」らしい。「かくれんぼう」と読む。確認・連絡・報告である。今どきは、先ず自らが状況をよく確認した上で事に当るべしとのビジネス用語。

△今どきの虚偽不正改竄隠蔽口裏合わせの無責任体質の反映か。うっかりしてると自己責任となるとの意味もある。

△私事だが、おばちゃんに最近、駐車場で後部に車を当てられて修理代を6万円。直後また、家の鍵を通院先で、たぶん置き忘れて鍵交換代を4万円支払った。うっかりでは済まぬ「確認は金なり」を実感した。

△また先日、「謝罪劇」を「謝罪罪」と誤記して出句しお叱りを受けた。「出来た句をもう一度見直しなさい。できれば音読して」と先輩から指導を頂いてるのに。確認せず情けない思いをした。何事にも「確認第一」後悔しないよう折折に、「かくれんぼう」（確連報）と呪文を唱えて、しっかりと確認しようと思っている。編集校正においても。　（憲彦）

ひとこと

股関節自力で回復

私が股関節を痛めたのは五年前のこと。整形外科で股関節が摩耗しているが、まだ手術の必要はないと言われ、股関節予防の絵図を貰って帰りました。

一日二回と書いてある予防ストレッチを、旅行と川柳が生き甲斐の私は、早く治したい一心で日に四、五回やっています。テレビなどで股関節に良いと言っているとそれも付け加えます。

朱夏さんから「私は手術で治ったから」とご親切なお電話を戴きましたが、手術で全部良くなった人ばかりでない事を知っていましたから、何とか手術しないで治したいと思っていました。

五、六ヶ月続けた頃から家の中では杖無しで歩けるようになり、一年くらい前からは坂道や石段以外は杖無しで、一日一万歩くらいは歩けるようになりました。好きな旅行も楽しんでおります。

リハビリ体操を止めたら筋肉が衰えて、また元の木阿弥になるからと、今もずっと続けております。

（黒田　茂代）

「川柳塔」への投句について

(1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。

(2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。

(3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。

(4) 各欄への投句数および**投句締切期日の厳守**をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時までにお願いいたします。

作品募集

9月号発表（7月15日締切）

川柳塔（8句）　小島蘭幸　選
水煙抄（8句）　西出楓楽　選
愛染帖（2句）　新家完司　選
檸檬抄「頭」（川端一歩　山岡冨美子　共選）
インスピレーション・ナビ（2句）　大西泰世　選
「組む」　谷口義　選
一路集（2句）
「少し」　藤井智也　選
初歩教室
「ルーツ」（3句）　居谷真理子　担当

10月号
檸檬抄「返す」
一路集「ネット」「爪」
初歩教室「ぴったり」

路郎忌本社7月句会

とき　7月6日㈮　13時開場・13時40分締切
ところ　アウィーナ大阪　4階　金剛の間
天王寺区石ケ辻町19―12　電06・6772・1441
おはなし「しぐれの中へ」　木本朱夏氏
席題「　」　山本希久子　選
兼題「持つ」　松尾美智代　選
「さらり」　北野哲男　選
「細かい」　三宅保州　選
「旅」　美馬りゅうこ　選
「想像」　小島蘭幸　選
（各題2句以内）
会費　1000円　**投句料**　500円（切手可）

本社8月句会
9日（木）午後1時から
兼題「写真」「たたむ」「ぴょん」「袋」「威力」

川柳塔WEB句会のご案内

課題「ビル」　平宗星　栃尾奏子　共選
締切　7月20日　**発表**　7月25日頃
投句料　無料
インターネットで「川柳塔」を検索しWEB句会をクリックしてご投句ください。

定価　八百円（送料91円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）
二〇一八年（平成三十年）七月一日発行
発行人　小島和幸
編集人　木本朱夏
印刷所　美研アート
発行所　川柳塔社
〒543-0052　大阪市天王寺区大道一―一四―一七　花野ビル201号室
電話（〇六）六七七九―三四九〇番
振替　〇〇九八〇―四―二九八四七九番

川柳・俳句・エッセイ・小説
新聞・広告・ポスター・伝票等
あなたの思いをかたちにします。

美研アート
〒530-0022 大阪市北区浪花町9-4
TEL（06）6372―1178
FAX（06）6372―1196
E-mail：bikenart@ea.mbn.or.jp

川柳塔のホームページアドレス　senryutou.net/html/index02.html

平成三十年七月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一〇九四号　川柳塔　七月号　定価　八百円（送料　九十一円）

オニザキの プレミアムロースト
つきごま
杵つき製法の「すりごま」

袋を開けた瞬間に広がる、香ばしい薫り。舌と記憶にしっかりと残る、深いコク。料理をより美味しくするゴマを作りたい、真っすぐな想いから生まれた逸品。それが「プレミアムロースト」。素材本来の良さを余すこと無く引き出した、オニザキの自信作をお届けします。

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL フリーダイヤル 0120-30-5050

1講座 90 分、 全 40 講座をお好きなものから受講できます。
心理学基礎コース
春開講 受講生 募集！
フロイト、ユングや話題のアドラー心理学、箱庭療法やコラージュなどアート系の学び知りたかった「こころの不思議」を学べます。

経験豊富な講師陣から、心理学の基礎を見て、聴いて、声に出して、全身で体感しながら学んでいただけます。
初心者の方がたくさん来られる講座です。

箱庭療法の講座で実際に作ります。

無料体験講座お申込み受付中
心理学基礎コースや、こころ学びのことがよくわかる無料体験講座を実施しています。 下記URLまたはQRコードから、お気軽にお問い合わせください。
https://www.kscc.or.jp/?p=6421

お申し込み・お問い合わせ
公益財団法人 関西カウンセリングセンター
〒530-0047 大阪市北区西天満 2-6-8堂島ビルヂング5階
▼京阪本線・地下鉄御堂筋線「淀屋橋駅」1番出口より北へ5分
▼京阪中之島線・「大江橋駅」5番出口より北東へ3分
TEL 06-6809-1225　FAX 06-6809-1226　MAIL koza@kscc.or.jp
HP https://www.kscc.or.jp　関西カウンセリングセンター　検索

雑誌 05703－7

本誌 P113 の西日本川柳大会の案内は間違いです。
こちらをご覧ください。

第70回　西日本川柳大会

弓削川柳社創立70周年

と　き　**30年10月14日（日）**　9時～16時
ところ　岡山県久米郡久米南町下弓削
久米南町文化センター
第1部　兼題(投句)**7月10日(火)　必着**
「ドラマ」　古今堂蕉子　選
「小　銭」　高木　勇三　選
「手　紙」　矢沢　和女　選
投句料　1000円（郵便小為替）
投句先　〒709－3614
岡山県久米郡久米南町下弓削446－2
弓削川柳社宛（電話　086－728－3540）
応募封筒表に「西日本川柳大会」と朱書のこと
第2部（当日）各題2句・特別席題1句
欠席投句拝辞
兼　題（大会当日11時締切）
「大　地」　赤井　花城　選
「　赤　」　小島　蘭幸　選
「追　う」　新家　完司　選
「輝　く」　やすみりえ　選
特別席題（当日発表）　長谷川紫光　選
参加費　2000円
主　催　弓削川柳社